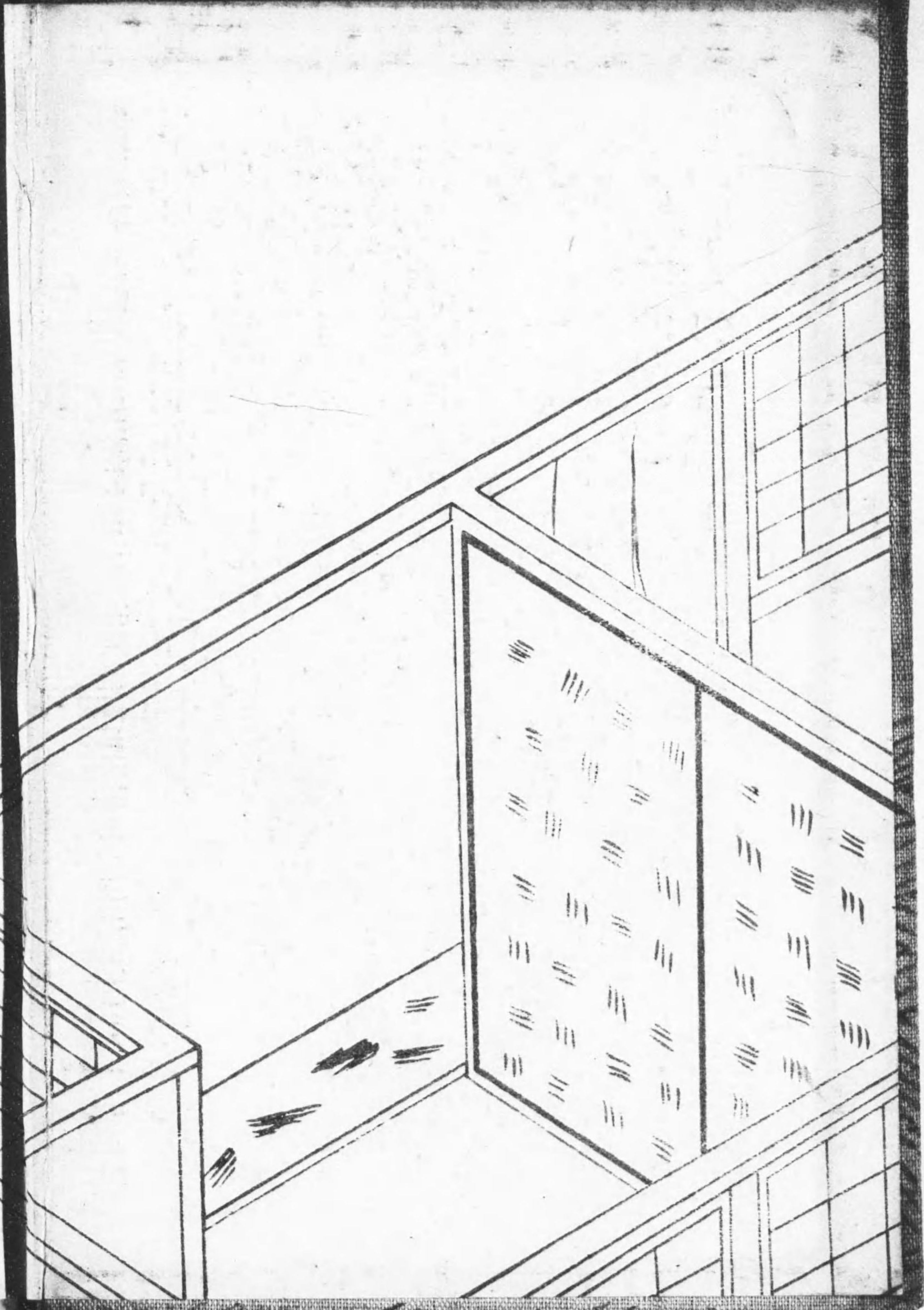
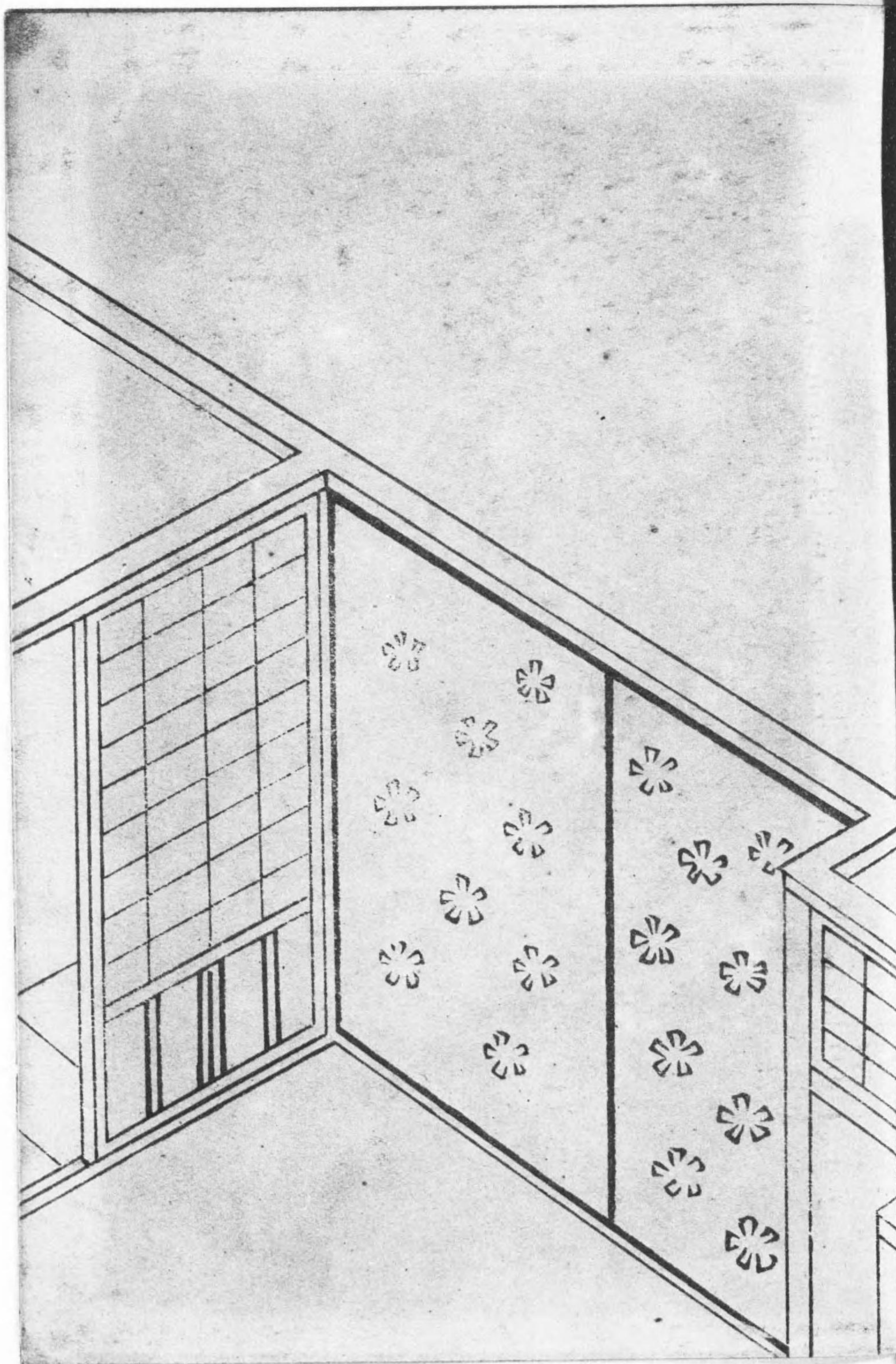


539
8



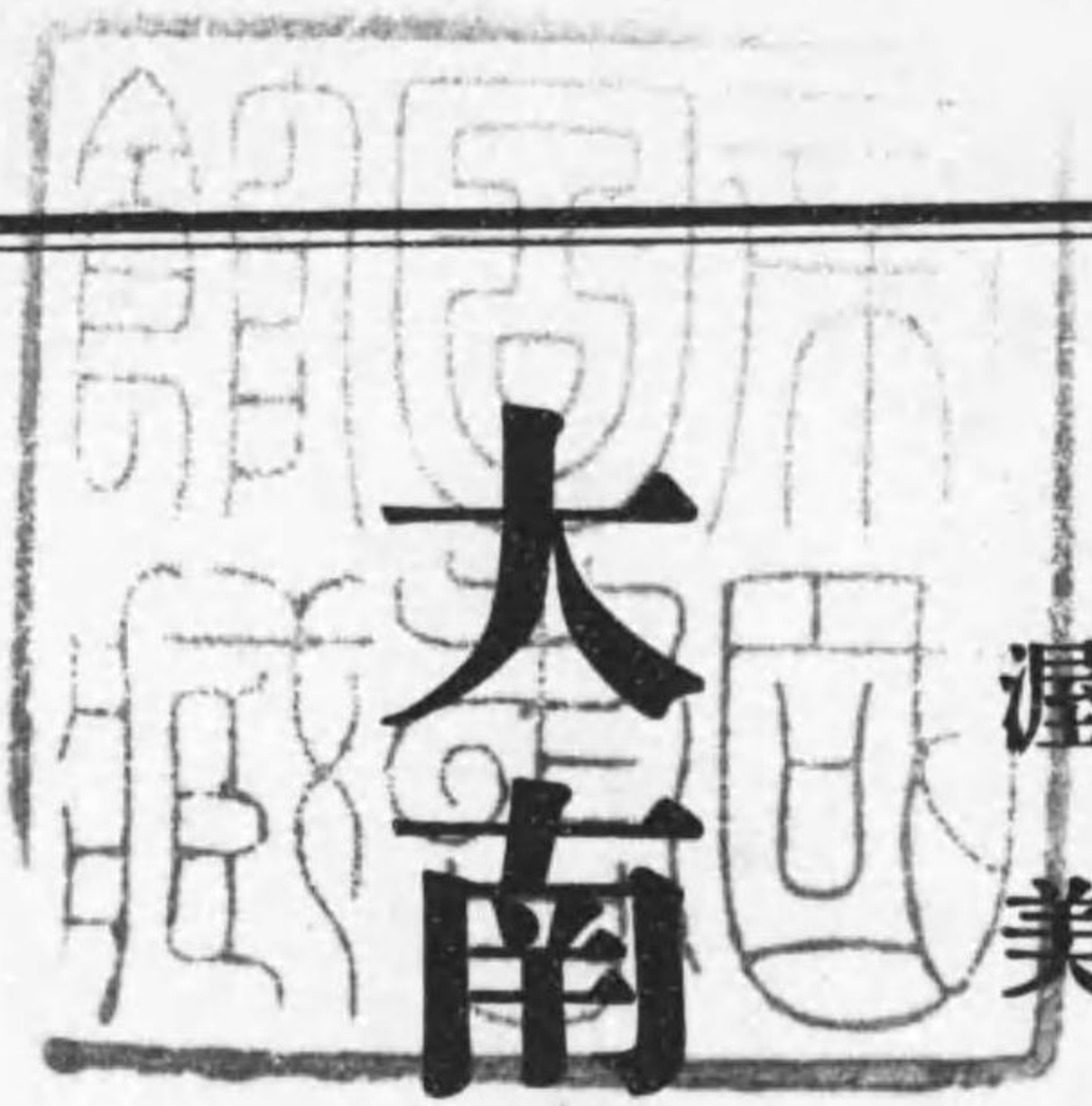
始





大南山人集

第十三卷



大南北全集 第十三卷

文學博士 坪内逍遙 渥美清太郎 共編

東京 春陽堂 刊行

大正 14. 11. 17 内交



大南北全集 第十三卷目次

解説及年表……………自一頁至一六頁
挿繪解説……………

狂言生 浮世柄比翼稻妻……………自一頁至三五頁

名古屋山三と不破伴左衛門
權八小紫と幡隨長兵衛

夏狂言 雙雜石尊贖……………自五二頁至七〇頁

澤井股五郎と荒木政右衛門
宮城野信夫と佐々木巖柳

挿繪目次

- ◎浮世柄比翼稻妻（鞘當の場錦繪。色刷り木版。五渡亭國貞筆）……卷 頭
- ◎浮世柄比翼稻妻（鈴ヶ森の場錦繪。コロタイプ版。五渡亭國貞筆）……二三頁の前
- ◎浮世柄比翼稻妻（長谷寺の場錦繪。コロタイプ版。三世豐國筆）……四頁の前
- ◎浮世柄比翼稻妻（山三宅の場錦繪。コロタイプ版。三世豐國筆）……三九頁の前
- ◎浮世柄比翼稻妻（八百善の場錦繪。コロタイプ版。五渡亭國貞筆）……一九三頁の前
- ◎浮世柄比翼稻妻（大門口の場錦繪。コロタイプ版。五渡亭國貞筆）……四九五頁の前
- ◎雙石尊 贖（圓覺寺の場錦繪。コロタイプ版。五渡亭國貞筆）……四九九頁の前
- ◎雙石尊 贖（三圍堤の場錦繪。コロタイプ版。初代豐國筆）……五七頁の前
- ◎浮世柄比翼稻妻（初演當時の繪本番附全部。亞鉛版）……本文挿入
- ◎幔雜石尊 贖（初演當時の繪本番附全部。亞鉛版）……本文挿入

挿繪解説

■口繪に挿入した木版刷り三枚續きの錦繪は、「浮世柄比翼稻妻」鞘當の場の錦繪である。但し初演のではない、二度目の、文政十年の折に發行されたものである。それと、二七三頁の前へ挿入した、大門口の場の錦繪も、矢張り二度目の折のである。筆者はいづれも五渡亭國貞である。

■「鈴ヶ森の場」の二枚續きと「八百善の場」の一枚物とは、共に初演當時の錦繪である。

■「山三宅の場」と「長谷寺の場」とは、共にズツと後の、文久元年一月市村座所演の折ので、三代目豊國の筆である。古い錦繪に適當なものが見当たらなかつたので、場面の面影を見せる葉に、稍新らしいながら挿入して置いた。この時の山三は河原崎權十郎、岩橋とお國とは澤村田之助、伴左衛門は中村芝翫である。

■「幔雜石尊贖」に入れた錦繪は、二種とも初演のもので、初代豊國と國貞が描いたものだ。

■兩狂言とも、初演の折の繪本番附があつたので、凸版にして本文中へ挿入して置いた。



市川團十郎

尾上菊千代

里國画

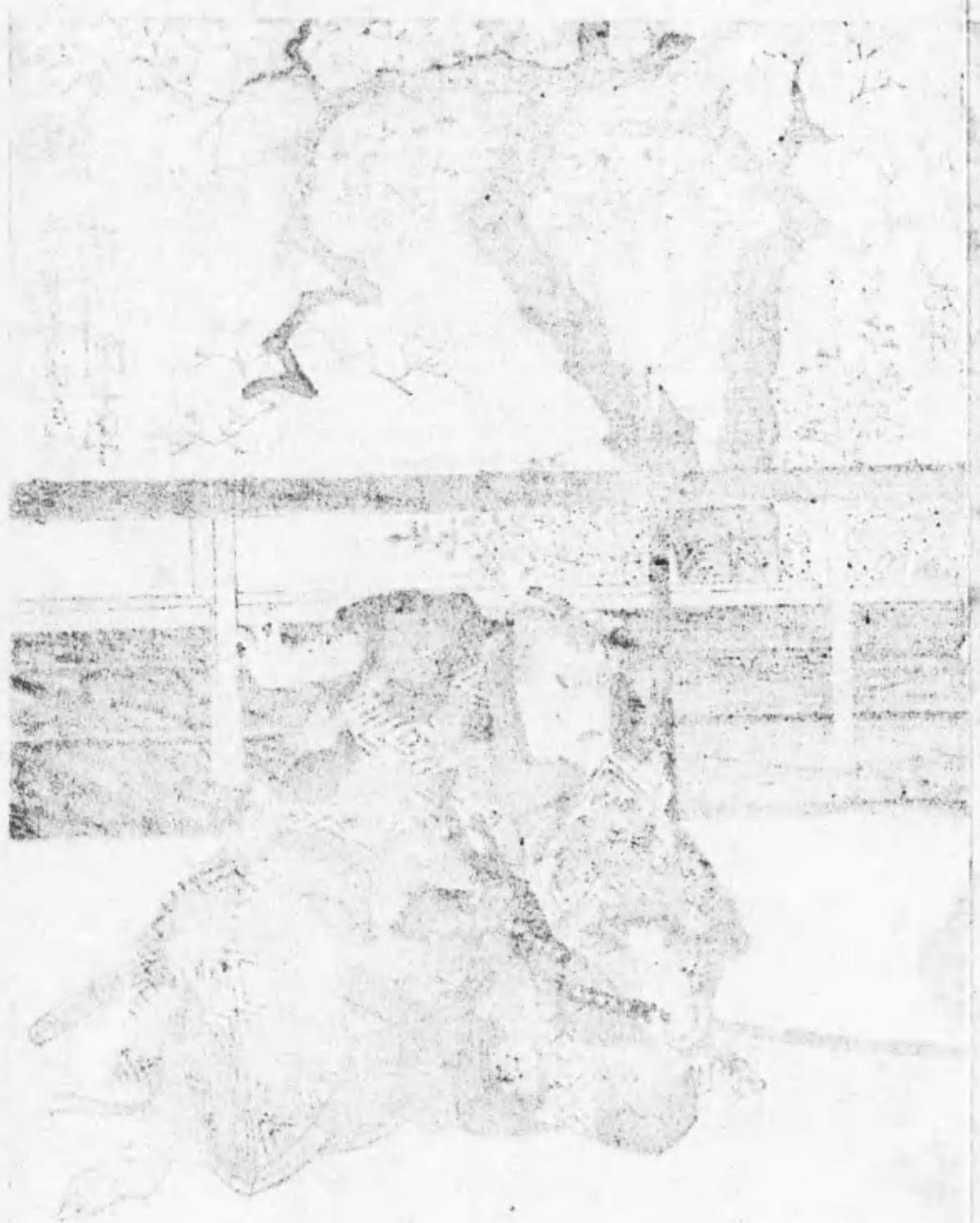
岡心突六依侍馬
市川團十郎

岩井
半四郎

尾上菊五郎
名屋山三

里國画





解説及年表

浮世柄比翼稻妻

この狂言は、南北が六十九歳の春、文政六年三月の市村座へ書き卸したもので、南北が作中では、興行度数も第一に位し、作そのものも非常に優れてゐる。南北が得意な手法、二つの世界を一つに纏めて、複雑な筋を立てる事が、この脚本では非常に成功してゐるのである。即ちこれは、不破名古屋の「稻妻表紙」と、権八小紫の「比翼塚」とを打つて一丸としたものである。初演の際は勿論、興行する毎に、いつも大入をしめた狂言である。

有名な不破名古屋の「鞘當」——それは團十郎の希望によつて、古劇を改作したものであるが、この脚本がその初演なのである。争ひの隠語を「鞘當」といふのは、この狂言から來てゐるのだ。南北としては比較的後期の作ではあるが、狂言に絡はる因縁は深い。先づその事實から説いてゆかねばならぬ。

名古屋山三郎は、蒲生氏郷の小姓であつた。非常な美少年で、その容貌が氏郷の目にとまつて、抱へ

られたのである。氏郷が死んでからは、京へ上つて出雲のお國と馴れ染め、下男の猿若を使つて今様狂言を仕組み、お國の念佛踊と共に公衆に見せたのである。山三郎は歌舞伎劇にとつては非常な功勞者である。が終りはよくなかつたらしい。その美貌が仇をして、身持ち悪さに京にもゐられず、後に姉の緣故から津山の森家へ便つて三左衛門と改名し、家老職まで上つたが、井戸理兵衛といふ者を、主命によつて討たうとして、反つて山三が討たれたといふ。兎に角、お國と共に歌舞伎を興行してゐた間の名古屋山三郎は、一世に喧傳された京での風流名物男であつた。

不破伴左衛門は、不破萬作の事である。萬作は、關白秀次のお側に仕へた小姓で、これも美男の聞えはあつたが、山三郎と何も直接交渉があつた譯ではなく、單に同じ時代にゐたといふだけの事である。また、葛城といふのは、山三郎が京都にゐたとき、深く云ひ交した傾城の名で、これも萬作と何も縁もない。

名古屋山三、不破伴左衛門——萬作を作りかへて——、葛城。この三人の名を使つて、淨瑠璃と、歌舞伎と、兩方とも、殆んど同時に脚色された。淨瑠璃は、山本土佐掾の正本で、「名古屋山三」といふ外題である。何人が作つたものか、いつ出來たのか、詳細は不明であるが、延寶年間である事は想像される。また歌舞伎の方は、延寶八年に市村座で興行されたので、名題を「遊女論」といふ。どちらにも、

名古屋山三、不破伴左衛門、傾城葛城、の三人が出る。どちらが先に出來たのか、いまは解らない。恐らく土佐淨瑠璃の方が先であらう。この淨瑠璃は六段續きで、正本は現存してゐる。山三と伴左衛門は朋輩であるが、一緒に島原へ傾城買ひに行つて、山三は上林の葛城と深く云ひ交し、伴左衛門が葛城に横戀慕するところから、仲のよい友同士が争ふやうになり、伴左衛門は山三と間違へて、山三の父、三郎右衛門を暗討ちにし、のち島原の廓の中で、山三は伴左衛門を仕留めるといふのが終りである。女の爲に伴左衛門が、敵役に變るあたりは中々面白い。

「遊女論」は、どんな狂言であつたか解らないが、敵役の伴左衛門を元祖市川團十郎、山三を村山四郎次、葛城を伊藤小太夫が勤めて、大當りを取つた。不破伴左衛門といふ役は、初代團十郎が當つたところから、市川家と由緒が深くなり、七代目團十郎が歌舞伎十八番を選定する折にも、脚本は不明でありながら、その中へ「不破」を加へて置いたのである。

初代團十郎の不破が大當りであつたといふ事は、殆んど續げざまに、團十郎が伴左衛門の役を演じてゐたのも解る。「遊女論」以後、天和三年の森田座では「女君二河白道」といふ名題で、山三が市川新九郎、梅津掃部が宮崎傳吉に、團十郎は伴左衛門である。この梅津掃部といふ役名は、前の土佐淨瑠璃「名古屋山三」にも出て、斯種の狂言には非常に關係が深い。貞享三年の中村座では「不破即身雷」で

同じく伴左衛門、元祿二年中村座「名護屋大全」では、村山四郎次の山三で同じ役。元祿四年中村座の「不破伴左衛門島原通」で同じ役。元祿七年森田座「葛城弘徽殿」では、中村七三郎の山三、澤村小傳次の葛城に同じ役。元祿八年中村座「不破名古屋初冠」では、中村七三郎の山三、岡田左馬之助の都の葛城、澤村小傳次の東の葛城に同じ役。これ等の脚本は何れも多少は違つた筋ではあつたらうが、役柄は大同小異の伴左衛門を、初代團十郎はいつも好評の下に勤めてゐたのである。

元祿十年一月、團十郎が上方から戻つて来て、「參會名古屋」を演じたが、この狂言は「不破」に取つても重要なものである。不破は矢張り團十郎、名古屋は矢張り村山四郎次、葛城は荻野澤之丞であつた。この狂言の伴左衛門は、最初は立役で、敵役の太宰之丞を北野天満宮で取挫ぐ所などがある位である。この扱は歌舞伎十八番「暫」の初演であるのから見ても、「參會名古屋」が戯曲史上、重要な脚本である事が認められる。さうして、三番目にはいはゆる「鞘當」の場があり、後に揚屋の場で、葛城の容色に迷ひ、敵役に變つて、最後に切腹して果てるのである。伴左衛門の性格は、近代的とでもいひたいやうに、面白く書かれてゐる。

その外、團十郎は、元祿十二年の中村座の「葛城小夜嵐」、同年森田座の「當世阿國歌舞伎」、元祿十四年の中村座「葛城吳越戰」でも同じく伴左衛門を勤めて、いつも當りを取つてゐた。それが二世團十郎にも傳はり、享保十一年七月の中村座「末廣名古屋」を初演に、二世團十郎も度々伴左衛門の役を演じ、大阪へ登つた時までも出し物にしてゐた。市川家以外の役者でも、大谷廣次、中島勘左衛門、坂東又太郎等が伴左衛門の役をやつてゐる。江戸の芝居には、不破名古屋の世界が非常に流行つたのである。淨瑠璃の方にも、有名な作が二つある。一つは、寶永二年八月、竹本座に興行した「傾城反魂香」

で、作者は近松門左衛門、例の吃又の淨瑠璃であるが、これには高島の館のお家騒動が搦んで、伴左衛門と山三は敵役と立役の代表となり、狂言廻しの役をつとめた揚句が、伴左衛門は山三に殺される事になつてゐる。今一つは、寛延二年十一月、豊竹座の操りにかゝつた「十帖もの草太郎」で、淺田一鳥、安田蛙桂の合作である。この淨瑠璃の伴左衛門は國崩しの實惡で、明智光秀の一子といふやうな筋になつて居り、結局お國御前が身を捨て、の策畧に、伴左衛門は裏をかゝれて滅亡し、山三が佐々木の家を再興するといふ趣向である。これには大序に朱雀野の大門口があつて、不破名古屋が傾城買論の達引からそれが夢であるといふのを發端にしてゐる。「鞘當」から來た趣向である。この二淨瑠璃とも、歌舞伎に移入されて、可成り度々興行されてゐるが、前者が吃又一幕のみを多く上場されたのに引かへ、後者は千の利休を中心に、多くは通し狂言で演じたところから、不破名古屋の筋からしては後者の方が人に知られてゐる。

山東京傳は、この歌舞伎に由緒ある不破名古屋の世界から趣向を構へて「昔語稻妻表紙」といふ五冊物の讀本小説を作り、文化四年に發行した。これが非常に好評で、續編の「本朝醉菩提」まで出した程であつたから、程なく歌舞伎で、これを脚色、上演した。それは大阪であつた。その頃の江戸は、戯曲と小説とは互ひに相犯し合はぬといふ暗黙の契約があつたので、小説の脚色は多く大阪で行はれた。文化の初年は、殊に大阪では小説を劇化する事が流行したので、この流行小説は、翌文化五年の春に、角座と中座と兩方で、同時に競争的興行をする事になつた。角座の方は、一月二十五日初日で、きのふは不破の關様まるる、けふは名古屋の山様まるる、と角書をして「けいせい輝草紙」、脚色者は近松徳三で、不破を四世市川團藏、名古屋を二世嵐吉三郎、葛城を中山富三郎が勤めた。鞘當の場は無いが、小説にも出る梅津嘉門の筋を、挿話的に添へてある。中座の方は、一月二十九日の初日で、稻妻表紙は姿の彩色、十帖源氏は意の寫繪、と角書をして「けいせい品評林」脚色者は奈河篤助であつた。この方には梅津嘉門の筋は無いが、代りに佐々良三八の件に力を入れてある。不破は三世中山新九郎、名古屋は三世中村歌右衛門、葛城は中山よしを、であつた。この兩脚色を比較して見ると、不破名古屋の件は大して違はない。大體原作に従つて、草履打から山左衛門殺し、名古屋の詫住居、上林での愛想づかしといふ順になつてゐる。兩者とも評判はよかつたが、後世多く興行されたのは「品評林」の方であつた。江戸

でも度々上演してゐる。

以上が、文政六年三月に「浮世柄比翼稻妻」が出る以前の不破名古屋である。南北は、流石に「稻妻表紙」に拘泥せず、權八小紫を交へて即かす離れずに脚色し、しかも原作の眼目の個所は委く取入れてある。殊に「鞘當」といふ古劇復活的一幕が非常に利いたので、この狂言は長く残つたのである。「鞘當」は、團十郎菊五郎が、その最近まで不和であつたのを、前年の顔見世、半四郎の仲裁で和解したのだが、爰にも又ぞろ持ち出して、舞臺で和解を見せたので、半四郎が留め女に入るのも、その故から來てゐるのである。

初演の役割は左の通りであつた。

名古屋山三元春。三浦屋小紫實、本庄娘八重梅(ニヤク三世尾上菊五郎)茶屋廻り、鷲の長吉(尾上三朝)六角左京之進(中山錦車)本庄助八(大谷馬十)本庄助太夫(市川男女藏)佐々木桂之助(市川鯉三郎)白井權八後ニ紫扇蝶。長兵衛女房、お近(ニヤク五世岩井半四郎)笹野才藏(松本錦吾)佐々木額五郎(市川小團次)遣り手、お爪。石塚支藩(ニヤク大谷門藏)奥女中、柵。八百善女房、お吉(ニヤク吾妻藤藏)下部、段八。唐犬權兵衛(ニヤク尾上蟹十郎)三浦屋女房、お高(市川おの江)所化、願哲(尾上仙藏)家主、李郎兵衛(惣領甚六)飛脚、とゞ平(關歌十)判人、善六(大谷曾呂平)見世物師、又平(澤村四郎五郎)山三下部、八内。庵崎蘭蝶實、白井彌市郎(ニヤク關三十郎)腰元、

岩橋後ニ上林の葛城。蛇使ひの娘、お國(ニヤク五世瀬川菊之丞)幡隨長兵衛。不破伴左衛門重勝後ニ寺西閑心(ニヤク七世市川團十郎)長兵衛一子、長松(市村羽左衛門)

脚本にも記してある通り、大詰の「人形屋」から「長兵衛の内」は、脚本が出来てゐるばかりで上演はされなかつた。昔は、芝居が大入だと、千秋樂まで終に出さずじまひの幕が、よくあつたものである。尤もこの幕は、「敵討天下茶屋聚」の人形屋幸右衛門の件を、組板の長兵衛へ結びつけたものであるからこの一幕を預かられたとて、南北もさほど残念では無かつたであらう。脚本にはこの場の役名を、お傳(市川門之助)蝮の次兵衛(市川男女藏)等にあて、ある。この門之助は、病氣で出勤が出来なくなつたので、最初、門之助に當て、あつた小紫の役を、菊五郎が兼ねた次第であつたが、中日過ぎには門之助も全快したので出勤し、小紫の役を勤めたのである。

二回目の上演は、文政十年一月の河原崎座「群會我島臺」で、初春だけに會我的世界に直し、役名も、悲娘のお國を十六夜のおしげ、又平を鬼王庄助、お近を出雲屋の女房月小夜お國、などと改めた。演じたのも全部ではなく、草履打から山三の浪宅、鞘當から上林まで、次へ會私の對面を附けたのである。役割は

山三(三世尾上菊五郎)おしげ(岩井紫若)長吉(尾上松助)左京之進(市川鶴藏)鬼王庄助(松本幸四郎)お國(五世岩

井半四郎)善六(片岡松助)葛城(岩井兼三郎)伴左衛門(七世市川團十郎)

天保二年十一月の市村座では、「江戸好菊伊達染」といふ先代萩の狂言の中へ、鞘當の場だけ一幕加へて演じた。この時も、團十郎菊五郎が何か喧嘩したのを、坂東叢助が和解させた事があつたので、それを舞臺へ持ち出したのである。本筋に交つて「麻花對編笠」といふ清元を使い、不破名古屋は前通り叢助は竹町の竹松といふ鶯の者で留め男に入つた。これが留め男の初めである。

天保四年三月中村座の「櫻時花吉原」は、前記の大阪脚本「輝草紙」と「品評林」とを混じたものであるが、この中へ「比翼稻妻」から、鞘當の場だけを借りて来て、山三浪宅の前へ入れ、この鞘當が夢になるといふ趣向にした。山三は中村芝翫(後の四世中村歌右衛門)、伴左衛門は二世關三十郎、留め女は出雲屋のお國で、岩井杜若(前の半四郎)が勤めてゐた。

天保六年三月、森田座の「花舞臺丹前俠客」は、「比翼稻妻」と「隈田川花御所染」を混じたもので、「比翼稻妻」からは山三浪宅と鞘當の場とが借りられてある。尤もお國の件は無かつた。役割は

不破(四世坂東三津五郎)山三(澤村訥升)葛城(中山美よし)留め女、出雲屋のお國(六世岩井半四郎)

天保七年九月の森田座「名護屋帶雲稻妻」は、團菊が四度目の顔合せで、草履打から山三浪宅、鞘當と上林の四幕を演じた。役割は

山三(三世尾上菊五郎)八内(尾上松助)お國(尾上菊次郎)又平(尾上菊四郎)願哲、お爪(ニヤク大谷曾呂平)李郎兵衛(成田屋銀兵衛)葛城(尾上榮三郎)長兵衛(五世松本幸四郎)伴左衛門(七世市川海老藏)留め女は幡隨長兵衛にして、革羽織にばつちの拵へ、この長兵衛が大當りだつたさうである。

天保十四年二月の市村座「廓燕姿稻妻」では、お國抜きの山三浪宅と、鞘當の二幕を演じた。留め女は、上林の仲居お宮といふ名で市川九藏が勤め、山三は十二世市村村羽左衛門、不破は四世中村歌右衛門、葛城は坂東しうか、であつた。

弘化三年一月の河原崎座では、「廓模様比翼稻妻」といふ名題で、原作全部を演じた。尤も大切の幕として、白井權八が石塚玄蕃を討つ「辻番の場」が加へられ、また鈴ヶ森は女房お時で女長兵衛の趣向であつた。役割は

- 八内。彌市(ニヤク坂東彦三郎)お高(小佐川常世)玄蕃。李郎兵衛(ニヤク大谷廣右衛門)善六。お爪(ニヤク市川團八)お時。留め女お辰(ニヤク岩井杜若)山三(澤村宗十郎)小紫(市川新車)助太夫。又平(ニヤク大谷友右衛門)葛城。お國(ニヤク尾上菊次郎)權八。伴左衛門(ニヤク八世市川團十郎)

この時は、一番目序幕、八百善別莊の場へ、「逢見愛井字」といふ清元を加へた。初演には長唄の獨吟で済ましてゐた所へ、淨瑠璃を使つたもので、後にはこれが型になり、曲も「鶏の權八」といつて現

存してゐる。「鶏の權八」といふのは、語り出しが「鶏がなく」といふ文句だからである。

嘉永元年三月の市村座「昔語稻妻帖」は、「品評林」へ「比翼稻妻」から鞘當の一幕を取つて添へたものである。不破は八世市川團十郎、名古屋は十二世市村羽左衛門、留め女お秀を坂東しうか、等であつた。

嘉永四年一月の河原崎座「伊達競高評鞘當」は、「比翼稻妻」の草履打、山三浪宅、鞘當、上林の四幕の間へ、先代萩を加へたものである。役割は

- 山三(澤村長十郎)八内。又平(ニヤク關三十郎)李郎兵衛(澤村宇十郎)玄蕃(淺尾奥山)葛城。お國。留め女お梅(ニヤク尾上梅幸)伴左衛門(七世市川海老藏)

安政二年三月の河原崎座「鏡山比翼容姿視」は、「比翼稻妻」から白井權八の件だけを抜いて、鏡山の間へ挟んだものである。長兵衛は出さずに、弟長吉といふ名にして、河原崎權十郎が勤めた。本來は坂東しうかが、女長兵衛をやる筈であつたが、開場前に死んだので、長吉にして追善の口上を云つたのである。彌市を嵐璃寛、權八を坂東竹三郎、小紫を市川團之助、が勤めた。

文久元年二月の市村座「鶴春土佐繪鞘當」は、「品評林」を土臺にして、「比翼稻妻」の浪宅と鞘當を入れたものである。留め男は舞鶴屋傳三といふ役名であつた。

山三(河原崎權十郎)伴左衛門(中村芝翫)又平(淺尾與六)左郎兵衛(片岡十藏)葛城。お國(ニヤク澤村田之助)傳三(坂東龜藏)

元治元年七月の中村座「花街燕比須稻時」は、同じく「品評林」が土臺で、鞘當を添へたものである。

山三は坂東彦三郎、不破は河原崎權十郎、留め女龜金のお汐は岩井紫若、等であつた。

慶應三年十月の守田座「喜九字當機成臺」も前と同じく鞘當だけで、山三を澤村訥升、不破を坂東彦

三郎、留め女明石屋のお雪を大谷友右衛門が勤めた。

明治元年十月の市村座では、「其俤花鞘當」として、清元を使つて鞘當だけ一幕見せた。山三は五世

尾上菊五郎、伴左衛門は河原崎權十郎(後の九世團十郎)、留め女のお瀧は尾上菊次郎で、大谷友右衛門

と市村羽左衛門が茶屋廻りに出た。これが五世菊五郎と九世團十郎が鞘當の第一回である。

明治四年一月の市村座「名古屋帶雲稻妻」は、例によつて「品評林」へ、「比翼稻妻」の浪宅と、鞘當

とを附けたものであつた。

伴左衛門(中村芝翫)左郎兵衛(中村鷲助)又平(坂東箕助)葛城。お國(ニヤク坂東三津五郎)山三(澤村訥升)

明治六年九月の村山座では「尾花比翼碑」といふ名題で、八百善別莊と汐入堤とだけを演じた。雪

駄直しの件を拔萃した譯である。權八の坂東家橘、彌市の五世尾上菊五郎、小紫の二世河原崎國太郎、

お高の嵐榮三郎、女蕃の中村相藏、等であつた。

明治十二年五月の新富座「昔綉廓鞘當」は鞘當だけで、山三を助高屋高助、伴左衛門を九世市川團

十郎、留め男は彫り物連次といふ役名で、五世尾上菊五郎が勤めた。

明治十九年五月の市村座「梅雨燕比翼稻妻」は、珍らしく原作通りを全部演じたものである。鈴ヶ森

は幡隨長兵衛を法華長兵衛と直し、鞘當の場にも、この長兵衛が留め男に出た。

山三。彌市。ニヤク片岡我童)玄蕃。左郎兵衛(ニヤク中村鶴藏)左京之進。段八(ニヤク中村鶴五郎)飛脚(市川丸童)

伴左衛門(市川權十郎)葛城。小紫(ニヤク岩井松之助)額五郎(片岡仁三郎)柵。お高(ニヤク中村壽)又平。助太夫。

(ニヤク關三十郎)權八。お國(ニヤク中村福助)八内。長兵衛(ニヤク中村芝翫)

明治三十一年十月の歌舞伎座「比翼塚尾花寺西」は、大師河原と、八百善から汐入堤を出し、大切へ

鞘當を附けたものである。

彌市。山三(ニヤク尾上菊五郎)段八(尾上松助)小紫(尾上榮三郎)權八。留め女お福(ニヤク中村福助)お國(片岡龜

藏)お高(坂東秀調)助八(三樹稻丸)又平(片岡市藏)伴左衛門(市川團十郎)

この以後も、折々大劇場で鞘當の一幕だけは出るが、その外の幕は殆んど上場された事は無いから、

年表はこれまで、止めて置く。

襖雜石尊臚

一四

文政六年七月、市村座へ書き卸した仇討ち物で、「伊賀越」の書替へに、「二島英勇記」と「白石噺」を衣にかけたところは、いかにも南北らしい趣向である。

伊賀越仇討の實説は、茲に記すまでもない。因州池田の家中渡邊鞆負が、同家中の河合又五郎に殺害されたのは寛永九年一月の事で、鞆負の一人數馬は、姉聳の荒木又右衛門といふ劍道の達人の助太刀で伊賀の上野に首尾よく本望をとけたのが、寛永十一年十一月の事である。この事件が初めて戯曲に脚色されたのは義太夫で、安永五年八月、江戸の外記座で操りにかけられた「志賀の敵討」がそれである。伊賀の仇討へ芭蕉翁の由来を書込んだもので、蘭又右衛門、瓦井政五郎、などの假名を用ひ、割合ひに巧く出来てゐるのだが、どうした事か一向世間では知らない。作者は紀上太郎である。

次は歌舞伎で、安永六年一月、大阪の中座に書き卸された「伊賀越乗掛合羽」作者は奈河龜助、これが非常な大當りで、つい最近まで始終上演されてゐたものである。この大當りに刺戟されて、同じ年の三月には、「伊賀越乗掛合羽」を近松東南が院本に改作し、堀江座の操りへかけた程であつた。のち、天明三年四月の竹本座には、近松半二の「伊賀越道中双六」が出た。これも半二が戯曲の中では有数の傑

作で、歌舞伎の「乗掛合羽」と並んで、伊賀越仇討はこの二作と、相場がきまつてゐたものである。

「襖雜石尊臚」は、この「伊賀越乗掛合羽」を土臺にして、南北式の奇想を構へたもので、「乗掛合羽」の眼目の個所は、いろいろ形式は變へながらも、大抵取込んである。たとへば、大内記が鐵砲をうちかけられる筋は、「乗掛合羽」の上杉右内そのまゝであるし、政右衛門の妹鳴見が、股五郎助けたさに一時股五郎を偽はるところは、原作が母の鳴見なのを、若い女に變へたものであるし、武助の不死身が正宗の名刀で切れたり、股五郎の癩病が奇藥で癒えたり、いづれも「乗掛合羽」の重要な筋であるのを、巧みに書き替へ、入れたものだ。さうして、股五郎を徹頭徹尾立役で通させたり、富ヶ岡の場でその頃の岡場所をスケッチし、團七といふ當時としては珍らしい役を點出したり、仇討の場を大山にして、當時ひどく流行した石尊詣りを當込んだりしたところに、南北の奇智と權識とを見せてゐる。

二幕目序幕返し、三圍堤の場で、菊之丞のお濱と、門之助のお谷とが、石段を使つて烈しい立廻りをする。この場が大受けであつた。前年の顔見世狂言「御最眞竹馬友達」で、門之助の小式部と、菊之丞の七綾とで、石段の立廻りを見せたところ、これが非常に當つたので、翌春の「八重霞會我組絲」では、門之助の藝者はね吉と、菊之丞の藝者小絲とが、千住の女郎屋の場で、顔見世の石段の立廻りをソツクリやつて見せる筋にしたが、これも同じく當つたので、今度は七月狂言の「石尊臚」に、又ぞろ二人の

一五

石段の立廻りを持ちこんだ次第である。

役割は左の通りであつた。

澤井股五郎。富ヶ岡の惣六實ハ吳服屋重兵衛(ニヤク三世尾上菊五郎)政右衛門女房、お谷。武助妹、お園(ニヤク市川門之助)仁木息女、彌生姫。羽根澤屋幸吉(ニヤク尾上三朝)和田志津摩。船宿、辰巳屋與五郎(ニヤク中山錦車)醫者、奈良林十官(大谷馬十)乳人、濱町。髪結び、おせん(ニヤク市川おの江)佐々木團右衛門。子分、長右衛門(ニヤク惣領甚六)澤井又左衛門後ニ佐々木巖柳(市川男女藏)箱根宮城野の信夫後ニ仲町藝者お信(五世岩井半四郎)富岡屋廻し、九助。荒卷伴作(ニヤク大谷門藏)和田靱負。櫻井林左衛門(ニヤク尾上蟹十郎)澤井城五郎。池添孫八(ニヤク澤村四郎五郎)仁木春太郎後ニ大内記。若黨、柘榴武助(ニヤク關三十郎)股五郎云ひ號け、鳴見。惣六女房お濱實ハ奥女中瀬川。お濱妹、お袖(ニヤク五世瀬川菊之丞)志賀の土民、宿無し團七。荒木政右衛門後ニ月本武藏(ニヤク七世子川團十郎)細川多門之助(市村羽左衛門)

この狂言は再演されなかつた。

渥美清太郎識

うきよがらひよくのいあづま
澤井城五郎
 比留屋稲妻

浮世柄比翼稻妻

序幕

東海道境木の場
鎌倉初瀬寺の場
助太夫屋敷の場



役名

名古屋山三元春。不破伴左衛門重勝。腰元、岩橋。名古屋下部、八内。白井權八。本庄助太夫。浮世又平。本庄助八。六角左京之進。石塚方蕃。佐々木桂之助。佐々木額五郎。住職、轟坊。所化、願哲。足輕、笹野才藏。中間、さくら三平。夜廻り、彦左衛門。

本舞臺、正面黒幕、真中に、武藏相模國境の榜示杵。幕の内より不破伴左衛門、雲に稻妻の紋附いたる衣裳、大小、浪人の拵へ、深編笠にて、名古屋山左衛門の死骸へ止めを刺して居る見得。見世物師、浮世又平、中間の形。本庄助八、さんびん侍ひにて、兩人、竹槍を持って、白井兵左衛門の死骸へ立ちかゝり居る。すべて東海道、境木村の體。時の鐘、禪のツトメにて幕明く。

ト三人こなしあつて

又平 伴左衛門さま。

ト伴左衛門、「コレ」と思ひ入れ。

助八さまは侍ひだけあつて、お實際格別なものでござります。

助八 イヤ、又平も昔取つた杵柄とやら、中々味をやりました。

又平 白井権八が親の兵左衛門、山三が親の山左衛門、佐々木の家に仕官なれども

助八 彼奴らがあつては、伴左衛門どの、大望の妨げゆる、此ところに待伏せして、兩人が預るところの、神妙劍は親仁めが

ト兵左衛門の死骸の懐より、一卷を出す。此うち、伴左衛門、山左衛門が死骸にある刀を取る。助八見て

八見て

山左衛門が帯せしは、名古屋の家に二振り揃ふ來國俊。

又平 毒を喰は、皿の譬へ。伴左衛門さまは、ちつとも早う

助八 骨折代に身共は一卷。

ト又平の持つたる一卷を引ツ渡ひ、一散に向うへ入る。伴左衛門、あと追ツかけてといふ思ひ入れ。

又平 呑みこみ

又平 心得ました。

ト時の鐘になり、向うへ入る。伴左衛門、伴の刀を持ち、上の方へ入る。知らせにつき、正面の黒幕切つて落す。

本舞臺、正面一面の朱塗りの大山門。上の方、一面の櫻にて見切り、山門の正面に四つ目の紋附いたる紫の幕を張り、所々に櫻の立ち樹。すべて鎌倉初瀬寺の體。この道具誂への鳴り物にて、納まる。ト大拍子入りたる出の鳴り物になり、佐々木桂之助、若殿の拵へ、長谷部雲六、十助、麻上下の侍ひ、桂之助の刀を持ち、桐、奥女中の拵へ、早枝、楓、紅葉、腰元の拵へ、各自筒に生けたる花を持ち、石塚玄蕃、上下、衣裳、大小、あとより笹野才藏、足輕にて、竹刀の附きたる繪馬を持つて出て来る。山門の中より轟坊、緋の衣、住職。所化、願哲、附いて出迎ふ。皆々宜しくこなし。

轟坊 これは、若殿様には、先君の御追福として、當寺への御參詣。

願哲 路次を警固の何れも様、遠路の御入來

兩人 御苦勞に存じまする。

桂之 住職には出迎ひ大儀。大家の式は先例に任せ、この度の大赦。寂光淨土も及びなき、經讀み鳥

の羽風に連れ

雲六 虚空に花の法の庭、樂の詞もさながらに

十助 迦陵頻迦、諸天人、下界にありと疑はれ

しが かをりゆかしき一焚きの、銘は伏せ屋ものぞかるゝ、花の詠めも彌生の空。

早枝 今日のお供の嬉しさに、春とはいへど曉の、覺めて粧ふ朝日紅。

かへ鏡に向ひ嗜みは、夜も白々と別れ霜。

もみ殿御欲しさのわたしらには、別れといふは氣にかゝる。

女蕃 イカサマ。外珍らしい女中達、寄るも觸るも男の噂。縁結びやら、三世相、互ひの合ひ性見るな

らば、身共は黒木の味好い生れ。

才藏 それは都の八瀬大原、下郎は東の詛りふし。ぶツこつねえ、色氣もねえ。御殿の女中はお庭の櫻。

轟坊 花の下なる設けの席へ。

桂之 皆も一緒に。

皆々 先づ、入らせられませう。

ト鳴り物になり、この人数、皆々舞臺へ來り、よろしく住ふ。

轟坊 憚りながら、柵どのへ伺ひまする。大殿様御逝去の後には、佐々木の御家督は、如何相成りしや。

しが これはく、御深切なるお尋ね。先殿定綱公御逝去の後、全く今に御跡目の、御評議もござりま

せぬ。

才藏 ハテナ、佐々木のお家には、御惣領たる額五郎さま、これにござる桂之助さま、お二方ありなが

ら、何ゆる御家督定まりませぬ。

女蕃 其方どもは下様、お上の様子は知らぬ等。家に二人主ある時は、騒動の元。折角納まる佐々木の

お家、世繼は差詰め額五郎さま。伴左衛門どのは後見の役。桂之助さまは御次男の事ゆゑ、お附

き人の山三もろとも、お座敷の片隅へ、すつこんでござるが相應。

しが 憚りながら、女蕃さま、御料簡が相違いたしませう。

女蕃 そりや又なせに。

しが ハテ、額五郎さまは御惣領なれどお妾腹。これにござる桂之助さまは、御次男なれども御本腹。

外にお世繼なくば、イザ知らず、かゝる御本腹ありながら、妾腹たる額五郎さま、お世繼とある

時は、御後室のお嘆きはいかばかり。さすればお家の騒動の基。おてまへ様には、お家の亂れを、

お願ひなさるゝか。

女蕃 サア、それは。
しがお役柄にも似合ひませぬ。ちとお嗜みなされませ。
女蕃 ウム。

ト思ひ入れ。

雲六 柵どのお詞ではござれども

十助 佐々木のお家督定めには、無くて叶はぬ神妙劍。

雲六 たとへ桂之助さまのお世継ぎにも致せ

兩人 その一卷がござりますか。

女蕃 神妙劍は白井兵左衛門、名古屋山左衛門預りなりしが、お國許より下向の道にて、何者の爲にか殺

害され、その一卷を奪ひ取られたではござりませぬか。それでもあなたの御代になりませうか。

しが サア、それは。

女蕃 なんの女の小差出た

敵役 すッ込んで、お居やれ。

桂之 方々の心配さる事ながら、正統たる某なれど、次男に生れし事なれば、佐々木の家督思ひも寄り

す。惣領たる額五郎どの、家を立つるはこれ順道。

才藏 お心弱いそのお詞、御本腹たるあなた様、御代に出ですば秘書の一卷

雲六 その預りの兵左衛門、闇討ちにあひ、剩へ

十助 一卷取られし科によつて

皆々 白井の家も終に断絶。

願哲 その御子息たる權八さま、此お寺へ日毎の參詣。

早枝 それにつけても名古屋山左衛門さま、同じその場でお果てなされしゆる

かへその御子息の山三さま、この程までは御遠慮あるべき筈なれど

もみ 桂之助さまのお附き人ゆる、假に御出仕御免との事。

しが それと申すも當寺に於て、佐々木の系圖に御祈念あるが、古へよりの御吉例。その預かり主は名

古屋山三どの。

才藏 イヤナニ、女蕃さま。それに就いて、最前名古屋さまより、伴左衛門さまへ何か急用の御状、拙

者めに相届けよとの仰せでござれど、未だ伴左衛門さま出仕なければ、憚りながら御同役のあな

た様より、お届けなされては下さるまいか。

立番 いかにも。伴左衛門どの出仕の上、身共が手渡し致さう。
才藏 有り難うござります。

ト手紙を支番へ渡す。

轟坊 御前様へ申し上げます。最早祈念の時刻でござれば
しが御拜禮あつて、然るべう存じまする。

立番 其うちには、御兄君にも御参詣。

桂之 然らば直ぐさま

轟坊 君の御座所へ

桂之 方々、案内。

皆々 先づ、入らせられませう。

ト唄になり、皆々山門の内へ入る。この時、櫻の木へ、鶯二羽囀り居る。三味線入りの鳴り物になり、
花道より名古屋山三、上下、衣裳、大小にて、三方に願書を持ち、出て来る。東の歩みより白井權八、
振り袖の衣裳、袴、大小、花手桶を持ち、出て来り、兩人、舞臺の鶯に目を附け、思ひ入れ。簞築の
入りし鳴り物になり

山三 時は今、彌生の空。春告け鳥の花に来て、その聲、雛に親鳥が
權八 教へ草なる春鶯囀。鳥類だにもあの如く、親の手鹽に育つ身が
山三 我れには父母無き身無し鳥、早くも消えし蜻蛉の
權八 燃ゆる思ひは戀の意地、結ほれ解けぬ絲遊の
山三 かゝりもつるゝ、花の枝に
權八 春は來にけり、鶯の
山三 巢を離れても
權八 餌食の父母を
山三 慕へる思ひに
權八 人たる我れが
山三 結ほふる胸も
權八 今や解けなん。
山三 ハテ、風情ある
兩人 眺めぢやなア。

ト思ひ入れあつて、二人とも、舞臺へ來り、兩人顔見合せ

權八 ヤア、あなたは名古屋山三さま。

山三 これは權八。この程は打絶え、對面も致さぬが、益々御無事で、重疊々々。

權八 あなた様にも、御機嫌にて、喜ばしう存じまする。

山三 イヤナニ、權八。親御兵左衛門どの、この程、不慮の横死、殿より預かる神妙劍の紛失、その越度ゆゑおてまへまで、浪人の身の上なれど、先君の御恩を思ひ、御廟へ忍びの參詣よな。

權八 さやうでござります。私親どもと申し、あなたの親御山左衛門さま、場所も變らず、はかない御最期、互ひに親の敵を討ちたく、私は若輩の上、父母に離れ、かゝる島なき孤兒同然。ふと致した事でごなたとは兄弟の義を結び、兄よ、弟と申すれば、親どもの本意を達し、力となつて下さりませ。

山三 成る程、其方と兄弟の、契約は致したなれども、そりや私しの事。敵討は武士の表、随分力となつてやりたいが、して、その敵の手掛りは。

權八 サア、その手掛りは

山三 何者か相知れぬか。

權八 左様でござります。

山三 ソレ、見やいなう。身共とてもその通り、親どもを討たれ、無念は同じ亡父の仇なれども、まだ知れぬ敵に身を粉に碎き、うかく尋ぬるは、なんと野暮な事ではないか。それよりは侍ひやめて、浮世を樂に、色と酒とに、樂しむ心は無いか。どうぢやく。

權八 さやうござれば、あなたには、敵を尋ぬる、思し召しはござらぬとナ。

山三 さればサ。併しなから我れらの方には、敵の手掛り少しはござるて。

權八 して、その手掛りは。

山三 親山左衛門討たれし砌り、帶せし刀は來國俊、その時紛失したれば、それを所持する者が親共の敵。雌雄と名けし二振りの刀、名古屋の家に傳はるゆゑ、身共が刀と焼刃、鐵色、寸分違はぬ希代の業物。

權八 さほどの手掛りあるからは、私しの爲にも親の敵、あなたも共々

山三 二人一緒に尋ねたいが、こゝに一つの難儀があるて。

權八 そりや、何事でござります。

山三 何を隠さう。この節我れら眩暈の病ひ。今にも敵に出合ひなば、刀の光りを、見ると忽ち起る病ひ。それゆゑ當分、敵討は止めにした。

權八 そんならあなたは眩暈めまいの

山三 病やまひは身のほうけと、御奉公ごほうこうも勤まりかぬるゆゑ、伴左衛門ばんざゑもんまで暇いとまの願ねがひ出し置きたれば、武士ぶし止めて、町人暮ちやうじんぐららし。

權八 さやうなれば、いよくあなたは親おやの敵かたきを

山三 討うたぬ證據しやうこは腰元こしもとの岩橋いははし、此こ奴商人あきんどの女房にようぼうには、見所みどころある奴やつ、口説くどき落おとして身共みどもが女房にようぼう。

權八 そりや、今いままで約やくせし兄弟きやうだいの

山三 義理ぎりは猶更なほさら、武士道ぶしどうまで

權八 捨すて、望のぞむは腰元こしもとの

山三 岩木いはきならねば岩橋いははしが

權八 色香いろかに迷まよふ御所存ごしよせんか。

山三 知しれた事こと。

權八 今いままで頼たのもしき心底しんていゆるゑ、兄弟きやうだいの義ぎを結むすびしに、思おもひがけなきその邪曲よこしま。どうぞ心こゝろを取直とらし、武ぶ

士道しどう立つて、親御おやごの仇討あだうち。

山三 ハテ、長ながう云いやんな。聞きく耳持みもたぬ。それよりは當寺たうじの小座敷こざしきで、兄弟分きやうだいぶんのおてまへを、精進酒しやうじんざけ

のさしつおさへつ。久ひさし振ぶりにて、どうぢやく。

權八 色いろと酒さけとに心こゝろを奪さらはれ、親御おやごの事ことはどこへやら

山三 捨すて、見みせるも、手管てくだの一つ。

權八 ヤア。

山三 ハテ、野暮やばを云いはずに、サア、來きやれ。

ト唄うたになり、權八ごんぱちが手てを取り、奥おくへ入いる。山門さんもんの内うちより玄蕃げんぱん、願哲ねんてつ、窺うかがひながら出いで來きり、兩人りやうにん顔見かほみ合あせ

願哲 玄蕃げんぱんさま

玄蕃 コレ。

ト思おもひ入れ。合あひ方かたにて、兩人りやうにんこなしあつて

願哲 かねてのお頼たのみ、今日けふの時とき。どさくさ紛まれに、やりかけませうか。

玄蕃 イカサマ。山三さんざが預あづかるところの系圖けいづの一卷くわん、今日こんにち祈念ねん滿願まんげんなれば、所持しよぢいたして歸かへるは必定ひつぢやう。

屋敷やしきへ行いつては、むづかしい。あはよく寺てらにゐるうらに

願哲 折せりを見合みあせ、ひん盗ぬすんで上げませう。

女蕃 併し、系圖の箱は山三が封印、これはどうも。

願哲 ハテ、坊主の事は何にも存じませぬが、小盗みの事ならば、やつたものではござりませぬ。

女蕃 頼もしい。その小盗みは、系圖の一卷捲上げれば、それを越度に山三めは梵天國。差詰め跡目は

額五郎さま、伴左衛門どのを初め我れ〜が、家の政事を執り行ふならば、御坊もその形では置

かぬ。喜べく。

願哲 私しもその時は、大小ほつこみ、立派な侍ひ。

女蕃 ソレ、當座の手付け。

ト包み金を渡す。

願哲 こりや、コレ、サツしり

女蕃 かねての約束。

願哲 忝い。

女蕃 必ずぬかるな。

願哲 ハツ。

ト奥へ入る。女蕃残り

女蕃 伴左衛門どのと、事を計るは今この時。それにつけても、山三が方より、伴左衛門どのへ送りし書面。火急とあるは心許ない。密かに開封して。さうぢやく〜。

ト件の書状を出し、上封を取り、袂へ入れ、状を見ようとする。この時、向う揚幕にて

三平 ア、コレ娘 危ないぞや。

トこの聲にて女蕃状を懐中なし、奥へ入る。三味線入り、大拍子になり、向うより岩橋、奥女中の拵

へにて、筒に入れたる花を持ち、草臥れたる思ひ入れ。あとより八内、縷子奴の形にて、茶瓶を擔ぎ、

三平、老けたる中間にて、日傘と傘を籠に入れ、これを擔ぎ、出て來り

岩橋 モシ〜、八内どの、初瀬のお寺へは、まだ餘程あるかいなア。

八内 岩橋どのとした事が、何を云はつしやる。爰が即ち初瀬寺でござります。

三平 こなたの足が遅いゆるゑ、わしまでお供におくれた。サア、歩きませう〜。

岩橋 それぢやというて、草履の鼻緒が足に觸つて、一足も歩かれぬわいなア。

八内 そりや大方鼻緒擦れ。あれへ行つたら私しが、よいやうにして上げませう。

岩橋 そんならあの御門前で

兩人 辛抱して、歩いたり〜。

ト三人舞臺に來り、岩橋床几にかより

岩橋 久し振りでの歩行路ゆゑ、思ひがけない鼻緒擦れ。こりやどうしたらよからうぞいなア。
三平 最前から、直してやりたうても途中の事。娘、痛む所は、どこぢやく。

ト寄らうとする。岩橋見て

岩橋 勿體ない、父様、どうしてお前に。

八内 ヤア、親仁どの、事を、父様といふからは、そんなら岩橋どののは

三平 ハイ、わしが娘でござります。

八内 こなたの娘にしては、これがほんの、鶯が鷹を生んだとやら。

三平 これは不躰な事を。

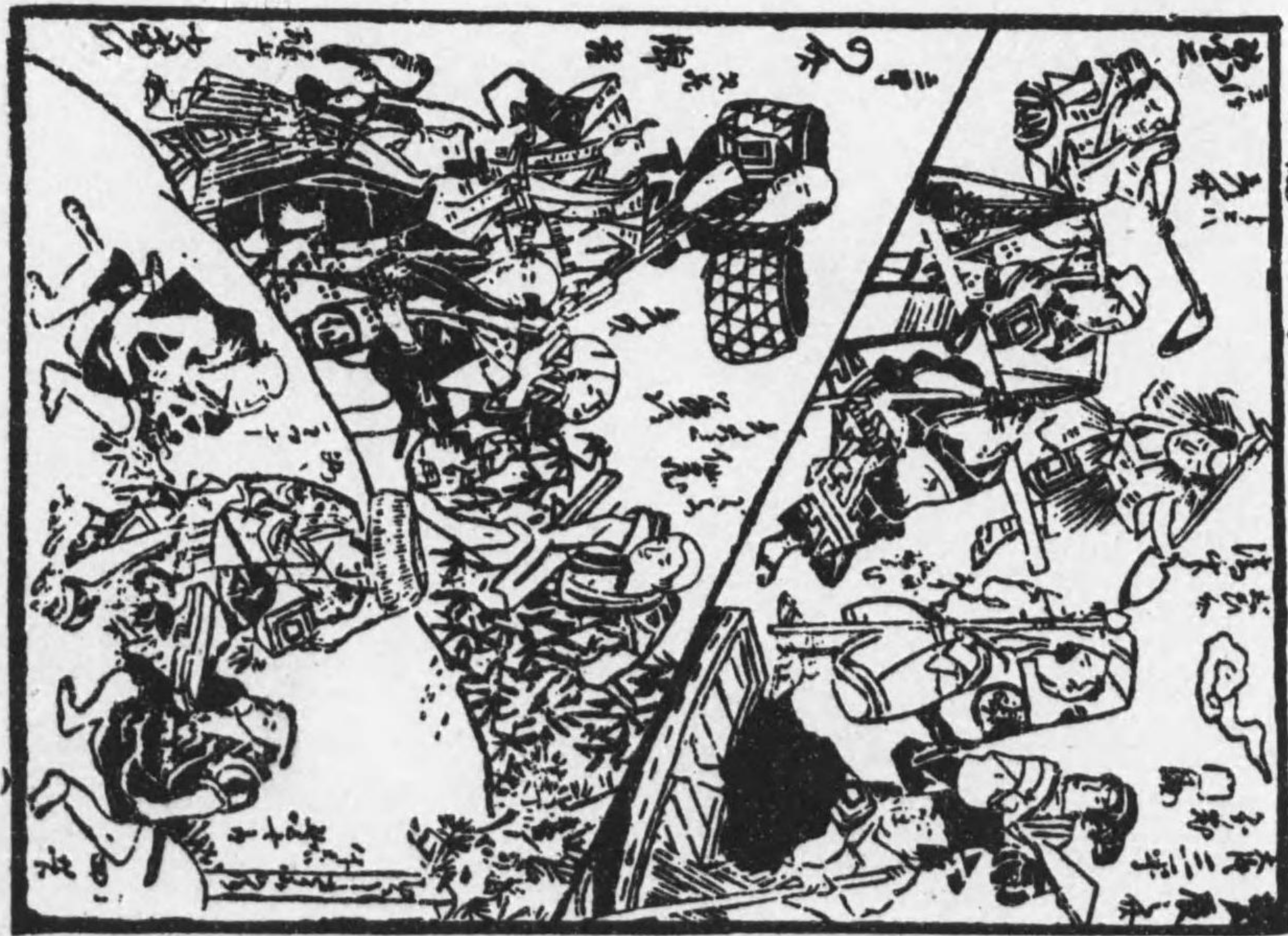
八内 それぢやというて、あまりの違ひ。

三平 そりやその筈、この岩橋は元來捨子の

岩橋 アモシ、父さん、人も問はぬに其やうな事を

三平 オツト、合點々々。

ト口を押へる。この時、才藏出て來り



才藏 荷物の親仁は、何を致して居るか知らぬ。

ト三平を見つて

コレ、三平、女中衆が日傘をお待ちかね。早く来やれ。

三平 オツト、合點々々。

ト日傘を四五本持つて、傘三本残し、才藏連れ立ち、奥へ入る。

岩橋 ほんに、わたしとした事が、お供に遅れ、御前の御機嫌

ト行かうとして、足の痛むこなし。

アイタ、。こりや何うしたらよからうぞいの。

八内 草履の事なりや奴が商賣、よいやうにして上げませう程に、その代り、この短冊を見て下さりまし。

ト懐中より短冊を出して渡す。

岩橋 アモシ、こりや何でござります。

八内 サア、その短冊は、さるお方より頼まれました。どうぞお前の心に叶うならば、返歌をして下さるまいか。

ト岩橋洵り、よく見えて

岩橋 ヤ、この短冊は男の手跡。情を籠めし一首の歌。して、此お方は。
八内 サア、その主は、コレ。

ト囁く。

岩橋 ヤ、そんなら、アノ山三さまが

八内 アコレ。何にも云はずに返歌を一首。其うち我れらは草履の穿索。

ト草履を取り、鼻緒を直す。岩橋嬉しき思ひ入れにて、紅筆にて裏へ返歌を認め居る。好き時分、奥より玄蕃出て来り、岩橋を見て

玄蕃 ヤア、いつの間にやら岩橋どの。

トこれにて岩橋、短冊を隠し

岩橋 これはく、玄蕃さま、今日のお役目、御苦勞に存じまする。

玄蕃 可愛らしいその口許にて、お優しい其お詞。身共もどうやら……イヤナニ、岩橋どの、さる仁に頼まれてござるが、この短冊へ、返歌をしては下さるまいか。

ト短冊を出す。岩橋見て

岩橋 この短冊にも一首の歌。して、此お方は。

玄蕃 お名は云はれぬ。雲に稻妻。

岩橋 そんならこれが

玄蕃 どうぞ色よい御返事を

岩橋 不束な私しへ、お送り下さりましたこの短冊、早速に御返歌は致したけれど、折わるう、アイタタ。

ト足の痛み思ひ入れ。玄蕃草履を取らんとするを、八内、玄蕃を退け

八内 オット、待つたり。さうはなるまい。

玄蕃 ヤイ、下郎め、何でならぬのだ。

八内 ハテ、知れた事。今あなた、何と仰しやりました。武士たる者が、むさくるしい物持つものではないと仰しやりましたではござりませぬか。私しは下郎の事、あなた様にはお歴々のお侍ひ様。それに何でこの草履。

玄蕃 サ、それは……それく、この女中が供先で、難儀と見たゆゑ。

八内 あなた様にはお歴々。矢張り草履は、この下郎。

玄蕃 イ、ヤ、身共が……その代り、今の返事を

ト寄るを、八内突退け

八内 イヤ、私しへ。

玄蕃 イ、ヤ、身共へ。

ト兩人、短冊を差附ける。

岩橋 それ程に思うて下さんすは、女の果報と嬉しけれど、どちらへ御返事いたしても、いつれ一人に恨みを受け、戀の遺恨は災ひの種。それを思へば、御返事は

兩人 ならぬといふのか。

岩橋 こればつかりは

玄蕃 ならぬところを

八内 内々で

ト短冊を差しつける。

岩橋 アタしつこい。存じませぬわいなア。

ト兩人の短冊を舞臺へ打ちつけ、片足の草履を脱ぎ捨て、唄になり、奥へ入る。跡にて兩人思はず抱き合ひ、顔見合せ

八内 ヤア、玄蕃さまか。

玄蕃 おきやアがれ。

八内 あの女めは逃げたさうな。

ト捨てりふ、いろくあつて、互ひに取違へ、短冊を取つて

八内 岩橋どの、わしが頼みを、聞いて下さい。

玄蕃 イヤく、身共が頼みを

ト兩人争ひく山門の内へ入る。夜神樂になり、下の藪疊より、願哲、封印附きし系圖の箱を携へ来て

願哲 祈禱所に飾りある佐々木家の系圖、引ッ浚つて来たが、早く手渡ししたいものだが。

ト奥の方へ磔を打つ。玄蕃出て來り

玄蕃 願哲、首尾は、どうぢや。

願哲 上首尾でござります。お頼みの系圖とやら、イザ、お受取り下さりませう。

ト出す。玄蕃取つて

玄蕃 出かしたく。併し、山三が封印附け置きたれば、切り解いては事の破れ。ハテ、どうがな。願哲 それは私しが仕様がござります。小柄をお貸しなされませ。

ト玄蕃の小柄を取り、箱の底を切り離し、系圖を出し、玄蕃に渡す。
玄蕃 奇妙々々。流石は願哲。出かしたく。

願哲 慥かにお渡し申しました。

玄蕃 一卷は受取つたが、跡の始末は

願哲 空殻は元の神前へ、私しが

玄蕃 そんなら萬事を

願哲 畏りました。……イヤ、此まゝでは箱が軽い。何ぞ中へ重みに。

トあたりを見廻し、岩橋が脱ぎ捨てし草履を箱の中へ入れる。

斯うして置けば、誰れも氣の附く事ではござりませぬ。

玄蕃 ちつとも早く

願哲 心得ました。

ト箱を持つて元の所へ入る。玄蕃あとに残る。この時、風の音にて、日覆より鷹一羽舞ひ下がり、櫻の枝へ搦みつ。玄蕃きつと見て

玄蕃 ヤ、いづこよりかは、この外れ鷹。

ト思ひ入れ。早舞ひになり、向うより佐々木額五郎、掴み立ての前髪、若殿の拵へ、鷹野の形にて鞭を持ち、鷹を追つて出る。あとより近臣、二人、半弓を持ち、六角左京、上下、衣裳、大小にて、附添ひ出て来り、直ぐ本舞臺へ来り、鷹を見上げ、皆々思ひ入れ。

臣一 不斷剛氣のお鷹なれども、お拳外れてあの枝へ

臣二 緒を搦めて、アレ〜〜。

玄蕃 恐れながら、額五郎さまへ申し上げます。只今、名古屋山三出仕いたしますれば、彼れは日頃弓馬の自慢、彼れを呼び出し、弓を以て、緒を射切らせては如何でござりませう。

額五 それこそ幸ひ。山三めをこれへ呼び寄せい。

玄蕃 もし射損じなば、赤恥かゝせ

左京 何はともあれ、若殿の御入來。舊臣たる山三元春。

トこの時、奥より

山三 お召し無くとも、それへ參つて、お目通り致しませう。

ト合ひ方になり、奥より山三出で來る。

左京 これは〜、名古屋氏。

皆々 今日こんにちの御出仕ごしゅつし、御苦勞ごくろうに存ぞんじまする。

ト山三さんざ、額五郎がくごろうを見て

山三さんざヤ、若殿わかとんには父君ちちぎみの、御廟參ごべんざんと思おもひの外ほか、見みるもいぶせき御遊獵ごいうれつ、老臣らうしんがたもお側そばにあつて、何なにゆるお諫いさめなされぬぞ。

左京さけい 及およばずながら、六角左京かくさきやう、御後室ごこうしつの御意ごいを受け、お跡あとを慕したひ、お諫いさめ申まをせど、お用もちひ無なきは、常つねの御氣質ごきしつ。

額五がくご ヤア、役やくにも立たぬその諫言かんげん。大小立派だいきりつぱな武士ぶしなれば
女蕃にょばん 山三さんざどの、貴殿きでんには御秘藏ごひざうのお鷹たかが、外それたに氣きが附つかぬか。

額五がくご かゝる高木かうばくに搦からみしことなれば
臣一しんいち 猿猴ましかたりとも梢こすねを傳つたふに自由じゆうならず。

左京さけい 此このまゝ置おかば鷹たかの落命らくめい。さある時ときにはお家いえの恥辱ちじよく。
臣二しんじ 日頃ひごろ自慢じまんの元春もとはるどの

皆々みな 射術しやじゆつの程ほどが、見みたいく。
山三さんざ こは思おもひも寄よらぬ御仰ごんがほせ。この程拙者せつしやは眩暈けんうんの病やまひあり。劍つるぎは元もとより、射術しやじゆつなどは思おもひも寄よらず。

女蕃にょばん 見下みさけ果はてたるその一言ごん。

臣一しんいち 片時へんじも早はやく、あのお拳こぶし。
額五がくご オ、射切いさる射術しやじゆつを、早はやくく。

女蕃にょばん 差詰さしづめ、執權しつけん六角かくどの
臣二しんじ 急いそいで弓術きゆうじゆつ。

左京さけい 然しからば拙者せつしやが、及およばぬまでも。
ト半弓はんきゆうを執とると、トヒヨになり、鷹たかは日覆ひおほへ飛び行く。

女蕃にょばん ヤ、御秘藏ごひざうのあの一物いちぶつ、雲井遙くもゐはるかに飛び去さりしか。
臣一しんいち あと追おツかけて、ああの鷹たかを、

ト立ちかゝる。この時とき、揚あげ幕まくにて
伴左ばんざ アイヤ、お拳こぶしはこれにて止とめ、伴左衛門重勝ばんざゑもんじゆうかつ、それへ持參ちさんいたすでござらう。

ト誂あつへの鳴なり物ものになり、向むかうより不破ふは伴左衛門ばんざゑもん、上下かみしも、衣裳いしやう、大小だいせう、はちかつら、袱紗ふくさの上うへへ件くだんの鷹たかを据すゑ、出いで來くる。

左京さけい 不破ふは伴左衛門重勝ばんざゑもんじゆうかつどの

嘗々 只今出仕召されたか。

伴左 凡そ人、生れてより一生を經るに、五蘊六氣離れずと。これを以て窺ふこと、軍法の第一とす。ましてや領主の御嫡子、この所に御座ある事、天文にて察せしゆる、お出迎ひと存せし折柄、翼を伸し行く君の御秘藏。鷹は好く人の氣に應ずる奇物、心を以て拳へ返し、君へ捧け奉る。恐れながら、御賢慮の程、よしなに願ひ奉る。

額五 家の面目、他家への聞え。伴左衛門近う。

皆々 君のお召し、急いで御前へ。

伴左 然らば、御免下さりませう。

ト本舞臺へ來り、鷹を近田二へ渡し、好き所へ住ふ。

山二 これはく、重勝どのには、今日の御參詣、御苦勞に存じまする。

女蕃 それにつきまして、名古屋山三より、おてまへに届けくれよと、遣はしましたるこの書面。イザ、受取り下さりませう。

ト以前の狀を出し、見せる。山三思ひ入れあつて

山三 重勝どの、何卒御披見の上、よしなに御推舉、願ひ奉りまする。

伴左 何か様子は存ぜねど、とくと一覽の上。拙者が方へ参りしこの狀、こりや、封印が切れてござるまで。女蕃 その儀は最前、おてまへの御出仕遅刻ゆる、火急の事もあらんかと、相役の拙者ゆる、開封いたしてござるが、何はともあれ、披見召されい。

ト伴左衛門件の狀を開き

伴左 ナニく……「私し事お家の厚恩有り難く存じ居り候ふところ、この程眩暈の病に冒され、武家の奉公成り難く、これによつて、貴殿方より、お上へ言上の上、長のお暇下し置かれ候ふ様、御推舉の程願ひ上げ候ふ。不破伴左衛門どのへ、名古屋山三。」

臣一 すりや、山三どのには眩暈の

臣二 病とやらにて、暇の願ひか。

左京 これにて思ひ當りしは、父の最期の嘆きもなく、淫酒に耽り、身の放埒。草葉の蔭の山左衛門、最期の後まで武名の恥辱。

伴左 今まで祿を賜はりし、殿のお眼識違ひしと、世の嘲りは主人へ不忠。さすれば山三は祿盗人。

山三 控へ召されい、重勝どの。拙者の病は俄かの事。今まで盡せし忠義は云はず、なにゆる山三は祿盗人。

伴左 そりや申さずとも、おてまへも承知でござらう。武士は、帯刀いたす役ではござらぬか。治國にも亂を忘れぬ魂ひ。すは叛逆の者あらば、劍を揮つて敵を防ぐが、臣の役ではござらぬか。それに何ぞや、眩暈の病とあれば、腰抜け同然。祿盗人と申したが、この伴左衛門が誤りか。

山三 サア、それは。

伴左 但し、無念に思はるゝなら、この場に於て、真劍の立合ひなすか。

山三 サア、それは。

皆々 祿盗人か。

山三 サア、それは。

皆々 サア〜〜

伴左 返答いたせ、山三元春。ド、どうだ。

トきつと云ふ。この時、權八後ろより、ツカ〜と出て

權八 憚りながら、伴左衛門さま、暫くお待ち下さりませう。

伴左 誰れかと思へば、白井權八。待てと申すその仔細は。

權八 お止め申しましたは、山三がお詫び、致さうと存じまして。

伴左 そりや何のゑに。

權八 ハテ、元春儀は眩暈の病、それを捕へて立合へとは、勝つ事御存じにてのお望みか。どうやら卑

怯の様に存じまする。

女蕃 ヤイ〜、黙り居らう。我れ〜を捕へ、卑怯者とは、慮外な奴めが。殊に、殿の御不興を受け

ながら、お召しも無きうち、何でこれへ出仕いたした。

權八 サア、その儀は。

額五 身の程知らぬ大白痴め。さほど身分を顧みるなら、山三の名代、其方、立合へ。

權八 どう致しまして、私し風情が

女蕃 ハテ、其やうに卑下さつしやるな。

伴左 この場に於て武術の立合ひ。其方が打勝ちなば、山三が科を免してくれう。

權八 すりや、私しめがこの場に於て

伴左 まぐれ當りに勝つたなら、詫びの一埒、免してやらう。

權八 有り難う存じまする。

伴左 其方の相手には、石塚女蕃。彼れと立合ひ遣はされい。

女蕃 權八が相手に、アノ拙者が。

伴左 若輩の事なれど、蟲押への灸代り、打つてく、打ちのめし召されい。

女蕃 心得ました。

左京 御近習、竹刀。

臣二 ハア。

ト繪馬に打ちたる竹刀をよき所へ直す。

伴左 兩人 支度。

權八 ハア。

ト白雛子になり、兩人、竹刀の側へ来て、式禮あつて、ヤツと立上がり、よろしくあつて、ト、支蕃を打据る。伴左衛門、後ろより支蕃が落せし竹刀にてかゝる。權八よろしく立廻りあつて、兩人屹度とまゐる。詠への鳴り物になり、ト、竹刀にて伴左衛門を當てる。權八すぐに打つてかゝるを、山三ツカツカと寄つて、權八を制し、下に置く。伴左衛門心付き、刀を抜いて、山三の目先きへ突附ける。これにて山三、扇を顔へ當て、タチ／＼となる。皆々、この體を見て

皆々 名古屋山三が、この體は。

伴左 御覽の如く眩暈の、病といへど、何とやら。

ト白刃を納める。

額五 心得難き彼れが胸中。

女蕃 もしや作病構へし上

左京 當家退去は、祿の不足か。

山三 イヤ、全く以て。

伴左 さなくば、病は

女蕃 療治を加へ、勤仕いたすか。

伴左 離散いたすか。

額五 善惡ともに、仔細もあらば

女蕃 權八もろとも

權山 然らば御前へ

額五 方々、案内。

皆々 先づ、入らせられませう。

ト唄になり、額五郎先きに、皆々附添ひ、入る。伴左衛門、支蕃残り

支蕃 伴左衛門どの、

伴左 コレ。

ト音楽になり、兩人思ひ入れ。

石塚支蕃、件の一儀、如何いたした。

支蕃 仰せの如く、かねて一味の所化願哲、まんまと首尾よく系圖の一卷、イザ、お受取り下さりませう。

ト出す。この時、侍ひ一人窺ひより

侍ひ その一卷

ト支蕃が持ちし一卷を引ツ凌ひ、行きにかゝる。この時、揚げ幕にて

助太 エイ。

ト手裏剣飛び来て、侍ひの胸へ立つ。侍ひ苦しみ、控となる。兩人見て

兩人 これは。

助太 お騒ぎあるな、重勝どの。本庄助太夫、それへ参つて、面談いたさう。

ト詠への鳴り物になり、本庄助太夫、上下、衣裳、大小にて出て来る。此うち、支蕃、件の一巻を伴左衛門へ渡す。

伴左 助太夫どの、只今出仕召されたか。

助太 あれにて様子を見受けますれば、折角手に入る系圖の一卷、持つて逃け出す曲者ゆゑ、見るに忍

びず拙者が手の内。

支蕃 天晴れなお手際。

助太 何は格別、申し談ずる様子もあれば

伴左 まづく。

助太 然らば御免下さりませう。

ト舞臺へ来る。

支蕃 助太夫どの、お喜び下さる。山三が預かるところの系圖、手に入りましてござります。

助太 天晴れお手柄。一卷さへござれば、妾腹の額五郎どのを世に出しなば、我れくが大成成就。

伴左 支へ立てする白井兵左衛門を初め、名古屋山左衛門、人知れず失ひ、俸山三は退去の願ひ。

助太 併し、白井兵左衛門に二人の俸、兄の彌市は盲目ゆゑ、出國いたす筈なれども、弟權八は忠義を

思ふ小癩者。

伴左 その心配は無用々々。おてまへと權八は、叔父甥の事なれば、手段を以て身方に引入れ、異議に及ばず、コレ。

ト囁く。

助太 承知いたしました。

伴左 あらまし手管調へども、助太夫どの、御子息助市どの、神妙劍の一卷を奪ひ、其座より行方知れず。

助太 ハテ、その儀はお氣遣ひ召さるな。勘當なせども、親子の儀なれば、情けを以て誘きよせ、その

一卷は此方へ。

伴左 それにつけても、我が願ひ、どうぞ首尾よく、此方へ。

助太 伴左衛門どの、おてまへの願ひと申すは。

伴左 仔細を申すも恥かしながら、某かねて腰元岩橋に、殊の外なる執心。女蕃どの、お身に頼んだ短

冊の返事は、如何いたしました。

女蕃 サア、お聞き下されい。今日送りし短冊、又、山三が家來八内も、同じく艶書の短冊。女は一人、

口説き手は二人、何れへ返歌もなりがたしと、その儘に突き戻され、面目次第もござりませぬ。

ト短冊を出す。伴左衛門取つて

伴左 ヤ、こりや某が短冊ならず。模様は雨に濡れ燕……裏に紅筆にて一首の返歌。……君ならば

幾枝も手折れ櫻花 野山の嵐いとふ身なれば……すりや、この一首は、山三へ返歌であつたよ

なア。……ムウ。

女蕃 それといふのも、あの八内めが、ませツ返した故の事。

助太 その八内は鹿藏と申して、身が家來なりしが、我れくが企ても氣取つた様子、それゆる暇を遣

はしてござるが、山三が方に仕へ居れば、迂濶に心は許され申さぬ。

伴三 山三もしれ者。最前の願ひといひ

女蕃 常に變りし詞の端々

助太 油断ならざる彼れら主従。

伴在 遺恨重なる山三元春。おのれ、其まゝ

ト短冊を見て、思ひ入れ。

兩人 ヤア。

ト伴左衛門氣を變へ

伴左 助太夫どの、後刻お目にかゝりませう。

ト唄になり、伴左衛門先きに芝番奥へ入る。助太夫残り、こなし。

助太 今を盛りの不破、名古屋。ハテ、立派な武士ぢやなア。

トばたくにて、権八、願哲を引立て、あとに才藏附添ひ、出る。

願哲 御免なされませう。

助太 ヤア、権八。如何いたした。

権八 若輩者と侮つて、我れをさみする法外者め。

才藏 その坊主は、系圖に心をかける様子。必ず油断なされまするな。

権八 さてこそ汝は

願哲 こいつは堪らぬ。

ト振り切り、一散に向うへ入る。

兩人 あの曲者を、ちつとも早く

才藏 心得ました。

ト寺鐘の送り、才藏あと追ッかけ、入る。

権八 ハテ、油断ならざる彼れが振舞ひ。

助太 高の知れたる下司坊主、矢張り其まゝ、其まゝ。

権八 これはく、叔父者人には、未だこれにおいてござりまするか。

助太 只今聞けば、其方が御前にての立合ひ、諸家中の噂。某は元より、草葉の蔭の父御も、さぞ喜ぶ

であらう。

権八 有り難い其お詞。親兄弟も無き身の上、この上ながら叔父者人。

助太 なにサ、頼む、頼まぬとは、こりや他人の事。其方とは叔父甥の仲なれば、何によらず、身共が

云ふ事、背きはせまいな。

権八 これはく、改まつたる其お詞。親亡き後は叔父が親。何しに違背ござりませう。

助太 それ聞いて先づは安堵。然らば、何事によらず、身共が詞を背かぬといふ、誓紙が見たい。

権八 ヤ、なんと仰しやる。

助太 親亡き後は叔父が親、違背いたさぬ金打いたせ。

権八 何か存じませぬが、金打と申しては

助太 成らぬと申すか。

權八 イヤ、全く

助太 然らば早く。

權八 ハッ。

ト金打する。合ひ方になる。助太夫見て

助太 天晴れ金打。慥かに見届けた。

權八 して、あなたの御所存は。

助太 荷擔いたせ。

權八 ナニ、荷擔とは。

助太 何も其やうに驚く事はない。大殿御逝去の後、佐々木の家督未だ定まらず。然るに、家中二つに分れ、御本腹たる桂之助どのを家督になさば、我れくが心に任せず。それゆゑに今宵、茶の湯に事よせ毒殺なし、妾腹たる額五郎どのを世に出だし、家の政事を執り行ひ、あはよくば額五郎どのもおツ殺し、佐々木の家を押領なさば、其方とても立身出世。なんと、荷擔いたす所存は無いか。

權八 すりや、あなたには、家國を

助太 オ、サ、身共に荷擔いたしなば、事によつたら神妙劍も

權八 ナニ、神妙劍とは。

助太 イヤサ、眞實荷擔いたしなば、其方が心に叶へてくれう。

權八 すりや、アノ神妙劍も

助太 得心か。

權八 武士の金打。違背はござりませぬ。

助太 それで身共も安堵いたした。けにや、唐土にては、義を結びし花の桃園。

權八 それは兄弟

助太 これは叔父甥

權八 義に隔てなき

助太 武士の一言。

權八 叔父者人。

助太 權八。ドリヤ、歸宅いたさうか。

ト唄になり、助太夫向うへ入る。權八残つて、思ひ入れあつて

權八 思ひがけなき叔父者人のお詞。血筋の縁に搦まれて、是非なく荷擔は致したれど、此まゝにては

山三どのへ義理立たず。……それは格別、今宵のうちに、お命危ふき桂之助さま。いつそこの事申上けうか。……イヤ、他言せまじき武士の金打。というて、申上ければ御主人へ不忠。口外すれば不孝の罪。忠孝二つの路に迷ひし、權八が身の一生懸命。ハテ、心にかゝる事ぢやなア。

ト思案の思ひ入れ。合ひ方になり、奥より山三出て來り

山三 これは權八。いつの間じや。見れば、何か思案の體。どうしやつたく。

權八 サア、私も親どもの事思ひ出し、それゆゑ思はず、心の愁傷。

山三 イヤモウ、孝心のおてまへなれば、さこそ。さりながら、保元の亂れに、勅命とは申しながら、親子の心二つに分れ、親を討つたる源の義朝。武士の義理は、捨てがたいものではないか。

權八 ヤ、何と仰しやります。

山三 忠義のゑには現在の

權八 親を討つたる、源の義朝。

ト思ひ入れ。

ハテ、武士の身の上は、つれないものでござります。

ト泣き落す。

山三 おてまへは、なぜ其やうに

ト權八心附き

權八 サア、親を討つたる義朝は、私しの心には、不孝のやうに存じますが、忠孝二つの其うちで、

何方が重うござります。

山三 これは又、むづかしい事を申す。忠孝二つは人情の常。何れの道も重けれど、武士は猶更、忠こそ大切。

權八 ムウ。承知いたしました。

ト行きにかゝる。山三とめて

山三 血相變へて、コリヤどこへ。

權八 忠の一字が、重うござれば。

山三 義心によつて

權八 これより直ぐに。

ト花道へかゝり、思ひ入れ。

おはらば。

ト時の鐘の送りにて、權八向うへ走り入る。山三あを見送り
山三仔細も云はずに、あの形相。ハテ、心がりのな。
よび 殿の御歸館。

ト呼ぶ。音楽になり、山門の内より額五郎先きに、桂之助、伴左衛門、柵、早枝、楓、紅葉、岩橋
支番、左京、雲六、十助、その他、附添ひ、出る。支番、三方に系圖の箱を載せ、舞臺の眞中へ直し

女蕃 名古屋山三どの。預かりの佐々木家の系圖。御世代りには一七日の祈禱いたす御吉例。則ち今日
満願なれば、これへ持参いたしました。

桂之 封印はその係りたる名古屋山三。

額五 検分いたすは伴左衛門。とくと改め、館へ持参。

伴左 ハッ、畏りました。

ト箱の蓋を明けて見て、ギョツと思ひ入れ。また蓋をして

山三どの。系圖の一卷、おてまへの預かりゆる、御内見下されい。

山三 畏りました。

ト何心なく、箱の蓋を明ける。中より最前の草履出る。惻り思ひ入れ。

ヤ、お家の系圖と思ひの外、中には片足のこの草履。
皆々 ヤ、なんと。

女蕃 その草履は見覚えある、岩橋どの、草履の片足。

岩橋 ヤ、最前思はず脱ぎ捨てしに、どうした事でこの箱へ。

山三 封印切れざるこの器。ハテナア。

左京 系圖の一卷無き時は

皆々 お家に係はる一大事。

額五 伴左衛門、詮議いたせ。

伴左 ハッ。……腰元岩橋。山三どの。ちよつと御意得ませう。

岩山 ハッ。

ト思ひ入れ。

伴左 山三。岩橋。罪に服して繩にかゝれ。

岩山 何ゆゑあつて我れを

伴左 知るまいと思ふか。先君御逝去の後、御家督未だ定まらず、某お附きたる額五郎さま、御惣領た

るによつて、お世繼となる時は、おのれが儘にならざるゆゑ、それを妨げんと系圖の一卷押し隠し、おてまへが附き人たる、桂之助さまを世に出だし、國家の政事心の儘に執り行ふ、汝等二人が計らひであらうがな。

山三 ハ、、、。其方が心に引き比べ、跡方もなきその一言。

岩橋 女のわたしと心を合せ、事を計ると仰しやるのか。

山三 たとへ野心があるにもせよ。女如きを便りにせんや。痴けた事を。……但し、これには證據ばしあつてか。

伴左 證據無き事申さうか。

岩山 して、その證據は。

伴左 この短冊。覚えがあるか。

ト以前の短冊を見せる。兩人 悔り。

岩山 ヤ、その短冊は。

伴左 雨に燕のこの模様。送りし戀歌のその一首。……「憂しとても、更に思ひは返されぬ、戀はうらなきものにぞありける」——こりやコレ、正に山三が手跡。

岩山 サ、それは。

伴左 裏に返歌は紅筆にて、……「君ならば、幾枝も手折れ櫻花、野山の嵐いとふ身なれば」……この返

歌は岩橋。其方が手跡であらう。

岩橋 サ、それは。

伴左 二人が心を一緒にして、系圖を盗み、其あとへ、重みに入れたこの草履。まつた二人は不義の大罪。

岩山 サ、それは。

伴左 云ひ譯あるか。

岩山 サア

伴左 サア

三人 サアくくく。

伴左 云ひ譯無くば、この場に於て。

ト伴の草履を以て、山三に打つてかゝる。この時、後ろに八内窺ひ出て、伴左衛門の持ちし草履を取り、伴左衛門をしたゝかに打つ。伴左衛門その手を取り、兩人きつと思ひ入れ。音楽になる。

伴左 待て、下郎。何ゆゑあつてこの打擲。

八内 打つたがどうした。イヤサ、叩いたがどうした。事によつたら、命も取るワ。
伴左 何がなんと。

八内 最前より聞いて居れば、岩橋どのお旦那が、心を合せ、系圖とやら、盗み隠したと云はつしや
るが、おのれが科をおのれが現はさうと、草履をこの箱へ入れて置く痴呆があらうか。殊に、又、
コレ、見やれ。

ト鼻緒に巻きし反故を取つて

鼻緒に巻いたるこの反故は、お旦那からおてまへへ参つた御状、不破伴左衛門どのへ名古屋山三。
其方で讀むは其方の反故。さすれば系圖の盜賊は、問ふに及ばぬ伴左衛門。きりく一卷、出さ
つしやい。

伴左 ヤア、どうしてそれが

女番 そんなら最前の

八内 覚えがあるか。

伴左 サア、それは。

八内 なんと、好い極め所であらうがな。

伴左 イ、ヤ、系圖の一埒は差し置き、二人は不義の科人だワ。

八内 イ、ヤ、お二人は不義者ではござらぬ。

伴左 何と。

八内 その不義者は外にある。おてまへ、この品覚えがござるか。

ト最前の短冊を出す。伴左衛門見て

伴左 ヤア、この短冊は

八内 むら立つ雲に稻妻は、それといはねど、重勝さま、岩橋どのへ送りし戀歌。なんと、違ひはござ

るまいが。

伴左 サ、それは。

八内 云ひ譯ござるか。ナ、なんと。

伴左 慮外な下郎め。

ト八内へ切り掛ける。兩人立廻つて、きつと留まる。

桂之 方々、控へい。

伴左 でも

桂之ハテ、成敗は追つての事。

しが爰は靈場、法の庭。生けるを放す法會の日に、血をあやなすは御廟へ恐れ。殊に、御前の御意でござる。

伴左 ハテ、命冥加な。

八内 行届いたる御仁政。この上も無きこの御上意。

山三 有り難う存じまする。

伴左 して、この上の御賢慮は。

額五 今日けふの法事ほふじを幸さいひに、助命じよめいとあらば六角左京かくさきやう、其方そのほうよきに計はからへ。

左京 畏かしこまりました。……腰元岩橋こしもといははし。不破ふは、名古屋の兩人りやうごん。

三人 ハツ。

左京 其方そのほうども二ヶ條にがじょうの申し譯わけ立ち難がたく、既に御法ごほふの通り行おこなふべきところ、格別かくべつの思おぼし召めしを以もつて、助命じよめい申し附つけ、長ながのお暇いとま下さる間あひだ、有あり難がたくお受うけ致いたせ。

伴左 ヤ、岩橋いははし、山三さんぞうは兎も角かくも、何なにゆる拙者せつしやに、長ながのお暇いとま。

左京 何かはその身みに覺おぼえあらん。そこらあたりに一味合體いみがつたい。やゝともすれば、お家いへを窺うかがふ……イヤサ、





お家御法度は不義密通。艶書の短册路顯の上は、三人共に科は同罪。

伴左 すりや、いよく拙者のめも……ハテ、思ひがけない。

岩橋 これといふのも、皆私しがいたづらから。この身の科はいとはねど

八内 何卒主人山三が身の上、今一應お上のお慈悲で

山三 斯く成る事は知らねども、この程某多病の願ひ

岩橋 御病氣ゆるのお暇ならば、また御歸参も叶ひませうが、不義ゆる今のお身の上。只悲しいはわた

しゆるゑに

トこの時、下の方へ三平出て

三平 最前より何かの様子承りましたが、折角御奉公に差上げました娘が、長のお暇となりましたか。

岩橋 義理ある父様のゆるゑ、わたしや大事と思つたれど、斯うなつたら是非がない。堪忍して下さんせ。

三平 おぬしが出世を待つて居たに、ひよんな事してくれたなア。鶯が子は鷹にならずぢやなア。

立蕃 今更未練なその吠え面。

雲六 暇が出たれば、二人の帯刀。

左京 何處へ退去いたすとも、腰があいては見苦しい。二腰は身共が寸志。御法でござれば肩衣を

十助 心得ました。

ト兩人の肩衣を取る。

腰元 お二人様の、この體は。

岩橋 昨日に變る此お姿。

八内 たとへ浪人なされても、下郎はあなたと御一緒に。

山三 尤もなる願ひなれど、今日一日は殿の御供、役目終らば勝手次第。

八内 左様ござらば、お供いたして

伴左 浪人するも自業自得。人を呪はゞ穴とやら。これから互ひに天竺浪人。

左京 やがて歸參は、お家の系圖、紛失なしたる神妙劍、持參の方が御家督定め。

伴左 すりや、拙者が尋ね出だしなば

額五 世繼ぎはさしづめ額五郎。

岩橋 元春さまのお手に入りなば

桂之 弟ながらも家督は某。

八内 疎かならぬお家の納まり。

山三 身を粉に碎き、實の詮議を

桂額 きつと申し渡したぞよ。

山伴 委細承知仕つてござります。

トこの時、雷薄く鳴る。

轟坊 恐れながら、御兩君へ申し上げます。雷氣催ふしましてござりますれば、御歸館あつて、然るべ

う存じます。

額五 最早黄昏。

桂之 住職には大儀。

山伴 左様ござらば、御機嫌よろしう。

玄蕃 殿のお立ち。

皆々 ハッ。

ト時の鐘。行列三重になり、皆々附添ひ、向うへ入る。八内少し引下がり、山三と顔見合せて思ひ入

岩橋 殿様のお暇の出た私し、爰に長居は御廟へ恐れ。

山三 岩橋どのには早くこの場を
岩橋 何かの事は、後に緩りと。

ト行きかゝる。

伴左 岩橋。待たつしやい。

岩橋 御用でござりまするか。

伴左 イヤ、用ではないが

岩橋 そんなら私しは

伴左 エ、未練な奴だが、こなたにちつと、恨みを云はねばならぬ。

山三 重勝どのとした事が、女子供か何ぞのやうに

岩橋 お恨みなさるはそりや何事。

伴左 その身に覚えはござらうが、送りしばかりで返事もなく、その短冊の一埒で、斯く成り果てし伴左衛門。俗に申せば、うまらぬ身の上。斯くなるからは破れかぶれ、是非とも色よい返事をば

岩橋 御尤もではござりますれど、御奉公の内なれば、不義はお家の堅い御法度。

伴左 そんなら何で、掟を破り、山三へ返歌の短冊は。

岩橋 サア、それは。

山三 掟破りし科により、お暇出たれば、互ひに五分々々。

伴左 おてまへの身の上は、眩暈の病ひゆる、暇の出たは折に幸ひ。

山三 その眩暈も眞は偽り。

伴左 ヤ、そんなら貴殿は作病か。

山三 父山左衛門横死の後、暇を願ひ、身軽になり、何卒父の敵討……サ、堅き邸の奉公より、流れ次第に浮世の樂しみ。

岩橋 暮らす心はお二人さん。

伴左 同じ罪たる天然浪人。

山三 主持たぬ身の氣散じは

岩橋 法度を破る氣遣ひなければ

山三 刀にかけて

伴左 身共が女房。

山三 イ、ヤ、拙者が。

伴左 ーヤ某が。

二人 何を。

ト思ひ入れ。岩橋中へ入り

岩橋 モシ、待つて下さんせ。互ひに挑む刀の意氣地。直ぐさま斯うと云はれぬは、この身は一人、男

は二人。

山三 何れが何れと、分け難ければ

岩橋 心の定まる其お方が、八千代をかけて、ナ、わたしの夫。

ト山三にのみこます。

山三 成る程。この場の論を鎮めんと、尤もなるその一言。

伴左 その古への津の國の

山三 女夫ケ池に准へて

兩人 ハテ、何をがな。

ト思ひ入れ。詠への合ひ方になり、兩人櫻の枝を切り、岩橋が前へ持ち來り

山三 二人が心底。

伴左 まッこの通り。

山三 何れを手活けの

伴左 花と詠めん。

岩橋 同じ櫻の枝ながら、わたしが望みはこの櫻。

ト山三の枝を取り、花筒へさす。伴左衛門思ひ入れあつて

伴左 そんなら身共が

岩橋 花に嵐は、まッこの通り。

ト伴左衛門の花を打ちつける。伴左衛門抜きかける。山三この中へ入り、伴の枝を取り、伴左衛門の

目先きへ突きつけ

山三 落花再び枝に歸らず。思ひ諦め、重勝どの、とくくこの場を、退散召されい。

伴左 うぬ。

ト寄らうとする。山三とろしく留める。

岩橋 水際清く、きつとして、切れ口すぐにこの櫻。

伴左 ヤ。

岩橋 それに引替へ、お前の枝は、斜に切れしは心のひがみ。どうしてわたしが活けられませう。

ト伴左衛門の櫻を捨てる。

伴左 見るに目の毒、觸るに煩惱。嫌がられる程一しほ執心。

山三 イ、ヤ、今日より手活けの花と

伴左 詠める心か。

山岩 今宵はしつほり。

ト兩人思ひ入れ。伴左衛門見て

伴左 ハテ、羨ましい。

ト思ひ入れ。薄き雷になる。三人空を見て

岩橋 アレ、春雨が

ト有り合ふ傘を取つて、真中に開く。

兩人 我れらも爰に。

ト兩方より傘を取り、差出すと、名古屋の紋になる。

岩橋 この春雨は結ぶの縁。わたしがさした傘と、合はしてちやうど二本傘。

伴左 そんなら、どうでも。

ト正面の黒幕落すと、稻妻しかけ、雷落ちる。岩橋「アレ」と山三に取りつく。これにて傘の兩人隠る。伴左衛門見て無念のこなし。傘振上げ、思ひ入れあつて、傘を投げる。木の頭。双方よろしく、

キザミ、ひやうし

時の鐘、雨車のツナギ、すぐに引返す。

幕

本舞臺、三間の間、九尺の亭座鋪。前側へ障子立て切り上下は柴垣、石燈籠。いつもの所に柴折戸。

すべて助太夫住家の體。雨車、時の鐘。雷の音にて幕明く。

ト下座より中間一人、赤合羽、笠を着て、箱提灯、蛇の目の傘を持つて、出て來り

中間 何だか剛氣に降つて來たわえ。この雷の鳴るのに、御新造様はどこへござつた。お迎ひに行か
ずばなるまい。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。合ひ方になり、向うより八内、木綿やつし、赤合羽、中間の形、箱提灯
にて、出て來り

八内 昨日に變る旦那の身の上。それにつけてもおいらまで、もっそう飯の喰上がり。まだ頼みは助太

夫さま、お上へ願ひ、旦那のお詫び。さうだく。

ト門口へ来る。この時、障子の内にて

権八 すりや、どうあつても。

助太 小癩な事を。

権八 ハテ、是非に及ばぬ。

ト物音して、障子へ血煙りかゝる。八内驚き

八内 何やら險しきあの物音。

ト思ひ入れ。物凄き合ひ方になり、障子の中より白井権八、振り袖の着流し、白刃を提げて出る。八内提灯を袖に隠し、窺ひ寄つて目先きへ突出す。権八提灯を打落す。兩人きつと見得。鳴り物變り、立廻りよろしくあつて、兩人きつと見得。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面の黒塀、見越しの松、裏手のかゝり。右鳴り物にてこの道具留まる。

ト向うより、バタ／＼になり、願哲、才藏、以前の形にて、立廻りながら、出て來り

願哲 こりやア野郎め。どうするのだ。

才藏 どうといつたら、最前の、系圖の箱を此方へ渡せ。

願哲 系圖とやら、黒鯛とやら、そんな物は知らねえわえ。

才藏 知らぬといつて、その儘に置かうか。

願哲 何を小癩な。

ト雷の音になり、兩人掴み合ひながら、下座へ入る。向うより彦左衛門、赤合羽、中間笠にて、箱提

灯、六尺棒を持ち、安下駄を穿き、出て來り

彦左 火の廻り、火の廻り。……桑原々々。氣味の悪い晩だわえ。雨が降つても、雷でもこの夜廻り、

孫子の代まで、此やうな、下司奉公はさせる物ではねえわえ。……火の廻り／＼。

ト舞臺へくる。揚げ幕より、以前の中間、消えたる提灯を持ち、出て來り

中間 オ、火の廻りの衆。待つて下さい／＼。

彦左 なんだ／＼。

中間 提灯の火を消した。火を貸さつし。

彦左 サア、つけさつしやい。

ト中間火を借りながら

中間 なんと恐ろしい雷ではねえか。

彦左 それサ。初瀬寺の方が剛氣に光る。

ト此うち、雷烈しく鳴る。

中間 そりやこそ鳴るワ。桑原々々。

ト件の傘を、花道よき所へ捨て、走り入る。

彦左 ア、桑原々々。

ト氣味悪きこなし。この時、バツタリ音して、詠への鳴り物になり、黒塀を切り破り、権八以前の形に

て、白刃を持ち出る。彦左衛門、おづく棒にて打つてかゝる。権八きつと見て、刀の血を拭けといふ

こなし。彦左衛門、ぶるくしながら、手拭にて拭く。権八、彦左衛門が穿いて居る下駄を寄越せと

いふ思ひ入れ。彦左衛門下駄を脱いで渡す。権八、彦左衛門に提灯を持つて、先きへ行けといふ仕方

する。彦左衛門提灯持ち、先きに立つて行く。花道へかゝる。

権八 正しく所持と思ひの外、ハテナア。

ト思ひ入れ。これにて又雨車になる。権八、中間が置いて行きし傘を見つけ、彦左衛門に取れといふこ

なし。彦左衛門おづく取つて渡す。権八取つて開く。木の頭。傘をかたげ、空を見上げる。キザミ

よろしく、拍子

幕の外、詠への鳴り物になり、彦左衛門に提灯を持たせ、入る。あとシヤギリ。

二幕目

大師河原の場

役名——雪駄直し、彌市。三浦屋小紫。三浦屋女房、お高。新造、花山。幫間、左吉。判人、

善六。錦繪屋、喜助。飴屋、清八。見世物師、又平。又平娘、お國。家主、左郎兵衛。鷺の長吉

長兵衛一子、長松。本庄助八。飛脚、とゞ平。

本舞臺、一面の淺黄幕。正面、九尺の障子屋體、軒口に市村座講中の團子提灯を吊し、御料理と書
きし行燈懸けあり。上方、葎簀の見世物小屋、蛇遣ひの看板。木戸口に浮世又平、白髮親仁にて、
云ひ立て、居る。下座の方に、雪駄直し、古手拭にて顔を包み、菅笠をかむり、雪駄を直し居る。こ
の側に、仕出しの若い者、雪駄を直させて居る體。屋體の前に、清八、飴賣りの荷を置き、口上云つ
て居る。開帳の建て札。すべて大師河原、平間寺開帳の模様よろしく、双盤の音、辻打にて幕明く。
ト仕出し大勢行違ひ、飴を賣る事あつて、見世物小屋へ入る。

清八十で六文々々。

又平ア、見しやれなく。これは丹波の國大江山の狩人の一人娘。嫁入り盛りを数多の蛇に見込まれて、あの如く、誠に親の因果が子に報ふと、生れもつかぬ不具者。見るも法樂、見らるゝも後生。僅か八文でお話になりますワ。錢は、戻りぢやく。

清八 これはお江戸に名代の三本鈴。香ばしうて齒に附かず。お子様方の腹藥。十で六文。廉いの根元ぢやく。

ト此うち、仕出し、見世物小屋より出で來り

△ 何と好い娘だが、蛇遣ひには惜しい事ぢやなア。

□ あれで又、顔に痣が無けりやア、品川の大見世の女郎にもあるまい。

○ ほんに、あゝして置くは惜しい物だ。

ト捨ぜりふにて入る。

清八 カウ、又さん。今朝から立て込んで、まだほそを附けなんだ。この間にちよつとかまして來るか、氣を附けてくんせえ。

又平 オイ、承知だ。

清八 ドリヤ、ちよつと搔込んで來ようか。

ト下座へ入る。

若者 オイ、錢はそこへ置くよ。

又平 ドリヤ、一服のまようか。

ト矢張り辻打にて、雪駄直しに錢を遣り、下座へ入る。雪駄直し、そこら片づけ、その儘に置き、下座へ入る。向うより本庄助八、小揚げの形にて、肴籠を荷ひ、本舞臺へ來て、正面屋體へ向ひ

助八 オイ、料理番さん。芝河岸から來やしたよ。

勘吉 オイ。

ト勘吉、料理人、前垂れ掛けにて出る。

こりやア小揚げの衆、御苦勞。

助八 アイ、送り状。

ト勘吉へ送り状渡す。

勘吉 よしく。受取りました。茶でも飲んで行きなせえ。

助八 ハイ、有り難うござります。

ト勘吉着籠を持ち、奥へ入る。助八、杵を棒に巻き居る。この時、又平、助八を見て
又平 ヤア、お前は本庄の若旦那、助八さまぢやアございませんか。

トこれにて、助八悔り

助八 ヤ。さう云ふは不破伴左衛門の二郎、又平ではないか。

又平 さやうでござります。

助八 そしてお前は、いま何をして居るのだ。

又平 お聞きなされませ。お前様も御存じの通り、伴左衛門さまのお頼みで、お前と二人して、名古屋山
左衛門、白井兵左衛門、この二人をおツ殺し、山左衛門が差して居た蔭の太刀とやらを、伴左衛
門さまに渡したゆゑ、定めし褒美と思ひの外、伴左衛門さまは浪人の身の上、虺も取らず、蜂も
取らず、なんと好い見世物師とは成りました。

助八 人に骨を折らせ、實は手前へ引上げる、伴左衛門の悪顔。それゆゑ、神妙劍はその場より引ッ渡
つて、金と引替へでなけりやア、渡さぬつもりで、コレ爰に。

ト出し、見せる。白蛇出る。

又平 ヤア、白蛇がお前の體へ。

助八 この神妙劍を守護なす白蛇。この一卷を出すたびに、誠にこれには恐れてるて。

ト懐中する。ドロ／＼止む。白蛇消ゆる。

又平 ハテ、奇妙な事もあるものだ。

ト辻打になり、向うよりと又平、飛脚の形にて、状箱を首に掛け、出て来り、障子屋體に向ひ

と又平、息が切れた。コリヤ、茶を一つくれ。

ト挨拶せぬゆゑ

ヤイ、こゝな内には、人は居らぬか。茶をくれ。

又平 ア、モシ、そこは水茶屋ではござりませぬ。料理屋でござります。

と又平、そんなら料理屋では、茶ばかりは賣らぬか。ハテ、不自由な。

又平 さやうサ。

と又平、コレ、息が切れたゆゑ、何ぞ……幸ひく、こゝに飴がっこれで咽喉を濕ぼして。コリヤ、
飴屋々々。

飴屋々々。

又平 ハイ、飴屋は今、飯を食ひに参りましたが、いくら上げませう。

と又平、茶の代りに、二文くれろ。

又平 たつた二文か。ハイ。

ト取つて遣る。と平食つて居る。

助八 モシ、お前は急ぎのお飛脚さうなが、どれからどれへござります。

と身共は因州佐々木家の飛脚だが、因州の侍白井權八といふ者、同家中本庄助太夫といふ者を討つて立退きしゆる、江戸屋敷へ知らせの早飛脚だて。

助八 エ、そんならおれが親仁の助太夫どのが、甥の權八に殺されたか。ムウ。

ト思ひ入れ。

とア、さやうならば、お前様が、本庄氏の御息でござりましたか。さぞ、御無念にござりませう。幸ひ敵討には身をやつすものでござれば、その形にて直ぐに御出立なされませ。

ト此うち、又平餘屋の賣溜めを盗む事。

助八 なにサ、親は親だが勘當の、この助八。今は赤の他人も同然。

又平 さやうサ。古風な事をしようより、好きな事をして暮らすが當世だての。

助八 それはさうと、急ぎのお飛脚が、なぜ六郷を渡らずに、この廻り道はさつしやれた。

とさればサ。權八が事を知らすかたく、お邸への爲替金三百兩、あの物騒な鈴ヶ森を、無難に通

りたいと、厄除け大師様へお願い申さうと存じて。

助八 ムウ、そんならお前、金を持つてお出でなされますかえ。

とオ、サ、しかも小判で三百兩、コレ爰に。

ト出して見せる。又平思ひ入れあつて

又平 随分大事になされませ。

とドリヤ、お詣りして來ようか。

ト下座へ入る。

又平 ハテ、羨ましい大枚の金。

助八 ヤ。

又平 イヤサ、大師様へこの間に、お詣り申さうか。

トと平の跡を追ひ入る。助八残り、こなし。

助八 ハテ、とんだ話を聞くものだ。あの従弟の權八が、おれが親仁を殺したとは。……併し、この孝行な助八を勘當する程な親仁め、人手にかゝるも尤もだ。あんな親仁の敵討をしようより、この神妙劍を賣り拂ひ、この身の榮華。

ト懷中より一卷を出すと、ドロ／＼にて白蛇出る。
エ、鬱陶しい。また出やアがつた。これぢやア滅多に持つては居られねえ。どこぞ暫く隠し所
が……オ、あるワ／＼。幸ひこの雪駄直しの籠へ。

ト件の籠の中へ入れる。白蛇消ゆる。ドロ／＼止む。

コリヤ、人が見たらば蛙ぢやない、蛇になれよ。

ト辻打になり、下座へ入る。直ぐに向うより三浦屋女房お高、引込み新造花山、餘所行きなりたいこちの形かたち替間

左吉附添ひ出る。あとより願哲、破れ衣の乞食坊主、建立の幟のぼりを持ち出る。

願哲 南無大師遍照金剛々々々々々々々々。厄除け大師様へ納め奉る金燈籠の建立。お心持次第、お施

主にお附きなされませう。

左吉 エ、附くなく。

願哲 ハイ／＼。自力に及びませぬ。御他力を以ちまして。

左吉 エ、附くなといふに。

トこれにて、皆々本舞臺へ来て

花山 モシ、左吉さん。あの花魁は、六郷の渡し場から、後ばつかり見て居なさんですが、ありやどうな

さんしたのであらうな。

左吉 大方、乗合ひのお若衆、好い男であつたが

たか 大方、それに。

左吉 それにしても、粹を賣る商賣しやうばいでゐながら、イヤモ、花魁といふものは、初心うごなもの、あんまり歩
きなさるが埒らちが明かぬゆゑ、駕籠かごに乗せて先きへ寄越よこしたが、どの茶屋ちややへ下ろしたやら。

トこの時駕籠かご昇かき二人、下座より出て

駕甲 お女中様は、爰こゝの内へ入りました。

駕乙 只今御酒下されまして、有り難がたうござります。

花山 モシ。

ト金の包つみをやる。

兩人 ハイ／＼、有り難がたうござります。又お歸りかへにお頼たのみ申まします。

ト入る。

願哲 ハイ／＼、結構けつこうなお詣り様さま。どうぞお志こころざしを。

たか コレ、左吉さん、遣やらしやんせ。

左吉 ハイ。……ソレ、遣るワ。

ト錢を出しやる。

願哲 今日のお志、南無大師遍照金剛々々々々々々々々々々。……ドリヤ、一杯引ツかけて來ようか。

ト捨ぜりふにて上へ入る。

たか それはさうと、長松や長吉じんは、どうさんしたな。

左吉 あの子達は、何か後で買つて居やした。

ト流行り唄になり、茶屋廻り鷺の長吉、鷺の者、餘所行き拵へにて、繪草紙屋喜助の首筋引立て、出る。あとより長松、長兵衛の拵の拵へ、渡邊と七綾の錦繪を持ち出て來る。判人善六、附いて出る。

喜助 御料簡なされませ〜。

長吉 イ、ヤ、ならねえ〜。

長松 引摺つて行け〜。

善六 コレサ、大概に料簡してやらつし。

長吉 イ、エサ、幡隨長兵衛が子分、鷺の長吉だ。うぬらにちよつくり返されちやア、親分へ云ひ譯がねえ。うしやアがれ〜。

善六 コレサ、不承してやるがい。

喜助 どうぞ御料簡なされませ。

長松 イ、ヤ、ならねえ。うしやアがれ〜。

ト皆々本舞臺へ來る。

たか これはしたり、長吉どの。どうしたもんでござんす。

花山 もう堪忍してやらんせ。

長吉 なにサ、聞きなせえ。この商人めが、一枚繪草紙を賣りやアがるゆる、新繪はねえかといつたら、

ありますと云やアがつて、コレ、見なせえ。

ト長松繪をひろげ

長松 この通り、去年の顔見世の、七綾と渡邊の繪を出しやアがる。こりや古いと云つたら、子供には

何でも同じ事だと云やアがつたから

長吉 そこで、この子が腹を立て、なんほ子供でも、新らしいのと古いのは知つて居ると云つたら、

この野郎が吐しやアがるには、餓鬼の癖に洒落れた事を、そんなむづかしい繪はねえなど、ちよつくり返されては、折角連れて來たこの長吉が云ひ譯がねえから、爰まで引摺つて來たのサ。

善六 コレサ、さうではあらうが、それにやア詞の間違ひといふものがあるものだわな。

長松 おいらは嫌だ〜。うぬが腦天ぶち割つて

ト雪駄にて打つてかゝる。善六止める。此うち、下座より李郎兵衛、麻上下にて、開帳場の世話人の拵へにて出て来る。

長吉 なにサ、善六さん、打ッちやつて置きなせえ。

善六 それだといつて

長松 うぬ、野郎め。

ト善六を振り拂ひ、又行く。

李郎 コレサ、長松坊。どうしたのだ〜。

ト留める。

長松 イヤ、大屋の叔父、免しなせえ〜。

李郎 イ、ヤサ、待ちなせえ〜。

長吉 コレサ、大屋さん。あの子の十分にさせなせえ。江戸の生えぬき幡隨長兵衛さんの夜食の固まり。川崎近在の子を取扱ふやうにしやアがつて、あんまり目先の見えねえ野郎だ。

李郎 コレサ、長吉、こんたまでが其やうに力んでは、事が納まらねえ。おれが悪いやうにやアしねえよ。善六 それ〜、大屋さんに任せるがいよ。

花山 ほんにさうでござんす、此やうな事が、長兵衛さんの耳へ入つたら、ナア、おかみさん。

たか 大概にして料簡してやりなさいな。

長吉 成る程、お前がたが、いろ〜に云ひなざるを、強情にいふは大人氣ねえ。長松さん、不承しなせえ。

長松 そんなら、もう堪忍してやらうか。引けにはなるまい。ナア、兄イ。

長吉 なにサ、そりやア、皆様が先刻から

長松 野郎め。堪忍してやる代り、おいらの方へ来て見やアがれ。病犬をけしかけてやるワ。

左吉 今、小さくつても解りのい、どうでも達師の息子株。ほんに實もある花川戸、江戸市村と隠れ

なき、イヨ、音羽屋の若旦那ア。

長吉 おきやアがれ。何を云ふのだ。

花山 モシ、繪草紙屋さん。きつう商ひの邪魔でござんしたであらう。早うござんせ。

喜助 ハイ、有り難うござります。どなたも大きにお世話でござりました。シタガ、とんだ氣の強い俄

鬼どもだ。

長松 どうしたと。

喜助 イヤサ、とんだ目にあひました。

ト下座へツイと入る。

長吉 とんだ好い慰みをした。

善六 長公、お前がたは慰みでよからうが、素的においらに口をきかせやアがるぜ。

左吉 長松さん、そこに繪が落ちて居ますよ。

長松 ナニ、そんな繪は内にいくらもあるから、いらねえ。

トよき所へ置く。

李郎 それはさうと、三浦屋のおかみさん、よう御参詣なされました。

たか アイ、有り難い御開帳ゆゑ、やうくの思ひで、詣らうと話したら、内の抱への小紫が、わたしも願掛けがあると頼むゆゑ、外の人に附けて詣らさうより

花山 おかみさんがお付きなすつての御参詣。花魁は駕籠に乗せて、先へ来てござんす。

たか して、李郎兵衛さんには

李郎 大師様の講頭で、お開帳中取持ちに参つて居ります。御参詣なら私しが、御内陣へお連れ申します。せう。

たか ハイ、よろしうお頼み申します。

李郎 長松坊も、おかみさんと一緒にか。

長松 イ、エ、父さんの迎ひに来やした。

李郎 ムツ。して、長兵衛どんは、どこへ行かれた。

長吉 親方は四五日あとに、江の島の太々に行きやしたが、大方、今日らは歸りであらうと、外の子分の手合ひと一緒に行つたところ、三浦屋のおかみさんと、花魁がござつたゆゑ、川崎から一緒に、

お開帳詣りサ。

李郎 それは奇特な事だ。

長松 兄イ、もうお開帳へ行かうぢやアねえか。

長吉 さうしやせう。

ト立上がる。

花山 モシ、長松さん、とても事ぢや、花魁と一緒に行かしやんせいな。

長松 そんなら、姐さんと一緒に行かう。

左吉 時に、腹も八つ下がり。ちよつぴり爰で、一酒八つ山としては、どうでござります。

善六 成る程、こいつは奇妙。この善六がグツと承知だね。

左吉 お前に承知されちやア、大變だ。何にしろ、ちつとも早く。

たか 成る程、左吉どのの云ふ通り、殊に小紫も、きつう待遠でござんせう。李郎兵衛さんも御一緒に。

李郎 有り難うござります。モシ、善六さん。お前には少し話があるから、ちよつと残つてくんなせ

え。おかみさん、後から参じませう。

たか そんなら、お早う。

花山 サア、長松さん。長吉さん。

長吉 おかみさん、お先へ。

左吉 お客だよ。

たか 大きな聲だよ。

ト流行り唄になり、皆々正面の障子屋體へ入る。李郎兵衛、善六残る。下座バタ／＼になりと、うしやアがれ／＼。

大勢 泥坊々々。

ト辻打になり、とゞ平、又平を捕へ、あとより番人一人、平の字の附いたる法被を着て、六尺棒を持ち、あとより彦六、麻上下を着たる世話人、清八、喜助、以前の商人にて、附き出る。屋體より勘吉も出る。

一同 どうしたのだ／＼。

とゞイヤサ、聞かつしやい。此奴が、おれが持つて居る爲替金の三百兩、取逃げ致さうとしたのゑ、引ッ捕へて、金はたうとう取返したが、この親仁を、川崎の、代官所へ引摺つて行くのぢや。

善六 ハテ、とんだ太い奴もあるものだ。併し、金に別條が無くつてめでたい。

清八 一體この親仁は、手癖が悪くつて、常から賽錢泥坊をしたり、今までは大目に見て居たが、今日は好い次手だ。ぐる／＼巻きにして

勘吉 川崎の代官所へ差出すがい。

一同 さうするがい／＼。

ト多勢又平に立ちかゝる。この時、見世物小屋よりお國、木綿やつし、振り袖衣裳、顔に痣のある蛇遣ひの娘にて、走り出て來り

くに マア、待つて下さんせ。

ト皆々が前へ出て、押し退け、又平を圍ふ。

彦六 コレサ、女の知つた事ぢやアねえ。

一同 退いたく。

くに イエ、退きませぬ、モシ、わたしが義理ある父さんでござります。あなた方に打擲かれ

るを娘の身として、どう見て居られませう。悪い事は、私しが、幾重にもあやまりませう。御料

簡なされて下さりませ。お慈悲でござります。

と、コレサ、お娘。慈悲も料簡も術によつたもんだわな。この親仁は、おれが持つて居る爲替金の三

百兩を盗まうとしたのだ。

彦六 そればかりぢやアねえ。氣を付けて見て居れば、開帳場へ来て、足の裏へ飯を付けて、賽錢を盗

みます。

勘吉 そして、わし等の隣に居るから、ツイ忙がしい時は、店番してもらへば、茶漬、茶碗やら、火

箸の失せたも、大方、この親仁だらう。

清八 ヤ、それで思ひ出した。

ト館の荷を改め見て

おいらが賣溜めも無くなつたから、われが盗んだなく。

喜助 この間も川崎の茶屋で休んで居たれば、おのが小附けの風呂敷包みを引ッ浚つたのもこの親仁だ。

彦六 それく。わしも開帳場で、この親仁に、雪駄を盗まれました。

善六 年に不足も無くつて、丈の知れねえ太い親仁だ、おらが仲間の源七が所へ、女を勾引して来たも、

大方、この親仁だらう。こんな奴は、打ッちやつて置くと、大勢の難儀になります。

一同 ちつとも早く、代官所へ。

ト皆々かゝるを、お國、又平に逃げると教へる。これにて又平、下座へ逃げて入る。

一同 うぬ、泥坊を逃がしはしないぞ。

くに ア、モシ、お待ちなされて下さりませ。

ト一同を留める。

一同 そんならうぬも、同類だな。

くに サア、皆さんのお腹立ち、御尤もでござりますゆゑ、何とお詫び致しやうもござりませぬ。この

儘父さんをお代官所へ遣りまして、ひよんな別れになりましたら、娘のわたしが、ほんに、身も

世もあられませうか。モシ、その代り、あなた方のお盗られなされた品を、私しが辨まへませう程に、どうぞこの場は、お免しなされて下さりませ。

清八 なんだ。あの蛇遣ひの女が、皆の金を出さうといふのか。

一同 こいつは大笑ひだ。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

李郎 コレサ、そんなに笑ふ事は無いわな。見たところが孝行らしいこの娘、萬更當の無い事云ひもせまい。皆も黙つて居るから……コレ、娘、皆の金を出すとあるが、金高を集めたら、餘程の事。その心當りがあるかよ。

くに ハイ、ござります。暫くお待ち下さりませ。

ト合ひ方になり、善六の側へ寄り

只今も承りますれば、吉原の傾城屋へ、お世話なさる、お方さうにござりまするが、折入つてあなたへ、お願ひがござります。

善六 成る程、わしやア吉原の判人、善六といふ者だが、おれへ願ひとは。

くに 初めにお目にかゝりましたあなた様へ、お願ひと申しまするその譯は、どうぞ奉公人をお抱へなされて下さりませ。

善六 そりやハヤ、江戸近在を股に掛け、と斯う云へば、どうやら一文字屋の臺詞のやうだが、奉公人の取引きは、商賣つくの事だから、世話もしませうが、何しろ、その玉を見ないうちは、値も附けられぬ。して、その奉公人は。

くに ハイ、私しでござります。

一同 イヤア。

ト一同恟り。

善六 呆れて物が云はれねえ。累以來の話だ。ハ、ア、まだ羽生村の淨瑠璃を聴かねえな。この女は、路考おしやアそんな音が出る。

一同 ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

くに そりや生れついたら不具ゆる。ハア。

ト泣き落す。

善六 この女もあの親仁の娘といふからは、これを機にしてこの出入りを、ちやアふうにする氣だな。

彦六 親子相摺りだ。いつその見せしめ

一同 ぶんのめせく。

ト皆々有り合ふ物にて打ちにかゝる。善六、眞盆にて打つてかゝる。李郎兵衛支へて
李郎 コレサく、孝行な娘を、マアく

一同 イヤ、構ひなさんなく。

ト李郎兵衛支へる。皆々お國をくらはす。善六、此はずみに眞盆外れて、障子の屋體へ投げ込む。この時、長松、長吉出で來り、お國を圍ふ。

一同 子供は危ない。どけく。

長吉 イ、ヤ、どきやすめえ。大道中の眞中で、ぶつつはつつの其中へ、飛込むからにやア向う見ず。おれが斯うしたこの女中、指でもさして見やアがれ。それこそ忽ち一掴み、鷲の長吉といふ前髪だ。

長松 ちつと古いが、山椒は小粒だネ。

長吉 誰れだと思ふえ。風ひきた。

勘吉 イヤハヤ、素敵な管を巻き出したな。コレ、兄イ達、この女をかばひ立てすると、相摺りになるぞよ。

長吉 イヤ、その相摺りより、うぬらには、此方から云ひ分があるワ。

一同 アノ、こちとらに云ひ分とは。

ト障子の中より、小紫

小紫 その云ひ分は、わたしでござんす。

ト合ひ方になり、小紫、傾城、他所行きの形にて、眞盆を持ちて、顔へ疵の附きし思ひ入れにて出る。あとよりお高、花山、左吉附添ひ出る。

善六 誰れかと思へば、三浦屋のおかみさんに、花魁。

一同 こちとらに云ひ分とは。

小紫 この座舗は借り切りの、廊でいへば、わたしが部屋。たとへ二階廻しや遣手衆でも、自由にさせぬ小紫。それに何でお前がた、女子の嗜む化粧場へ、この眞盆を打込んで、なぜ此やうに疵を

附けさんした。アイタ、い、い。

李郎 その眞盆を振り廻したは、判人の善六どのだ。

善六 コレサ、とんだ事を云ふものだ。どうしておれが知るものか。

一同 おいらぢやア無いぞく。

ト立騒ぐ。

長吉 やかましい、巻録ども。黙りやアがれ。

小紫 モシ、おかみさん。ひよんな事の災難で、生れもつかぬ疵を受け、とてもこの顔では仲の町は張られませぬ。お内に居ても、益ないこの身。どうぞお情に、わたしが年季を下さんせ。

たか 成る程、其方の云ふ通り、顔を賣る商賣で、仲之町へ出られねば、朋輩の手前、面目なからう。いかにも暇は遣りもせうが、まづ判人の善六どのに渡つてから。……イヤナニ、善六どの、ちよつと爰へ来て下さんせ。

善六 アノ、わしにかえ。

ト前へ出る。

たか 外でもござんせぬが、今小紫が云うた事、聞かしやんしたでござんせう。なんと尤もではござんせぬか。サ、こゝが相談でござんす。もと、あの奉公人は、お前の判で寄越さんしたあの小紫。お前が手で疵を付け、あとの難儀を引出して置かしやんしたので、わたしが損をするも、あんまり阿房らしいではござんせぬか。殊に、あの奉公人は、廓で一二を争ふ上林の葛城か、三浦屋の小紫かと、その大事な太夫が疵を付けられて、人に面が合はされぬといふを、なんほ親方の威光でも、それでも勤めせいとは云ひにくい。ナア、善六どの、こりやどうしたらよからうぞいなア。

トこの時、善六術なき思ひ入れ。

李郎 イカサマ、こりやおかみさんの云ふのが尤もだ。なんほ抱へた奉公人でも、取扱ひがし憎いの

サ。こりや花魁の面晴れに、お代官へ突き出して、善六どのを入牢させるがようござります。

たか 成る程、こりやい、思ひ付き。そんなら出羽長、大儀ながら。

左吉 ハイ、幸ひ大屋様も、爰になら、直ぐに御訴訟申しませう。

李郎 左吉どの、サア、ござい。

ト立上がる。

善六 ア、滅相な。この事を届けられて堪るものか。

左吉 そんなら花魁の納得するやう、思案があるのか。

善六 ありますともく。マア、待つて下さい。

ト喜助清八を連れて行き

コレサ、お前がたも頼もしくねえ手合ひだぜ。人の困るを見て、面白さうに笑つて居る事はねえぢやアねえか。元この起りは、こんた衆が、親仁を窘めたから出来た事だ。

喜助 それだといつて、なんの其方の込めやう知るものか。

善六 知らぬとは云はさねえ。斯うした事は皆な一つだ。

喜助 この人は判人をする程もねえ。解らぬ人だぜ。

勘吉 それよりは、女を代官所へ。
ト皆々お國を引立てる。長吉、左郎兵衛支へる。この時、小紫、花山に嘸き、花山の懐より小判を出し、皆々の顔へ打ちつける。

一同 アイタ、い、い。

トよく見て

ヤア、こりや小判。

花山 花魁から

小紫 この一埒の金、取つて置きなんし。

一同 エ、忝い。

喜助 そんならこれから勘定立つて、その高だけに分けて取らう。

小紫 それでお前方、その衆達に、云ひ分はござんすまい。

清八 これせえ取れば、ナニ云ひ分が

長吉 其方に無くとも、此方にあるワ。

一同 そりや又なせ。

長吉 うぬらが騒いだばつかりに、花魁の顔へ疵附けし上からは

長松 この判人から

ト長松、有合ふ筋屋の天秤棒にて打つてかゝる。長吉、清六の六尺棒にて皆々を叩き散らす。これにて一同、下座へ入る。長松、長吉追つて入る。小紫、お高、花山、左吉、左郎兵衛、お國残る。

くに承りますれば、吉原のお傾城様とやら。親子の者が只今の難儀お救ひ下され、私しどもの爲には命の親とも、譬へがたない御恩の程、何とお禮を申さうやら。

たかなんの、その禮に及ぶ事かいな。女子は相互ひ。ほんにお前は、孝行なお方ぢやなア。どこも怪我はなかつたかえ。

くに イエ、打叩かれても僅かな事。只お氣の毒なは、小紫さま。わたしが事から事起り、思はずお顔へ。痛みは致しませぬか。

小紫 イエ、この疵は嘘でござんす。お前の難儀と見たゆゑに、おかみさんと云ひ合せ、喧嘩を此方へ買ひ取つて、お恥かしうござんす。

くに ほんに、どこからどこまで、お氣のついたお傾城様。

たか わたしが奉公人ながら、氏も素性もきつとした、中々勤めする身の上ではなけれども、これも浮世の七轉び。

小紫 元は佐々木の御家中にて、本庄助太夫が娘の八重梅、云ふに云はれぬ譯あつて、今では憂き川竹の小紫。今のお前の難儀をば、この身につまされ、お氣の毒に存じまする。

くに ア、お羨ましいあなたの御身。同じ女子と生れながら、氏あるお武家のお娘御、たとへ落ぶれなされても、松の位の太夫職。氏無いこの身は蛇遣ひ。これ程までも違ふものかいなア。

左吉 コレサ、お娘、其やうに、くよくよ思はぬものだ。

たか 聞けば、あの親御とは、生さぬ仲と聞きましたが、その繼親を大切に、孝行盡すその志しが、何よりの氏素性。

李郎 その孝行がお上へ聞えたら、やがて御褒美が出るだらう。これ程の娘を見捨てゝは、町役人の法が濟まぬ。こんな因果者にして置かうより、これから直ぐに、おれが長家へ來るがい。及ばずながら、世話をして、どこぞへ奉公にでも出してやらう。

くに それは何よりお有り難うござります。まことに親一人、子一人、便りの無い者でござります。父様に話したら、喜ぶでござりませう。

李郎 イヤ、親仁どんは構はぬて。こなたはおれが世話をしませう。

小紫 ア、コレ、逆もの事に、親仁さんも

李郎 折角花魁のお頼み、迷惑ながら、ア、まよよ。

ト思ひ入れ。この時、下座より

長吉 太い奴だ。江戸ッ子の生え抜きは斯うしたものだワ。

ト辻打になり、長吉、長松、以前の形にて出て來る。

たか お前がたも大概にしなさんせ。若し怪我でもあつたら、長兵衛さんへ、云ひ譯がござんせぬわいなア。

長吉 なアに、彼奴らにけじめを食ふやうな事では、仲の町を金棒引いてはななかれませぬ。殊に親分の名を聞くと、ぴりりしやすよ。

ト此うち、お國、最前の錦繪に見惚れて居る思ひ入れ。小紫、物思ひのこなし。

くに 繪空ごとはいひながら、此やうな殿御があつたら

小紫 それに引きかへ、現在に、見染めた先刻のお若衆さん

くに どうぞお側に宮仕へを

小紫 この身の年を入れ増しても
くにせめて女子の一心に
小紫 間夫狂ひといはれうがまよ。
くに一目なりとも

小紫 どうぞ、ま一度

二人 逢ひたいわいなア。

ト小紫は向うへ。お國は繪を抱きしめ、心々の思ひ入れ。左吉はお國、花山は小紫の側へ來り

花山 花魁。

左吉 姐え。

二人 モシ。

ト背中を叩く。悔りして

お國 アイタ、い。

ト心づく思ひ入れ。

たか 太夫 其方は先刻の渡し場の

小紫 イエ、なんのマア、さうではなけれど、あの娘さんの心根を思ひやつて

ト脇へ散らす。

くに モシ、此やうな男がござりますかえ。

長吉 無くつてサ。そりやア顔見世に葺屋町でした

花山 役者の錦繪でござんす。

くに アノ、これがえ、

ト見惚れ居る。

左吉 こりやアお娘は、おつりき揉み療治だわえ。

長松 娘さん、その繪はおれが捨てたのだ。欲しくば持つて行きなせえ。

くに それはお有り難うござります。お貰ひ申します。

ト懐中する。

左郎 それはさうと、この左郎兵衛も、折角世話をした娘、今から直ぐに同道ませう。ござれ。

くに ハイ、有り難うござります。何から何まで、……嬉し涙が溢れますわいな。

ト泣き落す。

李郎 これはどうしたものだ。其やうな事を云うて、この家主もどうか賞ひ涙か……そんな事は儘にして、サア、おれと一緒に。

トお國を介抱し、花道へ行き

ほんに思へば、孝行な娘

たか 随分ともに、親御を大事に

小紫 道を氣を付けて行かしてやんせえ。

くに ハイ。……おさらばでござりまする。

ト唄になり、李郎兵衛附いて向うへ入る。

小紫 ほんに、可憐らしい、娘御でござんしたなア。

たか 併し、ひよんな事で

花山 肝腎の大師様へ遅うなりました。

たか 早う參詣しませうわいなア。

ト皆々行きにかゝる。小紫下駄の鼻緒を切る。

小紫 アモシ、わたしの下駄が

ト長吉見て

長吉 エ、危ないの。幸ひ爰に雪駄直し。……エ、どこへ行きやアがつた。ちよつと探して來ませ

う。その内、もう一つ上つてお出でなせえ。

たか 成る程、さうしませう。長吉どの、頼みます。

長吉 ドリヤ、探して來ようか。

ト皆々奥へ入る。長吉下座へ入る。直ぐにバタ／＼になり、助八下座より駈け出る。願哲追ひ出る。

願哲 どつこい。逃がしはしない。コレサ、助公、悪い洒落れだ。おれも初瀬寺の願哲といはれては、

随分悪企みの一つもしたものだ。こんな衆のお先きに遣はれるやうな、萬更人柄のい、坊主でも

ねえワ。鎌倉を追ひ拂はれ、居所に困り、どうか斯うかと、思案の矢先きへ、こんなが來て、斯

ういふ筋だと話すから、あの薄鈍ツこい飛脚をば、冗談話しに騙しかけ、づぶ六酒を食はして、

その間に盗んだ三百兩を、こんながそれを丸呑みとは、あんまり腎張り、慾張り者だ。骨を折つ

たおれが方から、安目を打つた。山分けにしよう。サア、早く出さつし。

助八 成る程、てめえの云ふのは皆尤もだが、おれも三百兩なけりやアならねえ事があるから、斯うし

よう。まづ三百兩を山分けにして、百五十兩宛奪つた積りにして、ナ、ムウと云ひねえ。その百

五十兩は、當分おれが借りたのだ。

願哲 おかつしい。人を好い加減に冷かすがいゝわな。こんたがさういふ料簡なら、おれも亦皆な取らにやアならねえワ。

助八 ハテ、そんなに云はずと貸さつし。

願紫 イヤ、ならぬ。

助八 イケ情の剛い乞食坊主め。

願哲 何吐かす、野郎め。

ト辻打になり、兩人立廻りあつて、ト願哲を當てる。助八、件のうちがへをもち、花道の中程まで行き、後戻りして再び好き所へ小隠れする。願哲心付き

願哲 おのれ、助八め、跡ほつかけて。

ト辻打になり、一散に走り入る。助八出て、後見送り

助八 大泥坊め。……併しおれが持つて居ては、危ない仕事だ。幸ひ先刻の一物を隠したこの箱へ。

ト雪駄直しの籠の中へ三百兩入れる。

斯うして置けば、氣の附く氣遣ひはねえ。……此奴はいつその事、籠ぐるみ引ッ擔いで

トこの時奥にて

長吉 サア、早く來さつし。

ト辻打になり、長吉先きに、雪駄直し出て來る。助八これを知らず、件の籠を取上げるを、雪駄直し見て、だしぬけに助八を打つ。助八倒れる。長吉見て

長吉 ナニ、泥坊だ。

ト有合ふ天秤棒にてしたゝかに打つ。助八堪りかね、一卷と金を残したまふ、逃げて入る。長吉あと見送り

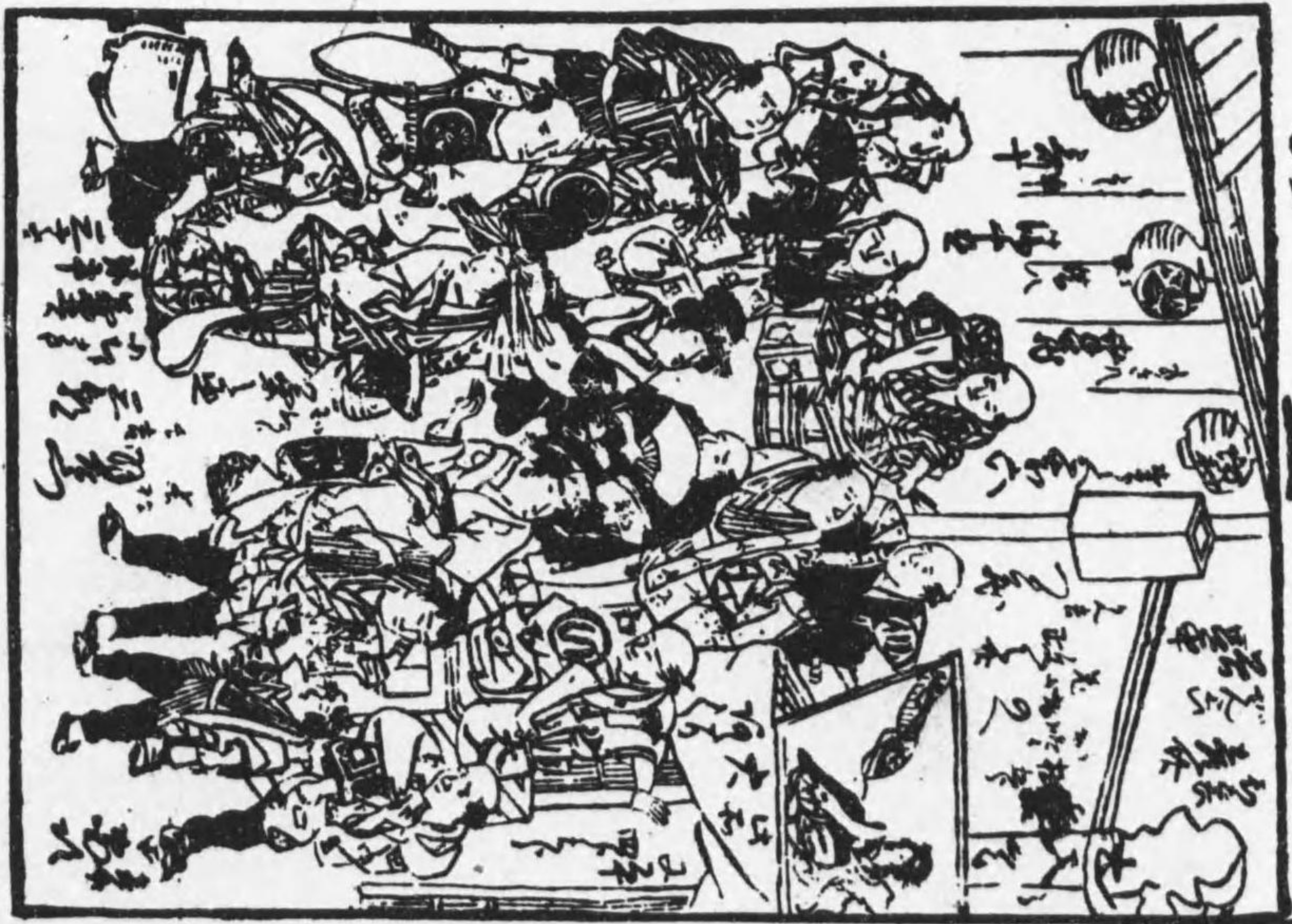
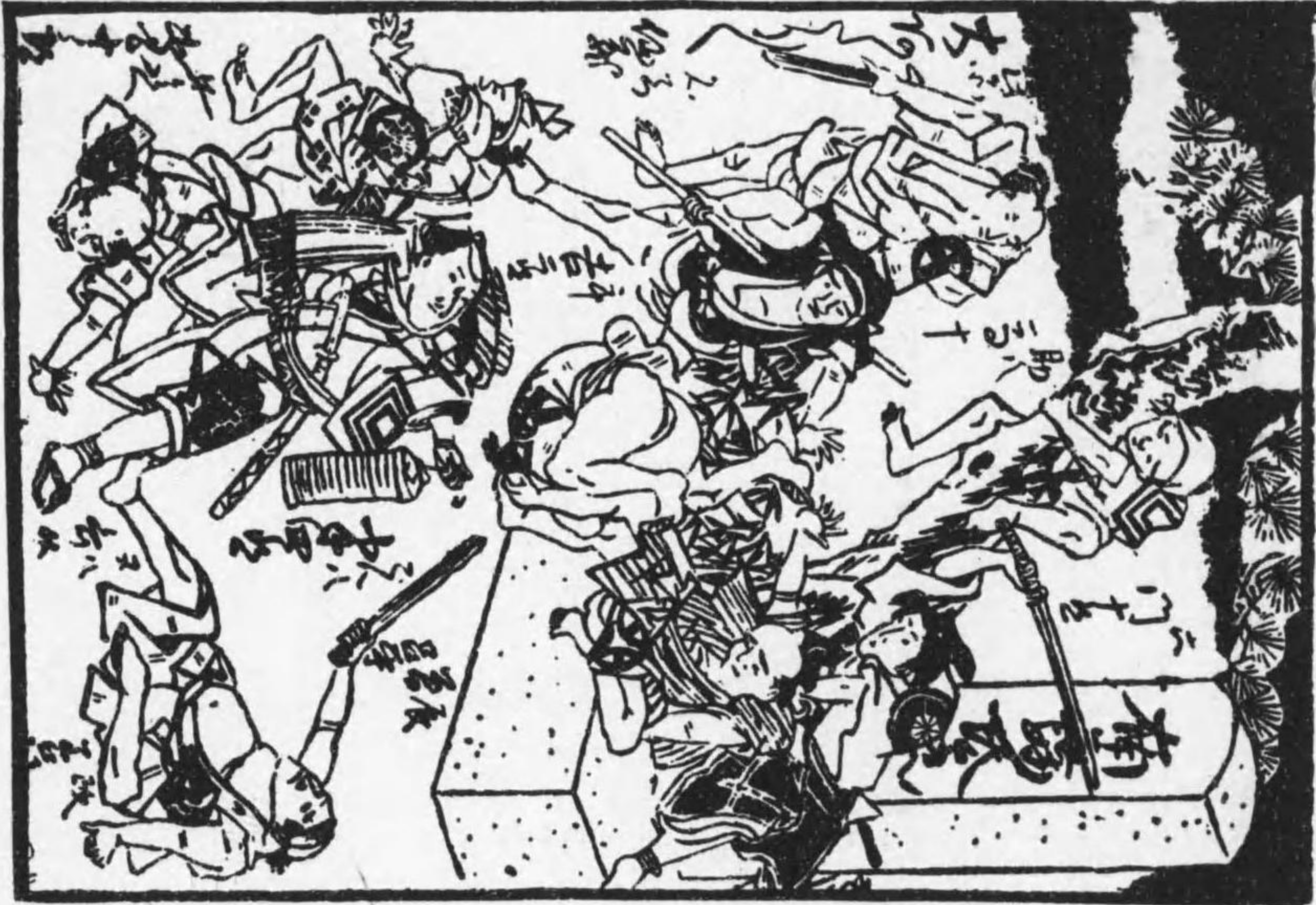
長吉 こんた衆の道具を盗むとは、とんだ奴もあつたものだ。

ト以前の下駄を出し

カウ、ちよつとこの鼻緒を直して下つし。

ト出す。雪駄直し、籠の蓋を取り、道具を出さうとする。ドロ／＼になり、白蛇出る。兩人惻り、長吉天秤棒にて追ひ拂ふ。雪駄直しは、中にある一卷と金に心附かず、道具を出し、蓋をする。ドロ／＼止んで、白蛇消える。始終辻打。向うより若い者、傳法の拵へにて出て來り

若者 モシ、長吉さん。追ッつけ幡隨の親方が、新羽屋まで歸つて來ると、知らせがあつたから、



早く歸りなせえ。

長吉 そりやア斯うしちやア居られねえわえ。……オイ、長松さんく。

長松 何だく。

ト奥より出て

長吉 お父さんが歸ると知らせがあつたから、サア、行きやせう。

長松 そんなら兄イ、早く行かう。

長吉 オイ、直し屋さん。出来たらこの茶屋に居る女中に遣つてくんな。

若者 モシ、空合ひが悪い。早く行きなせえ。

長吉 なにサ、案じる事はねえ。こりやア日和癖だ。

ト流行り唄になり、長吉先きに三人向うへ入る。下座より、と平、生酔ひの思ひ入れにて出て来り

と、あの和尙めが捻ぢ上戸で、たうとうおれを盛り潰した。それはいゝが、大事のお飛脚、遅くなつたわえ。

ト云ひながら、花道の際まで来り、つまづき

南無三、草鞋の紐が切れた。幸ひの直し。コリヤ、これを直してくれろ。

ト出す。雪駄直し思ひ入れ。

なんだ、これを直してからだ。……べら坊め、それまで待つて居られるものか。此方は急ぎのお飛脚だ。てめえは頼まぬ。おれが直すワ。

ト合ひ方になり、自分手に直し居る。この時、正面の障子を明け、小紫、少し酒に酔うたるこなし。長煙管にて貰のみながら、四方を見晴らし居る。雪駄直し思ひ入れ。と平こなしあつて

何といふ。おれが事を何飛脚だと尋ねるのか。……おれ様は、鎌倉佐々木家のお飛脚にて、今度本庄助太夫といふ侍ひを、同家中白井権八といふ者が殺して立退いたから、江戸屋敷へ觸れ狀を持って行くのだ。

ト小紫、直し、兩人思ひ入れ。と平草鞋を直して穿く事あつて

いらざる話しに時が切れた。コリヤ、斯しては居られぬわえ。

ト辻打になり、一散に向うへ入る。小紫きつと思ひ入れ。

小紫 顔は知らねど、實の父さん

彌市 別れてからが十四年、父の形見はどうぞして

小紫 おのれ、権八、やがて本望。

ト向うを見込み、きつと云ふ。これにて雪駄直し振り返り、持つたる下駄を小紫が前へ直す。これより詔への合ひ方、小紫向うを見詰めながら、これへ足を踏みかける。雪駄直し、下手より小紫の顔に見惚れ、ちつと思ひ入れ。小紫これを知らず、ちりりと前へ出る。雪駄直し、顔に見惚れながら、小紫に附いて廻る。

小紫 いはゞ武士の胤たるこの身、

彌市 瘦せはらしたる人の身も、年に一度は此やうな

小紫 男を持たば、助太刀して

彌市 本望遂けたら、死んでもよし

小紫 やはか恨みを

彌市 見染めし戀路を

ト抱きつく。小紫惘りして、持つたる煙管にて、ボンと打つ。これにて笠脱げて、初めて白井彌市の顔見える。チョンと木の頭。小紫は「エ、」と持つたる煙管を折る。彌市は笠を取つて、隠れる思ひ入れ。双方よろしく、拍子

幕

禪のツトメのツナギ。引返し。

二幕目 返し

鈴ヶ森の場

役名——白井権八。幡随長兵衛。飛脚、と平。本庄助八。僧、願哲。雲助、政。同、辰。同、

六。同、市。同、又八。同、どぶ六。

本舞臺、三間の間、後ろ一面の黒幕。こゝに藪、上手に大いなる題目の石。下手に六十六部の供養塔。この脇に榎の大樹、所々に杉の立ち木、日覆ひ吊り枝大に茂り、舞臺先き浪板。こゝに政、辰、雲助の捲へにて、五合徳利を焚火にてあぶり、筒茶碗にて酒を飲み居る。すべて鈴ヶ森夜の景色。時の鐘、浪の音にて幕明く。

政 成る程、夜は短かくなつたな。今暮れたと思つたに、もう東海寺の五つださうよ。

辰 あんまり仕事かねえによつて、差して組んで、しばこくり、てめえに取られた。あんまり智慧がねえぜ。

政 今に好い鳥を引いてくるであらう。

辰 それもさうだ。エ、もう一つかッ食はさう。

ト兩人酒を飲み居る。バタ／＼にて、助八、前幕の形にて、走り出る。この跡を願哲追ッ駆け出て直ぐに舞臺へ来り

願哲 サア、どうしやアがつた。山分けを寄越しやアがれ。

助八 コレサ、さう云はれては一言もねえが、これには譯が

願哲 譯も絲瓜もいらねえ。きり／＼金を出しやアがれ。

助八 それでも爰には無えものを。

願哲 無えといつて濟むものか。

ト兩人また掴み合ふ。政、辰、中へ入り

二人 願哲ぢやアねえか。どうしたのだ／＼。

願哲 サア、聞いてくれ。この男はまだ仲間に入らせねえ素人だが、鎌倉に居るうち、心安くしたところ、今日大師河原で、ふツと逢つて、この男の頼みゆゑ、大枚三百兩の大仕事、首尾よくやつて渡したところ、割り前も寄越さずに隨徳寺。サア、てめえ達に丸呑みにされては、おいらが商賣がならねえワ。キリ／＼その金渡しやアがれ。

助八 成る程、さう云はれては面目ないが、おれが云ふ事聞いて、疑ひ晴らして下さい。

願哲 ナニ、云ふ事があるものか。

辰 ハテ、譯を聞いた後で、どうともなる事だワ。

政 靜かに譯を聞かがい。

助八 今、あの和尚が云ふ通り、悪心きざして掴み合ひ、たうとう此方へ引ツたくり、隠し所に困つたゆゑ、側にあつたる雪駄直しの、籠の中へその三百兩と、外に大事な品を隠した。所へ雪駄直しが出て来て、おれを泥坊といつて、くらはした。イヤ、素的にくらはしやアがつたゆゑ、金の事はどこへやら、命から／＼逃げて来た。所を願哲坊に捕まつて、この仕儀だが、その金どころぢやアねえ。おらが身にも代へぬ大事な品を、ちやアふうにするとは、よく／＼不運な身の上だなア。

願哲 イ、ヤ、その云ひ譯は、どうも呑みこめねえわえ。

政 コレサ、あの男もしよけ返つて居るからは、萬更嘘でもあるめえ。

助八 なにサ、斯うなつてから、嘘が出るものか。

願哲 して見りやア、無駄骨だな。いま／＼しい。

辰 そんな間拔ぢやアいかねえワ。おいらが仲間へ入つて、よく見習ふがいゝわえ。

助八 そんならこれから、どうぞ願ひます。
政 新参振舞ひには、八幡前の、田樂は恐れるぜ。
助八 なにサ、濱川の角にしやす。
皆々 そいつは飲めるわえ。

ト波の音になり、向うより前幕のとき平出で来り、六、市、雲助の拵へにて、附き出で、花道にて
六 モシく、僅かな駄賃だ。この物騒な鈴ヶ森、お獨り歩きしようより、安くして乗つて行きなせえ。
とエ、しつこい。飛脚が駕籠に乗るやうで、道中がなるものか。
市 成る程、お前は足はひよろ長く、早からう。ほんの酒手で乗つて下んせ。
とイヤく、どのやうに勸めても、乗らぬく。
二人 ハテ、乗らつせえよ。

ト本舞臺へ来る。六、先きへ廻り、好い鳥だといふ思ひ入れにて、皆々へ呑み込ます。
六 先刻から十四五丁、口の酸くなる程云つても聴かねえの。
市 どうせ乗せか、つた籠の鳥、乗せにやアならねえ。
とヤア、しつこい、雲助めら。たつてと云へば、手は見せぬぞ。

政 エ、てめえ達も氣が長え。
辰 ぶんのめせく。
皆々 合點だく。

トと平ふるへながら
とさては噂の鈴ヶ森。身拵へして、
ト懐中の胴巻を直す心にて
ヤアく、大變だく。三百兩の爲替金を、落したく。

皆々 ナニ、三百兩。
トこの時、願哲、焚火にて、とと平を見て
願哲 いま話しの金は此奴の金よ。
トと平、願哲を見て
とと平は先刻、身共に酒を飲ませた坊主だな。そんなら、その時
ト願哲にかゝるを、皆々引据ゑ
助八 金は奪つても、また物されたから

願哲 せめての腹癒せに、身ぐるみふん剣け。
皆々 合點だく。

トとど平を引剥ぐ。

とゞ これは又情ない。

ト云ひながら、眞裸になり

泥坊々々。

ト逃げて下座へ入る。皆々顔見合せて

皆々 大笑ひだ。

ト政、衣裳を掻き集め

政 引ツくるめても二朱一本よ。

六 まだこんな狀箱がある。

ト落ちてあるを取上げる。

市 なんぞ中にあるだらう。明けて見ろく。

六 合點だく。

ト箱より手紙を出し

こんな手紙だぜ

辰 何ぞ仕事になるめえものでもねえ。讀んで見ろく。

六 無理な事を云つたものだ。これがどうして讀めるものかな。

政 ほんにさうだつけ。差詰め和尚、讀まつしやい。

願哲 ドレく。……「江戸お屋敷お役人中様、鎌倉屋敷役人中。……ナニく「飛札を以て申し入れ候

當三月廿日の夜、本庄助太夫の甥、因洲の浪士白井權八と申す者、叔父助太夫を討つて立退き申

し候。間、此段お届け申し上げ候。尤も、權八江戸表へ出府と存じ候間、此段御吟味專一と存

じ奉り候。以上。月日。」

助八 そりやア、おれの親仁を、權八が討つたと知らせの手紙だ。

市 ア、そんなら貴様は敵討だの。

助八 マアそんなものだが、あの權八といふ奴、顔に似合ぬ太い若衆だ。

六 ア、そんなら、どぶ六や又が乗せて来て、土橋の駿河屋に立つて居た

辰 丸に井の字の紋を付けて居た若衆がさうだわえ。

助八 オ、その丸に井の字が權八だ。そんなら爰へ來るか。こりや斯うしては居られぬわえ。

ト騒ぐ。

六 コレサ。何を其やうに騒ぐのだ。貴様の爲には現在の親の敵ぢやアねえか。

政 出合つた所が鈴ヶ森。おいらが助太刀すりやア、敵討には好い場所だぜ。

助八 滅相な事を云つたものだ。どうしておれが權八に叶ふものかな。

市 お前も元は侍ぢやアねえか。

助八 成る程、親の敵も討ちたいが。それよりは先刻の雪駄直しを探して、三百兩と大切な一卷を取返し、こんな衆にも分けてやるワ。その代りに、親の敵は、皆寄つて討つて下つし。

皆々 そんならどうでも

助八 斯うしては居られねえ。

ト一散に下座へ入る。

政 併し、權八は手利きといへど、たつた一人。

願哲 此方は多勢。ナニ、構ふ事があるものか。

辰 定めて路銀もすつしりだらう。……コレ。

ト皆々と囁き合ふ。

市 そんならこゝに突ッ俯して頑張るのか。

辰 ソリヤ、これで。

ト菰を五六枚投げ出す。皆々着て。

皆々 ドリヤ、果報を待たうか。

ト別れ々に菰を冠り寝る。政と辰だけ焚火にあたり居る。時の鐘、浪の音になり、向うより又八、どぶ六、雲助にて、小田原提灯を附けし四つ手駕籠をかつぎ、此うちに權八、着流し、大小好みの形にて、駕籠に乗り出て來り、舞臺好き所へ駕籠を下ろす。

又八 モシ、約束の所まで参りました。

どぶ六 なんと、早く來たぢやアござりませぬか。

ト權八駕籠より出て、あたりを見廻し

權八 然らば爰が觀音前と申す所か。

どぶ六 さやうサ。爰が觀音前よ。

權八 ヤレ、大儀であつた。眞に夜中といひ、勝手知れざるこの道筋。併しあたりは濱邊だな。

又八何でも爰が約束の所だわな。

どぶどうぞ早く駄賃を、お貰ひ申したうござります。

権八成る程。極めの駄賃は、六郷とやらより観音前まで、五百文の所なれど、夜中といひ、これにて一つ飲みやれ。

ト南録を一つ出す。取つて

どぶこりやアたつた二朱かえ。

権八ハテ、五百文のところなれども、心を付けて

どぶたつた二朱か。おきやアがれ。二朱や三朱貰ふとて、夜中にあくせく駕籠を昇ぐものかえ。

ト権八へ打ちつける。

権八して、どれ程貰はうと申すのぢや。

又八おいらが駕籠へ乗れば、持つて居る物は有りつたけ。

権八ムウ。さては案内知らぬ一人旅と侮つて、うぬらは盗人ぢやな。

二人知れた事だワ。その襦袢から

トこの時、政、辰、出て来て留める。

政辰 コリヤ、待て〜。

ト留めるを構はず、権八に打つてかゝる。政、辰、二人を追ひ拂ひ、隠す事。政、こなしあつて

政 ヤレ〜、承りますれば、無法な事を申す者。嘸お腹が立ちませう。

辰 これがほんに、かつたいに棒打ちとやら。マア、御料簡なされませ。

権八 これは〜、忝う存じます。さりながら、餘りの慮外。

政 サ、御尤もでござります。彼奴らは私しが、また仕様がござります。まづ〜、御料簡なされませ。して、あなたは、どれへお通りなされます。

権八 其許は、所のお人さうなが、これより江戸表までは、いか程ござるな。

辰 アイ、江戸へは、もう二三里もありません。マア、ゆるりと貰でものんでござりませ。

権八 イヤ〜、拙者は貰は所望でござらぬ。これはいかい世話であつた。

ト行きかゝるを、立塞がり

政 コレサ、旅人。人に道を尋ねて、禮もせずに通るのか。その上、貰をのめといへば、所望でない。

貰が祭りに出やアしめえし。

辰 こりやア何だ。此方らを雲助だと思つて、この火で貰をのむは穢えといふのか。否でも應でも

のませにやらねえ。

権八 これは又無理を申す男ではないか。こなた衆が雲助やら、ナニ、身が知るものか。葺は實々嫌ひゆる、所望でないと思したが、なんと致した。無法を申すと、手は見せぬぞ。

ト屹度云ふ。

政 これはく、お若衆のお氣短い。今のやうに申したは、ありや嘘でござります。成る程、流石お武家ほどあつて、この鈴ヶ森を只お一人、びくともなされぬは、眞に驚き入りました。

権八 ナニ。すりや、爰は観音前ではなく、噂のある鈴ヶ森とやらか。

辰 さやうサ。御覽じませ、あの通り、供養塔や、題目の石がござりますわな。

政 お前さんの仰しやる観音前までは、十丁からござりますが、また今のやうな奴等が居りまして、益なきお腹を立てさせましたらお氣の毒。私しどもが観音前まで送つてあけます。コレサ、ためえもお送り申せ。

辰 それく。往來のお客方にお怪我でもあつちやア、雲助の商賣が上るワ。一緒にお送り申します。

権八 すりや、観音前まで送つてくりやるか。

二人 左様でござります。

権八 然らばこの提灯を借り受けて

ト駕籠の提灯を取り

オ、大儀ながら、案内頼む。

政 ハイく。お提灯は私しが持ちませう。

ト提灯を取る振りにて権八の大小を取りにかゝる。権八驚き、政を捕へて

権八 コリヤ、何を致すのぢや。

ト辰、権八の紋を見て

辰 そりやこそ、丸に井の字だぞ。

ト皆々菰を脱ぎ捨て、バラくくと取巻く。

権八 ナニ、丸に井の字と申すからは、コリヤ、何者にか頼まれたな。

政 オ、頼まれた。ぶつちめろ。

皆々 合點だ。

ト禪のツトメになり、皆々有りあふ物にて、打つてかゝる。立廻りあつて、鳴り物變り、しわけのタテよろしく、此うち、辰、手を負ひ、逃げる所に困り、榎へ這ひ附く。よき時分、雲助二人、垂れを下

したる四つ手駕籠に、品川宿と書きし小田原提灯を下げ、向うより出て来り、直ぐ舞臺へ来て、この體を見て、惘りして

雲助 ヤア、抜いたワ〜。

ト駕籠を好き所へ置き、下座へ逃げて入る。此うち、権八止めを刺す。後ろより政かゝるを、見事に切り倒す。捨て鐘、合ひ方變つて、駕籠の垂れをあげ、幡隨長兵衛、半合羽、一本差し、脚絆かけ、駕籠の内より、様子を窺ふ。市、下手へ逃げ行くを追ひかけ切る。この時、権八、長兵衛を見つけ、直ぐに切つてかゝる。長兵衛駕籠の中より、その手を押へ

長兵 お若いの。往來の旅人を何とさつしやる。

トこれにて権八、よく〜見て

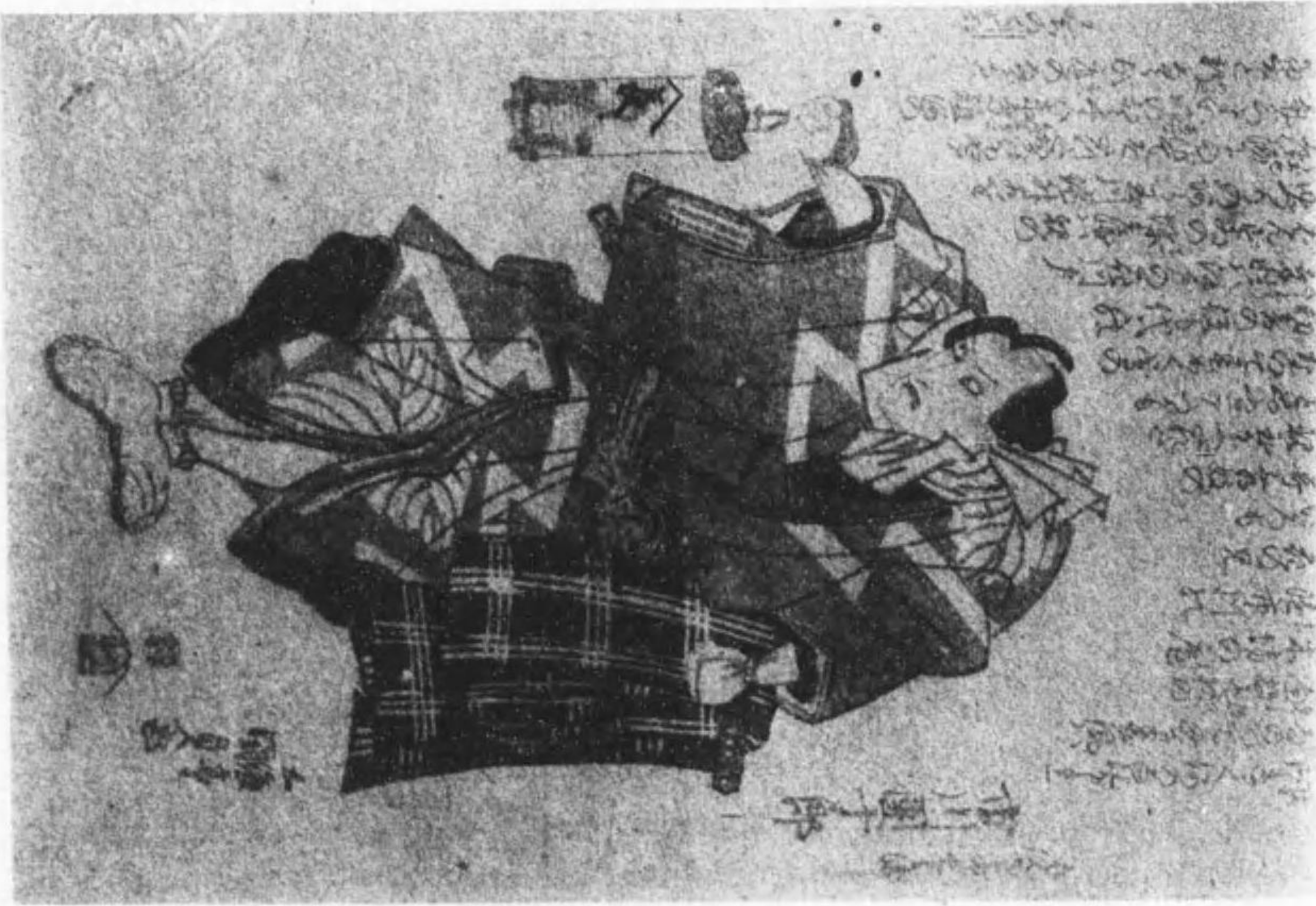
権八 心急ぎゆる、思はぬ粗忽。旅人とあらば、サ、少しも早う。

長兵 左様ならば、間違ひでござりますか。

権八 如何にも左様。

トこれにて長兵衛、刀の手を離す。権八こなし。長兵衛もこなしあつて、駕籠より出る。

長兵 見ますれば、お怪我もねえやうだが、どこも痛みは致しませぬか。



權八 御深切なる其お詞、忝う存じまする。さりながら、音に聞えし鈴ヶ森、町人體の其許が、たつた一人で

長兵 さやうサ。鎌倉方のお屋敷へ、多く出入りはわしが商賣、それをかこつけ有り様は、遊山半分、江の島の、太々かけて思はぬ隙入り。どうで泊りは品川と、川端からの戻り駕籠、通りかゝつた鈴ヶ森、若いお方のお手の内、あまり見事と感心いたし、思はず見惚れて居りました。

ト顔見合せ、思ひ入れ。

權八 拳もぬるき生兵法。お恥かしうござります。

長兵 不躑ながら、見ますれば、まだ角前髪のお侍ひ様。お一人旅でござりまするか。

權八 御覽の通り、某は、勝手存ぜぬ東路へ、中國筋よりはるくくと、暮れに及びし磯端にて、一人旅と侮つて、無法の狼藉。彼奴らは正しく追ひ落とし、命を取るも殺生とは存じたなれど、止む事を得ず、不敵者、刀の穢れと存ずれど、往來の人の爲にもと、據ろなく斯くの仕合せ。雉子も鳴かずば討たれまいものを、益ない殺生、致してござる。

長兵 ハテ、大丈夫なお若衆様。切られた奴等は五六人、あなた様には只お一人。若年のお手際には驚き入ります。今、中國と仰しやつたが、御生國は何れにて、何御用あつて江戸表へは。

權八 サ、別して用事もござらねど、繼しき母の讒により、心に思はぬ不孝の汚名。故郷は即ち因州生れ、父の勲氣に力無く、お江戸は繁華と承り、武家奉公でも致さうかと、仕官の望み、習はぬ旅行。見ますれば、其許は、江戸のお方と見受け申す。御深切のおたづね、しるべ、便りもござらぬ拙者、お詞に甘え、お頼み申す。

ト手を突き、こなしある。

長兵 成る程、御身分の一通り、承つて御尤もに存じます。併し、宿無しどもとは申しながら、四人五人のこの死骸。往來端に犬の餌食。

ト死骸を一々片附ける。

この御手練を見る上は、猶更以てお世話いたし、あなたの難儀となる事なら、どこがどこまで云ひ抜けて進ませうが、して、何れの御家中、又は御直のお方なるか、決して口外は致しませぬ。その御家名は。

權八 サア、お世話下さる其許へ、實名隠すに及ばねど、人の家名を聞く時は、我が名を名乗る、本文ござれば。

長兵 成る程、これは不調法。かゝる大事を眼前に、見聞き致した町人の、その名は何の某と、云ふ身

の上でもござりませぬが、只今申した江戸生れ、身は住み馴れし隅田川、流れ渡りの氣散じは、江戸で噂の花川戸、幡隨の長兵衛と申します。

權八 エ、アノ、其許が、中國筋まで聞えたる、江戸に名高き長兵衛どのか。

長兵 イ、エサ、その名高い長兵衛ではござりませぬ。わしやア三代目の佛ばかりサ。祖父や親父の長兵衛なら、面白い臺詞廻しも云ひませうが、親に似ぬ子の無口生真面目。洒落れといつちやアこれ程もねえ只の狭ぐらし。今度の役廻りが、何れも様の御最員で、ほんの當座の間に合せて、銀と見せたる七度焼き。附け句で覺えた藪鶯、阿波座鳥の啼く聲は、西か東か知らねども、水道の水の有り難さ。野郎はちつと小せえが、産神柄で膽が大きい。弱い者をば引立て、強い奴なら向う面。ほんの事だが、韋駄天が革羽織で、鬼鹿手に乗つて來ても、びくともするのぢやアござりませぬ。及ばすながら、達衆の端くれ。枯れたる枝にも花川戸、金龍山は軒ならび、吉原雀、都鳥、隅田の流れを向うに構へて東男の端くれと、噂に乗つた私しは、ごろつき上がりの、けちな野郎でござります。

權八 音に聞えし達引きとやら、俠氣な長兵衛どのと聞くからは、願ひある身の某が、頼んで暫し便りには、石城よりも確かな隠れ家。拙者は即ち因州の浪人、白井權八と申す者。鎌倉表にて、義に

依つて人を殺め、命はさらく惜しまねど、尋ねにやならぬ寶の詮議。首尾よく取り得るそれまでは、死ぬにも死なれぬ拙者が命。この身の願ひ叶ふまで、只管頼む長兵衛どの。
長兵 ようござります。お氣遣ひなされますな。さう承つたら、金輪際、お世話しぬくが持前の、江戸で育つた男一疋。いつでも訪ねてござえまし、蔭膳するて、待つて居ります。

権八 御深切の其お詞、萬事よろしく

長兵 頼まりました、権八どの。さやうなれば、これより直ぐに御同道。

権八 何から何まで、お禮は詞に

長兵 なにサ、そこが江戸ッ子。恩には着ませぬ。

ト提灯を持ち、上手へ行きかゝる。この時、以前の手紙觸るゆゑ、取上げて

なんだ、手紙が落ちてある。モシ、ちよつとこの灯を

ト提灯を権八に持たせ、手紙を擴げ

ナニ／＼、「飛札を以て申し上げ候。當三月廿日の夜、本庄助太夫の甥、因州の浪士白井権八と申す者、叔父助太夫を討つて立退き申し候間、此段御届け申し上げ候。尤も権八事、江戸表へ出府と存じ候間、御地にて御吟味專一に存じ奉り候。以上。月日。」

権八 すりや、江戸屋敷まで、……ホイ。

ト思ひ入れ。

長兵 モシ、お案じなされますな。

ト提灯の火にて件の手紙を焼き捨てる。権八思ひ入れ。辰、後ろより窺ふ。長兵衛こなしあつて

これで何にも、白井氏。

権八 武士も及ばぬ

ト思ひ入れ。文の火影にて、前の流れへ辰の顔映る。権八きつと見て、手早く手裏剣を打つ。これにて、

辰飛び下り

辰 うぬ、権八。

トかゝる。立廻り、権八、一太刀浴せる。

長兵 其奴も正しく

権八 彼奴らが同類。

ト長兵衛提灯を差出し、辰が疵口を見て

長兵 天晴れお手際。

權八 長共衛どの。

長兵 ゆるりと江戸で

ト切り下げる。辰、見事に返る。長兵衛、肩へ合羽を掛ける。チョンと木の頭。

二人 逢ひませう。

ト權八、白刃を拭ふ。長兵衛こなし、双方よろしく、拍子

幕

三幕目

名古屋浪宅の場

役名 名古屋山三。上林の葛城。下女、お國。因果物師、又平。遣り手、お爪。家主、李郎

兵衛。吳服屋、勘六。小間物屋、六兵衛。縫箔屋、彦右衛門。禿、みどり

本舞臺、三間の間。天井に誂へある二重舞臺の世話場。揚げ幕際に三尺の路地の木戸あり、上の方女郎の文で張つたる障子。下手の方、竈、臺所道具飾り、門口の外、路地あり。本疊敷き、すべて淺草鳥越裏借家。こゝに山三、搔卷を着て、絹蒲團の上に、手箱引寄せ、葛城よりの文を見てゐる。禿みどり、大和風呂に急須をかけ、茶を拵へ居る。門口に李郎兵衛、家主にて立ちかゝつて居る。表に

は勘六、彦右衛門、六兵衛、借金乞ひにて、わやく云うて居る。内には、□、○、△、×、これも借金乞ひにて、歸りかゝり居る。てんつゝにて幕明く。

勘彦 大屋さん、入れて下さい。

李郎 掛取りならば、待つたり。

トてんつゝ、彈き流しにて、□、○、×、△、門口へ出かゝり

□○ 腹がへりました。飯でも食つて、また出掛けて来ませう。

×△ さうしませう。

ト門口へ出かける。

李郎 どうだ、お前がたは解つたか。

□ イエ、今日も斷り。

李郎 そんなら歸るのか。

皆々 又、晩に来ませう。

李郎 さうしなさい。先きのは替り。あと入りは、續いて。

トてんつゝにて□、○、△、×、捨てりふにて、向うへ入る。門口に残つた三人。

勘六 サアく、入れ替りませうノ。
彦右 ヤレく、恐ろしく待ちました。

ト内へ入る。

李郎 掛取りならば、待ち札く。御油断では詰ります。待ち札く。

勘六 モシく、山三さま。呉服屋の勘六でござる。葛城さまへ拵へて遣らした襦袢や夜具の代は、どうして下さります。三月前もお断り。三十兩の呉服代、今、勘定さつしやれく。

六兵 サアく、其方がよければ、小間物屋の六兵衛。上林の花魁へ賣つた、鼈甲の櫛、笄、残つた代金二十八兩三分二朱。幾度催促いたしても、葛城さんが斑甲のやうな涙をこぼしてお断り。その断りも大概がよいといふもの。今日はお客のお前から勘定なさい。又断りならあかん鼈甲。代金貰はう代金貰はう。

彦右 モシく、旦那、縫箔屋の松屋彦右衛門。度々催促いたしても、今日は拂はぬその代り、酒を飲めと仰しやるゆゑ、好きな酒に縫ひ代を、ツイうかくと二年越し。葛城さんの襦袢の手間代、たつた今、勘定さしつやれく。

三人 拂ひを貰はうく。

ト皆々わめくを、山三、これに構はず、文を読み居る。

みど オヤ、この衆は、静かにさつしやいな。馬鹿らしいよウ。

三人 ナニ、馬鹿らしい。成る程、掛取りは馬鹿らしく見えるであらう。

李郎 コレく、そんならお前がたは花魁の櫛、笄、夜具や衣裳の掛取りか。

三人 さやうく。

李郎 そんなら家主も云はねばならぬわえ。……コレ、山三さま。イヤ、山三どの。お前はく。今も

一組ばかり来た米屋や酒屋はお定まり。この三人の掛取りは、呉服、小間物、縫箔屋の代金とは、廓へ使ふ榮耀な借金。それほど贅澤をするならば、なぜ店賃を勘定しない。是非とも今日は家賃のたまり、今貰はう。今貰はう。

ト此うち山三、文を読みしまうて

山三 これは家主をはじめ、町家の者ども、毎日々々、よう訪れてくりやるぞ。身共の歸参いたした節は、引上げ使ふ程に、さやう心得てよからうぞ。

勘六 イヤア、とんだ大風を極める。こなたに誰れが使はれるものか。

彦右 そんな無駄を云はずに、縫ひ箔の手間代を

六兵 鼈甲の代を、拂うて貰はう。

山三 これはしたり。誰れも拂ふまいとは云はぬワ。コリヤ、その拂ひ方の賄ひは、身が召使ひの下女の國、あの者が歸つたら、大方挨拶を致すであらう。それまで待つて、承つて戻るがよからう。

三人 エ、そんなら、あの下女が、爰の内の番頭か。

李郎 これはしたり。町人ではない、武士の浪人者。

三人 成る程、武士の事なら女の家老か。

山三 勿論々々。

三人 イヤハヤ、呆れたものだ。

トてんつゝになり、向うよりお國、前垂れかけ、安下駄を穿き、下女のこしらへ、千大根、蒸饅頭、一升徳利を提げ出て来り、足早に門口へ入り

くに ハイ、旦那様、只今歸りました。

皆々 そりや歸つたぞ。

トお國恠りして

くに エ、恠り致しました。……ア、お前がたは、アノ掛乞ひの

六兵 いつもの三人。今日は是非とも取らねば歸らぬ。

彦右 貴様が歸れば、お拂ひが出るとの事。

勘六 サア、勘定してもらはう。

みど お國どん、歸らしたか。

くに オ、こりや葛城さまの禿衆。お前、どうして。

山三 コリヤ、あの禿が来て居るは、この山三がこの程の風邪ゆる、久しく廊へ行かぬというて、

今宵葛城が見舞ひがてら、押しかけて来るといふ事を、禿に知らせ寄越したのを、幸ひ小間遣

ひが無いゆる、今まであの者を使うて居たわいの。

くに それはマア、よい吉左右を承ります。シタガ、此やうな穢い所へ、あの花魁がお出でなざる、

も、どうやらお氣の毒なやうで

李郎 何ぢや。店賃も寄越さず穢い所とは、無作法千萬。穢くば家賃を、拂はぬか。

六兵 さやう。拂ひもせいで、この内へ、花魁を連れて来るとは、あまり人を踏み附けにしやるの。

彦右 女郎を引込む奢りがなるなら、おいらが掛けをも拂つてもらはう。

勘六 サア、勘定を

三人 賞はうく。

トわめく。お國とめて

くに ア、モシく。左様にお聞きなされましては、皆間違ひでござります。有り様は、葛城さまが
身上がりになつて、忍んで旦那に、逢ひにお出でなされますのでござります。なんの榮耀にどう
してマア、其やうな事がなりませうぞいなア。

李郎 イヤく、忍んで来ようが、隠れて来ようが、吉原の花魁が、餘所へ来る程なら、そりや大物入
りだワ。

三人 それが出来れば、拂ひを賞はうく。

くに イエく、全く左様ではござりませぬ。

山三 コリヤく、其やうに卑下いたす事は無い。身共は何ぢや、武士ではないか。女でこそあれ、其
方は身が召仕ひの腰元なり、當時にては待ひ分も同じ事。二役を相勤めるぞ。あの者どもは、家
主をはじめ、皆出入りの町人ではないか。其やうに丁寧に申さずとも、權威で申せ。聞き入れな
くば、屹度曲事に、申し附けい。

くに バイく。左様なれば、随分大風に云ひ譯申すでござります。……コリヤ、家主をはじめ掛乞ひ

ども、皆下に居らぬか。

皆々 ナニ、下に居らぬか。……イヤ、呆れた飯焚きぢや。

くに サ、わたしは……イヤ、おれは飯焚きに違ひないが、旦那のお指圖。其方どもの勘定は、もう四
五日も待ち居らう。待たぬと、きつと食事に……イヤ、曲事に申しつくるぞ。

ト雨車になる。

李郎 ナニ、家主に曲事を申しつけるか。

三人 掛乞ひも同罪に行ふのか。こりや面白い。動きはせぬく。

くに さやうく。きつと曲事ぢやく。

ト雨車頻りに鳴る。

皆々 サアく、そこら中が、洩るワく。

くに 旦那様も、嘸お濡れなさるでござりませう。

トあたりを見て、名古屋の傘を取つて

幸ひ借りて参りました番傘がござります。これをお召しなされませ。

ト山三番傘を取つて開き、名前を見て

山三 ア、これは、身共が家の貸し傘か。

くに イエく、この間出刃を買つて参りました節、借りて参りました。

山三 ムウ。さやうか。……コリヤ、みどりよ、其方もこの中へ入つて居れ。

みど アイく。

ト傘の中へ入る。お國前垂れをかむり

くに コリヤ、どうでも本降りになりませう。

勘六 ナニ、本降りになる。そんならおれ達にも傘を貸さつし。

彦六 斯う濡れては、大變々々。

くに イエく、もう傘はござりませぬ。何なりと冠つておいでなされませ。

勘六 ナニ、傘は無い。……何ぞ冠りたいな。

ト内を見廻す。

六兵 コレく、火消し壺がある。これを冠らう。

ト冠る。

勘六 この飯櫃でも冠らう。

ト蓋を取り

中に白い物があるな。

くに アモシ、そりや團子の粉でござります。

勘六 何でも頓着は無いワ。

ト冠る。

三人 ソリヤ、降つて来た。まだ爰らがよからう。

ト三人冠つた儘、竈の前に居る。

李郎 イヤア、皆相應に冠る物が出来たが、この家主は何を冠らうな。

山三 コリヤく、家主、其方、なんと心得て居るぞ。

李郎 どうしました。

山三 コリヤ、此やうに家内の雨漏りが、家主が目には懸らぬか。なぜ此やうに損ねた家を貸し付け、

家賃を催促は致すのだ。この雨漏りを留めねば、家主とて容赦は無いぞ。

ト李郎兵衛慄へ

李郎 ア、御尤もでござりますく。借家は餘程損ねましたが、此やうに漏らうとは、毛頭心付きま

せぬ。これはしたり。イヤ、また漏つて来た。

トいろく思ひ入れ。

くにわたしや御飯も仕掛けにやならぬが、旦那様、マアどうぞして、

山三 コリヤく、いつ迄傘をさして居られうぞ。漏りを留めぬかく。

李郎 ハイく、只今留めますく。

トそこらを尋ね、大盥を見附け

あるぞく。コレく、旦那の上へ、この盥を吊さう。手傳つて下さい。繩は無いかく。心に心得ました。爰にござります。

ト竈の下より繩を出し、大盥を結へ、李郎兵衛、お國、山三の上へよろしく吊上げ

李郎 サアく、これでどのやうな雨でも、請合ひでござります。

山三 成る程、これでは傘を持つ世話も無い。ア、いかう肩が張つて参つた。

ト盥の下へ入り、横になり

コリヤく、其方は爰へ来て、足を撫つてくれく。

みどアイく。





ト山三が足を撫る。

くに私しは小降りなうちに、お飯を焚きませう。モシ、お前様がた、雨やみのうち、お歸りなされませぬか。

ト水加減を見て、焚きつける。

勘六 イヤ、槍が降らうが、勘定の無いうちは、動かぬ。

六兵 さやう。掛けを取らぬうちは、居催促でござる。

彦右 一寸も爰の内は、動かぬ。

ト云ふ内、頻りに雨車、大降りの體。三人堪りかた。

六兵 サア、漏つて来た。誠に虎狼より漏るが怖いとはこの事だ。

彦右 これは大もり、飛んだ茶漬だ。何分居催促も出来まい。

勘六 雨やみまで出直して来よう。

六兵 さうませう。

ト各自冠りし物をとる。火消し壺をかむりし六兵衛の顔黒くなる。小桶を冠りし勘六の顔白くなる。干葉の銅冠りし彦右衛門の顔萌黄色になる。三人の顔、三色になる。李郎兵衛見て

李郎 イヤア、三人の顔が、三色々々。

勘六 そんならおれは白くなつたか。面は變つて、雨には濡れ

彦右 こゝらで狂歌は、斯うであらうか。

李郎 何とく。

彦右 おれ青く、お前は白い面なるに

六兵 何とてわしは黒くなるらん。

李郎 掛取りよろこべ、歸りは素的に、濡れるわやい。

三人 何を云はつしやる。……ソリヤ又、降り出すぞ。

ト糸立、蓆なぞを冠り、雪駄を下げ、腕捲りして、一散に駆け入る。お國、釜の下を焚きながら

くに コレ、禿さん。旦那も御寢になつてぢやさうな。お前もちつと奥へなと行て、わしが借りて來た

草双紙、それなと見て、花魁のごさんすを待ちなさんせ。

みど そりやア嬉しうおすが、また漏りはしんせんかえ。

くに イヤく、雨はすつかり上がつたわいなア。

みど そんなら行つて、見ようかいな。

ト合ひ方になり、障子の中へ入る。李郎兵衛思ひ入れあつて

李郎 さて、山三どのは寢入るし、禿は奥へ行くし、コレお國、この間わしがわが身へ附けた文の返事を

ト手を取り、いろくと思ひ入れ。

くに アモシ、悪い事なされますな。わたしや、左様な事は。

李郎 ナニ、悪いものか、随分好いものだ。コレ、爰でおれに

トしなだれる。お國門口へ逃げる。李郎兵衛追ひ廻す。こゝへ下座より若い者一人、走り出て、李郎

兵衛を捕へ

若者 モシく、李郎兵衛さま、人別がござります。今、お出でなされませ。

李郎 イヤ、そこどころではない。ちつと此方に人別が

若者 ハテ、組合ひの衆が待つて居ります。

ト李郎兵衛を無理に引摺り、下座へ入る。この時、暮れ六つの鐘鳴る。お國思ひ入れあつて

くに あの家主様がござんすと、逢ふ度々に、うるさうてく。……コリヤもう日暮れ。どりや、灯を

つけて

ト合ひ方になり、火打箱にて短檠の灯をつけて、山三が枕許へ持ち行き、思はず寝顔に見惚れ、懐よ

り前幕に貰ひし錦繪を出し、山三の顔と引合せ、見る事あつて
 いつぞや拾うたこの錦繪、此やうな殿御もあらうかと、思つて居るに、旦那のお顔がこれ程までに。
 ト錦繪を山三の顔と引合せ、思ひ入れ。この時、山三寢返りするゆゑ、お國ちやつと懐中なし、そし
 らぬ顔にて

ほんに、買つて来たこの酒、手の附けぬうち、お神酒に上げて
 ト荒神棚を見て

これはしたり。また徳利を鼠が落したさうな。徳利の出るまで、この銚子でなりと

ト誂への銚子を取つて、利の酒を少しつき、火打にて銚子へ切火打ちかけ

お神酒徳利の出ますまで、御免なされて下さりませ。これで上げまする。

ト荒神棚へ上げる。この時、向うバタ／＼、人音して

大勢 泥坊々々。

ト聲して、向うより又平、懐へ男帯を入れ、駈けて来て、一散に内へ逃げて入り、キヨロ／＼する。

お國惻りせしが、よく／＼見て

くにヤ、お前は父さんぢやないかえ。

又平 娘、ちつとの内、隠してくれ。

トうろ／＼する。向うより長八、湯屋の番頭のこしらへ、仙八、流しの三助にて、その外、仕出し大

勢出て来り

皆々 向うの内へ入つた。

長八 なんでも取返さねば云ひ譯がねえ。

仙八 番頭さん、逃がしなざるな。

ト此せりふ云ひながら、門口より又平を見つけ

皆々 ソリヤ、爰に居るワ。泥坊々々。

ト皆々寄つて、又平を捕へ、門口へ引出す。お國驚き支へる。

又平 コレサ、どうするのだ。

長八 どうするものだ。来やアがれ。

ト引ツ張る。

くにア、これいなア。お前がたは、老人を捕へて、どうしなさんすぞいなア。

長八 コレサ、姐さん、構ひなさんな。わしはこの新道の瀧の湯の番頭だが、この親仁が度々来て、板

の間を働くが、今日も無くなつた物があるから、追ッかけて來たのだ。退かつしやい〜。
仙八 連れて行つて、油煙を塗りやせう〜。
皆々 泥坊々々。

ト立ちかゝる、お國留める。

くに これはしたり。どうしてマア其やうな事を。

又平 おらア何も盗つた覚えは、無いぞ〜。

長八 コレ、人の目からは、女湯ばかり見て居るやうに見えても、どこの棚へは、どの人が脱いだとい

ふ事は、百も承知だ。ハテ、われが盗つたに違ひはねえ。出せ〜。出しやアがれ。

くに モシ〜、番頭さん。して、この人が何を盗りましたえ。

長八 その代物は、博多の男帯。懐を探せ〜。

又平 わしは何も盗んだ覚えはねえが、それとも疑はしくば、懐でも探せば知れる。ソレ、見ろ〜。

皆々 改めるがい〜。

ト立ちかゝり改める。何も無きゆゑ

又平 それ見たか。懐には何も無いワ。

長八 懐には無いが、背中を探せ〜。

皆々 後ろへ隠したなく〜。

ト皆々立ちかゝつて吟味せんとするはずみ、背中方より件の帶落ちる。

仙八 そりやこそな。

長八 サア、どうだ。太い奴だ。コレ、よく積つて見ろ。定りより二文づゝ込まれ、四文が糠で白水を

流させ、その錢も拂はず、板の間まで拵がれては、其方は好いが、此方は渡世が出來ぬワ。なん

ほおれの面が、軽石のやうでも、さう踏み附けにされてなるものか。大泥坊め。

皆々 ぶちのめせ〜。

ト立ちかゝるを、お國とめる。

くに ア、モシ〜。悪いながらも老人でござります。どうぞ御料簡なされてお遣りなされませ。ハ

イ〜、私がお詫び申しますわいなア。

ト取継り、詫びる。皆々思ひ入れあつて

長八 エ、見せしめの爲に連れて歸つて、縛つて置かうと思つたに、この女中が挨拶だから、料簡す

るワ。重ねて來るな。

ト件の帯を取る。

皆々 エ、太い奴だ。

ト合ひ方になり、皆々捨ぜりふにて入る。

又平 大笹坊め。帯一筋で縛られて堪るものか。間抜けめらがし打たれるなら打つて見ろ。縛らねえか。

ト行かうとする。お國絶つて

くに ア、コレ、何をマア、みんなお前が悪うござんす。今度ばかりか、毎度の事、盗み心のあるお前。どういふ事か年寄る程、お前は悪い心が増し、もう、どうぞその心を直して下さりませ。モシ、拜みます。

又平 コレ、娘。おれの心を直したくば、親に不自由の無いやうに、われが方から金銀を送つてさへくれ、ば、ツイ直る病ひだが、何をいつても一文無し。それだから旦那へ願つて、金でも借りてくれまいか。

くに どうしてマア、旦那様は、御浪人の便り無し。殊に、廓に馴染んだお方のある御身。物入りこそあれ、貯へとは

又平 一文無しの素浪人。そんな主人に奉公するわれが悪い。それといふのも、爰の山三に、日頃から

われが惚れて居るから

くに ア、申し、どうしてわたしが

又平 イ、ヤ、わりや、惚れて居る。

ト大声にて云ふ。これにて山三目を覺まし、思ひ入れあつて

山三 ア、誰れぞ居ぬか。

くに ハイ、御用でござりまするか。

山三 茶を一つくれ。

ト起上がり、あたりを見て

ア、もう暮れたか。……そこに居るは、國が親の又平ぢやな。

又平 ハイ、左様でござります。大きに御無沙汰を仕りました。御機嫌ようて、おめでたう存じます。

山三 随分機嫌は好いが、只吉原へ行く事が心に任せぬゆゑ、こればかりは機嫌が悪いぢや。コリヤ、國よ。

くに ハイ、御用でござりまするか。

山三 今宵、太夫が身上がりをして來るとある。おれも太夫の歸りに、連れ立つて行かねばならぬ。身の廻りの支度は好いか。

トお國當惑の思ひ入れ。

くに ハイ〜。随分よろしうございます。あの濡れ燕のお小袖は、外へ預けて置きました。

山三 そりやまアどこへ、なぜに預けた。

くに イエモウ、雨は降りますし、用心は悪うござりますし、お小袖の分は、いつもの編笠茶屋へ預けて置きました。あれにてお着替へなされませ。

山三 オ、よし〜。あれが許にて着替へて行かう程に、必ず間違はぬやうに致せ。

くに イエ〜、間違ひまする事ぢやござりませぬ。……父様々々。

ト又平を連れ、門口へ來る。

又平 娘、何ぞ用か〜。

くに イ、エイナア、旦那があのやうに仰しやれど、このお暮らして、どうしてお召し物がお内にあるものか。有り様は皆質屋へ。

ト又平に囁き

これ程無ければ

又平 成る程、その入れ替へは、爰の内では、むづかしい。マア、何しろ、家内の道具を掻き集めて來るがよい。

くに さうしやんせう。お前も手傳うて下さんせ。

又平 合點だ〜。

ト二人して、奥より小道具を、山三に見えぬやうに運び、風呂敷に包む。

山三 身共は太夫が見えぬうちに、心のたけを文に書き、彼奴に見せてくれやうか。

ト硯箱を引寄せ、文を書き居る。お國、件の風呂敷包みを背負ひ、片手に屏風を下げ、質の通ひを持ち、山三に見つけられぬやうに、兩人いろ〜思ひ入れあつて

くに 左様なれば、私は、太夫様のお出での前方、お小袖の事に行つて参りませう。

山三 オ、大儀ながら、行て來てたも。併し、跡に誰れも

又平 ヘイ〜、私しが居ります。

山三 オ、又平、居てくれるか。

又平 左様でござります。

くにドリヤ、一走り。

ト立戻り

コレ、父さん、飯が仕掛けてあるぞえ。

又平 オット、合點。

くにドリヤ、行つて來うか。

ト唄になり、お國、風呂敷包みを擔ぎ、向うへ入る。

又平 飯が仕掛けてあるといふが、燃えて居るか知らぬ。

ト竈のあたりを見て

南無三、飯の下は消えて居る。もつと薪をくべて

ト竈の下を見て

これは大變、薪が一本も無いワ。……モシ、旦那様、お飯を炊きまするに、薪が一本もござりませぬ。どう致しませう。

山三 ア、面倒な。何なりと焚けさうな物を見附けて、焚いて置きやいなう。ナニ、別しても無い事を。

ト構はず、文を書いて居る。又平思ひ入れ。

又平 それにしても、薪が無くつては、飯が出来まい。ア、何ぞ焚き物を

トあたりを見廻し、こなし。

有るぞく。根太板を剥して、あいつを焚いて。それく。

ト畳を取り退け、根太板を引出し、好き程に折る。この音を聞き、李郎兵衛、路地より出て來り

李郎 なんだ、あの音は。ア、又、山三どの、内で、根太を剥すのか。ア、悪い店子に困り果てる。

引渡さうにも店請けは無し。とんだ者に店を貸した。

ト内を覗き

さてこそ剥すぞ。……コレく、根太は御免だ。もう好い加減に剥さぬか。

ト戸を開ける

又平 剥せば悪いか。

李郎 悪くなうてか。地主へ立たぬワ。

又平 ア、お前は家主だの。

李郎 さうよ。店賃は寄越さず、おまけに根太板を剥されては、家主がどこで立つものか。

又平 それでも、飯を炊きかけて薪がござらぬ。

李郎 ア、薪の代りか。イヤ、呆れたものだ。

又平 モシ、大屋さん。ちつとのうち、大目に見なせえ。

李郎 そんなら今夜は大目に見るが、明日からは小目に見るぞ。

又平 明日の事はおらア構はぬ。

李郎 ハテ、宿六に云ひつけさつしやい。……殊に、この節は物騒だ。路地を締め切りにしよう。

ト合ひ方になり、五つの拍子木鳴る。又平、板を折り、釜の下へ焚く。李郎兵衛錠を出し

締りますく。

ト花道へ錠を振りながら、捨ぜりふにて行き、路地の口へ錠を卸し、歸りくる。よき程に、勘吉、若い者の拵へにて、揚げ幕の路地を叩き

勘吉 お頼み申しますく。

李郎 エ、今締めたに、誰れだよ。どこへござるのだ。

ト捨ぜりふにて、又歸りくる。

勘吉 お長屋の山三さままで参ります。

李郎 いま締めた。早くござればよいに。

ト錠を出し、路地を開ける。これにて勘吉引返し入る。李郎兵衛、小言を云ひながら、路地をあける。

直ぐに歸るのかえ。

トこの時若い者一人、ズツと大提灯を提げ入る。李郎兵衛惘りする。これより摺り鉦入り、出の唄になり、上林の葛城太夫(實は岩橋)、跡より禿一人附き出る。若い者、長柄を差しかけ出る。跡より勘吉、

新造、藝者、若い者、三味線箱を持ち、翳間左吉、あとより若い者、二人、臺の物を持ち、この人数、路

地の中へ通る。李郎兵衛、肝をつぶし居る。葛城、門口にしゃんと立つて

葛城 逢ひたさに、今宵くるわの夜櫻を、後に見なして雁がねの、聲もろともに来て見れば、爰がおも

はく主さんの

左吉 深間のお客の、たしか別荘。

新造 根岸、三の輪に事かはり

藝者 ひねつた寮の一構へ

勘吉 五大力なら大和町

左吉 鳥越町の裏借家。モシ、葛城さん。

李郎 そんならこなたが評判の、上林屋のお傾城。

皆々 葛城さんぢやわいなア。

李郎 イヤア、道理こそく。併し廓に程近き、この鳥越の裏店の、三尺路地を道中とは、こりや、年

代記に載るであらうよ。

左吉 無駄を云はずと、大屋さん、山三さんのお宅へ案内。

李郎 わしが店子の山三どの、今宵は内にぢや。

葛城 そんなら逢うて、何かの話を

皆々 太夫さん。

葛城 子供、来や。

禿 アイイイ。

ト清掻になり、皆々内へ入る。奥よりみどり出て

みど 太夫さん、ござんしたかえ。

ト山三これを聞き

山三 ヤア、太夫。来やつたかく。

葛城 山三さま。この程は、すつきり廓へ

皆々 お見限りでござりまするなア。

山三 ようマア皆も来てくれた。マアく、爰へ来やく。

ト盥の下へ葛城を連れ行く。皆々見て

若者 モシく、旦那、このマア吊つた物は、何でござりまするえ。

山三 この盥か。こりや今まで雨が洩つたによつて、防ぎの爲に、吊して置いたのぢや。

皆々 エ、そんなにお内が洩りますかえ。

山三 洩るともく。今まで内よりか、外がましであつた。コレく、てまへ達も、そこらはぬからう

程に、氣を附けて坐りやれ。

勘吉 イヤア、それほど爰のお内は、道が悪うござりまするかえ。

又平 モシ旦那、お客があつても、幸ひ爰に酒はござりますれど、肝腎のお肴がござりませぬ。

ト一升徳利を出して見せる。

左吉 その心配は御無用々々々。肴は即ち花魁のお持たせ。若い衆、爰へ持ち込まつせいく。

若者 心得ました。

ト件の臺の物を吊込み、好き所へ直す。李郎兵衛見て

李郎 こいつは飲めるワ〜。山三どの、店を追はうと思つたが、斯ういふ様子を見ては、わしが店に
幾久しく、松杉をお植ゑなされて下さりませ。

山三 ハテ、家主めが、受けをつたなく。……して、葛城は、どうしてマア、今宵、廓を。

葛城 さいなア。旦那様に願つて、これまで例しの無い趣向。僅かの間を断りいうて、大門から早駕籠
で、この入口でわたしが支度。仲の町と違つて手狭ゆゑ、大きに難儀を

新造 さうでござんす。太夫さんの頭の道具が、兩側へ觸るやら

藝者 外八文字の振出しあゆみ、下水の板から危なう見え

勘吉 さしかけてくる長柄さへ、物干へ觸るやら

又平 併し、そこが花魁の、稽古の爲には、肝腎々々。

山三 ナニ、太夫の稽古とは。

又平 どうでお前と女夫におなりなさるのは定の物。さすれば屋敷でお暮らしなさるか、また此やうに
裏借家か。夫婦住居のその時は、水も汲んだり、飯も炊き、薪も割らねばなりません。

李郎 互ひに手鍋を提げ合つても、夫婦暮らしは女の情。併しお飯の炊きやう、知らずばなるまい。モ

シ花魁

山三 成る程、又平の云やる通り、葛城、其方も習つて置きや。

葛城 そんなら、お二人さん、どうぞ教へて下さんせ。

又平 ハイ〜、承知々々。大屋さん、店子の事だから、お前教へて。

李郎 教へます〜。併し、口教へては覺え憎いから、輕業の口上で教へて上げませう。お前がた、鳴
り物を頼みます。

皆々 心得ました。三味線、胡弓、持つて來さつし。

ト箱の中より三味線、胡弓、その外、鳴り物を出し

又平 サア〜、始めさつせい〜。

ト輕業の鳴り物になり、皆々手んでに鳴り物にかゝる。李郎兵衛、竹柄杓を葛城に持たせ

李郎 さて〜〜〜、さて花魁。お飯炊くなら、始めちよろ〜、中くわつくわ。赤子泣くと蓋
取るな。これがお飯の炊きやうぢや。

ト此うち鳴り物、片脇より干大根と粗板を持出し來て

さて〜〜〜、お汁するなら、味噌をよい程、摺り置きて、沸え立つ程に此方では、若芽、大根、

干葉、豆腐、汁の實刻むは干大根。この庖丁を斯う持つて、ちよつきりちよいと斯う切つて、残つた所は、はりくと。……さてくくと、もう飯が出来たかく。匂ふワ。

李郎 匂ふかく。もしやまんまが、片煮えく。

ト釜の前へ行き

水の加減かく。

トよく見て

東西。

ト鳴り物打上げる。こなしあつて

仕方を持ちまして、まんまと首尾よく

皆々 どうだ、出来たか。

李郎 とつと焦けたり。

皆々 おきやアがれ。

ト李郎兵衛、思はず下家へ踏込み、驚き

李郎 アイタ、い、誰れか縁の下で、おれの足を引ッ張るやうだ。

皆々 ナニ、誰れが縁の下に居るものか。……ソリヤ、引揚げるぞ。

ト皆々李郎兵衛を引上げる。縁の下より犬一疋出て来る。

ソリヤ、病犬だ。

ト皆々騒ぐ。李郎兵衛、路地の中へ逃げて入る。此うち、新造、祝儀の包み金を、各自へ渡す。

新造 旦那、花魁から。

皆々 エ、有り難うござります。

又平時に、折角お出でだが、花魁は暇どつてもいゝのかの。

左吉 そこは我れらが呑みこんで、上林の内證は勿論、會所へちよつと届けて來ませう。

新造 わたしも一緒に、暇どる様子を

藝者 會所へわたしも参りませう。

皆々 左様ならば、山三さま、跡でしつほり

山三 また悪口を

皆々 ハテ、おしけりなされませ。

ト唄、時の鐘になり、又平奥へ、皆々残らず向うへ入る。山三、葛城残り、合ひ方。

葛城 山三さん。して、お前の親御の敵の手が、り、その節失せしお家の系圖の

山三 今以て行くへ知れず。殊には親人の差し料、無針なれども國俊の、劍を奪ひ立退く曲者。今、一

振りは、山三が方に所持する刀、陰陽二つの劍にて、寸尺揃ふ二振りの、白刃は何方の鞘へなと、しつくり合ふが、これ名作。

葛城 わたしもいつぞや鎌倉にて、この身の越度にお暇の、その節お前も御浪人、貢ぎの爲と身を沈め、

いま吉原で葛城と、辛い苦界のその中で、わたしへ心を掛けて居る、伴左衛門もこの程は、白柄組の頭分、その名も寺西閑心さん。

山三 廓に來るといふ事は、ほのかに聞いたそれゆゑに、其方に逢ひたう思つた譯は、心憎き伴左衛門、

正しく系圖も、親人を、討つて劍を奪ひしも、彼奴が仕業と思へども、手が、り無ければ、これとても

葛城 そりや氣遣ひなさんすな。夜毎に通ふ伴左衛門、わたしが屹度その詮議。……さはさりながら、

かねてお前も御存じの、素性賤しきわたしは捨て子。

ト頭に挿したる割り筭の片しを取つて

後藤祐乗が蘆間の鷺。包んでありし書附けに、四十二の二つ子ゆゑ、捨てるばかり、親御の家

名、實名も、今にそれぞと知れぬ身の、便りに思ふ山三さま。

山三 その元春も、今の身は、尾羽打枯れし浪人の、我れに劣らぬ兄弟の、契約なせし白井權八、彼れ

も失ふ神妙劍。詮議の爲に正しく廓へ。

葛城 さう云はしやんすりや、この間から、三浦屋へ通はんす、扇蝶さんといふお方。似寄りと思ふに違ひなう、そんならあなたが、たしかに白井

ト云はうとする。

山三 アコレ、必ずその名を沙汰せぬやうに。……ア、思へば思ひ廻す程、今の山三が朝夕の、煙も細

き浪々を、貢いでくりやる志し。コレ、手を下けて、禮を云ふぞや。

葛城 これはしたり、譯も無い。他人がましい。現在女房に

山三 サ、その女房に、勤めをさする

ト思ひ入れ。

葛城 エ、まだかいなア。

ト山三に寄り添ふ。唄になり、向うよりお爪、遣り手にて先きに立ち、以前の人數、残らず、大提灯